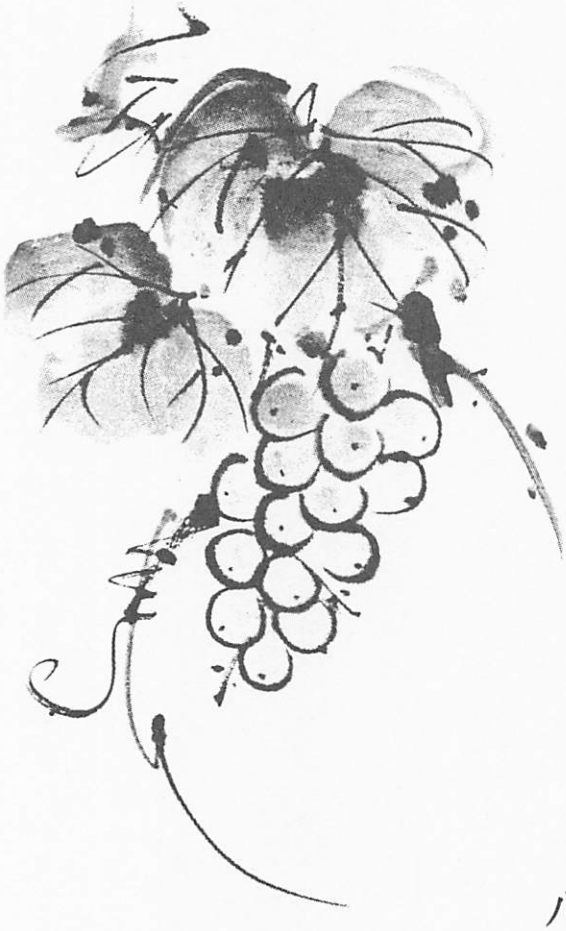
ぶどうの木

第 22 号



基督伝道隊　八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言 …… 榎本利三郎 …… 1
洗礼を受けるにあたって …… 石井勝三郎 …… 2
石井二三子 …… 2
感謝 …… 久保田宮子 …… 4
心の風景 …… 山中　良美 …… 6
夢幻の中で …… 大田　敏夫 …… 11
神様の栄光 …… 大田　邦子 …… 16
雪のあしたに …… 上野　米子 …… 49
阪神・淡路大震災
被災地視察報告 …… 正野　真宏 …… 50
雑詠 …… 榎本利三郎 …… 56
永遠の課題（ローマは一日にして成らず）
緒方とみ子 …… 58
自転車盗難事件その二 …… 畠山　英子 …… 59
二回目のＯＢ会 …… 久保田宮子 …… 62
祝福された一年 …… 金生　一郎 …… 63
岐路 …… 緒方とみ子 …… 67
わかれのあいさつ …… 伊規須太郎 …… 69
救われた者の幸い …… 高木ツルヱ …… 72
主に全てを捧げし輝ける生涯 …… 綾部　時男 …… 77
我が思い出（四）
中国（旧満洲）編 …… 鈴木　一幹 …… 83
主の御計画
～住について想う～ …… 野村美恵子 …… 90
結婚問題について …… （参考資料） …… 97

巻頭言

榎本利三郎

わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。

（ヘブル書　十二章一節）

此の一年の間に、主が私共一人一人をねんごろに導き、多くの果実を結ばせて下さいました。先輩が信仰の善き戦いをたたかって、多くの善きあかしを残して呉れました。収穫の季節に主の聖前に感謝の果実を献げさせて頂きます。

今年は暑さが酷しかったが、ぶどう・柿・梨・栗…等の果実の成熟には欠く事の出来ないものでしょう。ぶどうの木に連なる私共に、多くの美味しい果実を豊かに実らせるために、最善の御取扱いをして下さいます。その時多くの証人が私共を力づけ励まして呉れます。更に信仰から信仰へと枝を伸ばし、主に喜ばれる多くの果実を結ばせて頂きましょう。

洗礼を受けるにあたって

石井　勝三郎
二三子

神様は仏様も八百萬の神々も皆一緒。それが三年前迄の私達でした。

私達夫婦の仲は先ず先ずといったところで、結婚歴四十年、何の取柄とてない平凡な暮しでした。一人の娘に三人の男子、子供運にも恵まれた一見幸せな生活が私達を覆っていました。

しかし、好事魔多しとか申します。昭和五十八年四月、私の経営する工務店は、構造不況の名のもとに見事に足元をすくわれ、倒産するという、言葉に尽くせない悲惨な道をたどりはじめました。苦しい最中に長女の結婚、長男、次男、三男と大学だけはどんなことをしてもと、次から次への出費、手の負えない様な日々を送りながらも、妻は一言の不足を言わなかった事が、私にとっては救いであり大きな支えでありました。会社も、第二会社の設立を見、少しでも負債の決債につとめることが出来たのは、私達夫婦にとりまして僅かばかりでも心の喜びでもありました。

しかし、綱渡り的な生活もいつまでもうまく行くとは限りません。平成三年三月、決定的なことが起こりました。次男の結婚式と同時に、三男進の発病であります。腎臓病という手に負えない厄介な病いを背負ったのです。大学四年生に進むときです。この時私は神をうらみました。この世に神はいないと心底思いました。私の信じた神は八百萬の神々であり、みちばたの道祖神であり、シメ縄をはった狸穴まで信心の対称であったからです。それもそのはず、般若心経から長い長い神主が唱える祝詞も空んじるという、熱狂的日本人独持の神仏混合の私でしたから、色々な神々のお札を有難く大事に毎日を拝していたのですから。闘病生活が板について来たその夏、病院長の許可を貰って闘病仲間と大分に一泊旅行に出て行きました。その嬉しそうな四人の仲間の一行を私は忘れることが出来ません。背の高いやせたHさん、背の小さなY君、頭丸坊主の何とか教の坊主のOさん、そして私の息子と、腎臓を病んだ人の後姿は、何となく物悲しく映るものです。闘病相あわれむその四人の一晩の話題は何だったのでしょうか知る由もありませんが、帰って来た時、キリストへの帰依を考えていた様でした。闘病と同時に腎移植の話が進み、一日も早い社会復帰を願う息子の態度に、私達も答えてやらなければなりません。私の腎をやることを聞いて息子の顔は晴ればれとして来たのです。でも腎移植を熱望しても貰えない方もあるのです。同病の仲での羨ましい視線を

浴びたり、ねたまれたりもあった様でした。移植手術は平成四年の二月の予定だったのですが、どう言うことでしょう、何とその年の十二月二十四日クリスマス・イブの日と決まったのです。今にしておもえば、進はすでに神の子として嘉みして下さったのでしょうか、クリスマスプレゼントだと、とっても喜んだものでした。

手術は順調に終り、麻酔からさめたとき思わず皆様に手を合せたものでした。術後二ヶ月、息子も快方に向い、今日はお風呂にはいれたよと、退院の近いのを感じていたのでしょう、サバサバした顔つきでベットの上で私と家内に向って「お父さん僕はキリストに帰依しようと思う」、と真剣な顔付きで話しかけて来ました。私も可愛い我子の願いを受けて「お父さんお母さんと三人で一緒にはいろうよ、幸い木田さんに懇意に願っているのでお願いしよう」と申しましたら、とても喜んで呉れました。その日は三人肩を組んでベットに座ったものでした。その時は、数日後に一生の別れが来ようとは神ならぬ身、思いもつかなかったのです。

急激な病状の変化、拒絶反応の恐ろしさ、急性肺炎による呼吸困難、アレよアレよの内バタバタと悪化していきました。懸命の医師団も手の打ち様もなく、刻々と迫る死との対決、息子も闘いました。酸素吸入の呼吸器をつけて、筆による意志の伝達、手を握りしめて手で合図をする、つききりの看病が出来たのも幸せでした。

三月二日は家内の誕生日ですが、苦しい中から「お母さんおめ出度う」と書いて渡しました。あの苦しみの中で私達はオロオロしていたのに、なんだか叱られた様でした。三月三日はついに移植した腎臓も働きが弱まり、人工透析をすることになりました。息子は「折角貰ったのに、しまった、とうとうだめにしてしまった。当分は透析で間に合わせるか」とじょうだんを書き送って弱々しい笑顔をみせました。おひな様を枕元においてやりました。しげしげと見つめ、よくみえる所へおいて呉れと、段々に幼な顔に戻って行きました。その晩は最後の力を振りしぼり、人工呼吸器を手で押え、床に座って食事をし、人を遠ざけてカーテンを巡らし大便をし、なんだかほっとした様でした。死の瞬間まで人の手をわずらわしたくないといった心づかいがみえました。

二十六才の若さを燃しつづけ、正に尊厳死を自から願い、キリストの使徒としての死を願ったものかと私は信じています。

以上が、私達夫婦がイエス・キリストに帰依する直接の動機であります。榎本牧師により、息子の死顔の頭に王環を、エリに花を飾って下さいました。親としてこんなに嬉しいことがありましょうか。

洗礼を申し出ましたその後、榎本牧師よりキリスト教徒としての信仰生活の心得等色々と御指導いただきました。その後雑談になりまして「実は私が使っている聖書は死んだ息子の聖書です」と申しましたら、手に取って頂きました。八幡高校入学の時、頂いたものでした。あまり読んだ跡はありませんでしたが、ページ離れがよく、私の購入した聖書より使いよいのです。

矢張り進はキリスト教徒になるべき人であったと心底思います。心の優しかった息子には、高校、大学の友人が大勢います。度々おとずれて花を上げていって呉れるんです。有難いことです。

お陰で私達夫婦は、年を取ることを忘れてしまったかの様です。それもそのはず、主イエス様と若い青年と毎日話をしているのですから。いつまでも若く元気で、神のお召しのある日まで、清く、神の使徒としてふさわしい生活を送れます様にと願っております。

感謝

久保田　宮子

詩篇第一二六篇五節

「涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。」

と聖書にあります様に、真実な神は我が家から奇跡を起こして下さり、約四十年の親子の対立を仲良くして下さって感謝の日々で御座居ます。

今改めて思うに、子供達夫婦には子供がなく本人の希望で東京より脱サラ、ハンバーガー店を経営しました。戸畑の水があったのでしょうか嫁はすぐ妊娠し女の子に恵まれました。現在二年生です。

何しろ二人とも商売はずぶの素人、私も商売は嫌い、ただ主人だけが商売人の長男で育っているのでわかっていますが何しろ満期前の一番忙しいサラリーマン、若い女の子二人をパートで手伝ってもらって始めました。最初は珍しさもあって、この辺でこんなに子供がいるものかと驚く程繁栄しましたが、段々と経営が危うくなり、息子は保険会社に就職し、この一月に店を閉じました。（現在住居にしております。）嫁も勤め始めました。

さて、嫁も娘も仕事を持っていますので、孫の為私の出番です。新聞で読みましたが、『人間にとって、必要とされ役に立つと言う事は素晴らしい生きがいであり喜びです。それを探すのは「老いじたく」だと思うのです』、とありました。私はこの記事を見て感動しました。日曜礼拝は孫と共に、水曜の祈祷会、金曜会と出席させて頂き、午後は市場で盛物の安いのを買って、三軒分の料理を大鍋で作ります。一品だけですが、下手な私の料理でも喜んで食べてくれるので、嬉しくて張切っています。孫の帰宅時間には「お帰り」を言ってやりたいので留守には出来ません。少し横道にそれましたが、この度主人が背広を新調した際、嫁が色々とお世話してくれました。嬉しかったのでしょう、コーヒーを一緒に飲んだと聞いて嬉しくて嬉しくて、榎本先生にすぐお便りを書き、又今まで心配をかけた親族の方にも事情を話してお礼を言いました。普通の家庭では何の事はないでしょうが、私の家では信じられない出来事なのです。それが又昨日は背広の出来上がりに、思いがけなく嫁からワイシャツとネクタイのプレゼント、今度は食事を一緒にした様です。そのお蔭で私は一人寂しく食べましたが、それ処ではありません。嬉しさの方がずっと上で、すぐ神に感謝しました。もう大丈夫。十年前に、『僕は一人息子だから両親の最後を看取りたい』と言って戸畑に帰って来たのが本当になりました。これも嫁と孫のお蔭だと感謝あるのみです。

私には三人の子供が居ますが、これから迎える高令化社会で何と言っても一番お世話になるのが息子の嫁です。又、孫です。今出来上がりの美しい関係を持ち続ける事が出来ます様に祈り続けて行く覚悟です。この書面をおかりして、牧師先生御夫妻、会員の皆様、本当にありがとう御座居ます。私の一番好きな聖句、テサロニケ人への第一の手紙第五章一六節から一八節、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。」

ここまで神があわれんで下さったのですから、親子全員揃って礼拝を捧げる事が出来ます様、祈り手として進ませて下さい。必ずなると信じます。

今思い起こすに、店をたたんだ事が良かったと思います。苦しかっただけに喜びも又大きいのです。聖書の通りでした。苦しみに会う事はあなたにとって良い事です。それによっておきてを学ぶ事が出来ました。有難うございました。

脳はトレーニングによって老化は防げますし、又向上することだって可能な様ですので、しっかり教会と仲良くして、神と人に愛され、あなたの前に立つまで励んで行く覚悟です。

感謝!!感謝!!

心の風景

山中良美

六月十五日

「それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」

（マルコ四・三一―三二）

蒔かれる時には、どんな種よりも小さいが、やがて枝には空の鳥が宿るほどになる。私もこのからし種のようになりたい。

六月十九日

私の心を百パーセント、全部の思いを人にわかってもらうことはできない。自分はやっぱり一人だ、と涙が出そうになる時が、洗礼を受けてからもあった。けれども、それは神様であるイエス様に触れるときでもあった。

一人ではなかった。

全てを知り尽くしていて下さる存在がある。知っていて下さる方がいる。一人ではないことに、寂しさがよろこびになった。

六月二十一日

小さな島の小さな集落に育った。緑の山があり、田畑があり、青い海と空があった。はる、なつ、あき、ふゆ、その季節とれたものをたべ、カレーライスがごちそうだった。にわとりが朝早く鳴いて、ひぐらしの声で夜がふけた。ひよこ草、れんげ草、なしの花、山桜、つゆ草、ひがん花、はぎの花、野椿、それぞれ時を知って咲いていた。夏は虫取り、砂浜をかけまわり、あおい海で泳いだ。秋になれば柿の木に登って柿をとり、稲穂の上を赤とんぼが飛び、冬は枯れ野で野すべりをする。れんげ草でかんむりをあみ、落ち椿で首輪を造る。夕暮れ時、子供を呼ぶ母の声。家族みんなで夕御飯を食べる。冬の夜空には満天の星。時間は季節と共に流れ、私は十八年を過ごした。ふるさとを離れて暮らし、四年目を迎え、神様に救われて、はじめてその恵みの大きかったことを知った。どのような都会に暮らしても及ばぬ、神様が祝されたもう大地に育った恵みをおもった。

六月二十二日

主のこころみ、訓練

主よ、まだですか

まだである
はい、ではもっと待ちましょう
主よ、まだでしょうか
いや、もっとだ
はい、ではもっと低く従います
主よ、まだでしょうか
まだ、まだである
では、もっと低く待ちます
謙遜になり、主が「よし」と言われるまで、待ち望み従ってゆく。
どこかで、与えられたみことばを自分で選んでいなかったか。みことばは神様が必要と見通して、与えて下さっているのであり、私が選ぶべきものではない。みことばを軽んじることなかれ。自分の心にあてはめたり、はずしてみたり、それではいけない。ただ受けるべし。

七月二日　「飢餓対策ニュース」を読んで。
世界中に、物質的に富んだ国と貧しい国がある。日本には飽きる程の食べ物があって、グルメ嗜好など、たくさんのお金をかけて、とどまる所を知らない。世界のどこかでは、想像のつかない数の子供たちが食べることに欠き、戦争の犠牲になり、大人の意のままに利用されている。日本は豊かになり、様々な道楽がはびこった。みんな自分のしあわせを求め、守ることに精一杯。この世の中で、神様が私に求めておられることを、深く、はっきりと知ることができますように。

七月十八日
恥ずかしいと思っていた家のことも、自分の大きな手も神様が与えて下さった、二つとない「よし」と言われた恵みのものであると知った時、変わった。恥ずかしいものではなく、すばらしいものであること。神様が愛してやまないものであること。私の私物ではない。神様のものであること。

七月二十四日
喜びも、信頼もなくなり、私の足は一人歩きをはじめた。
「しかし、私の足はつまづくばかり、私の歩みはすべるばかりであった。」
心から、まごころをもって、一声かけたい。いつも一人席にすわり、じっとしているあの子に。

八月四日
私が生かされているのは何のためか。みにくいこの私が今も生かされているのはなぜか。自分では決して決めることのできぬいのち。

八月八日

これを取られたら困る、という持ち物はない。少しの高かった洋服はあるけれど、なげくほどのものではない。宝石も家具ももっていないし、車もない。誠に感謝である。奢り高ぶる程の給料でもなく、住まいでもない。誠に感謝である。神様が養っていてくださる。

八月十日

S姉のあかしを聞く。主は生きておられる、と言う。

八月十九日

妹が言う、「わたし、彼氏いない歴十七年。」

彼氏が欲しいと言う。しかし、妹よ、神様はあなたに、すばらしい恵みをほどこしてくださっている。神様が用意してくださる伴侶を得るまで、清く保っていて下さることを私は信じています。妹よ、この神様の恵みを喜んで下さい。母に寄せる安心感のごとく、何故に神様にもそれを感じられないのか。ありのままの自分をゆだねられぬのか。

幻　　河野　進

少年の日から見つづけた幻があった
主イエス・キリストを信じ
アッシジの聖フランシスと
越後の良寛さんは　たまらなく好きであった
生涯　清貧で欲はなく
無冠で粗衣粗食をつらぬき
子供や小鳥まで愛し村人からしたわれた
素朴な顔や後姿にあこがれた

九月十九日　午前五時半

私は確かに今誰からもとがめられることもなく食べ、与えられた時間もわずかではあるが、自由に使える。けれど、絶えず頭の中には黒いわだかまりが残り続ける。自由の中を生かされているはずなのに、いつも不自由を感じる。窮屈さの中を生きている感じがする。それは、学校での勉強でも、食べることでも、洋服を買うことでも、家の問題でも、又、自分自身の心においても、絶えずつきまとう。

神様は私に何をなさんとしておられるのだろうか。私が高ぶっているから、み旨を悟り得ないのだろうか。生かされている意味がわからない。このむさぼりの生活から、自分から、解放されたい。汚れた事しか思わない、考えない心から、解放されたい。造られた本分に立ち返り、それにとどまり続けたい。もがき苦しむ自分を見る。

十月五日　早朝

「それだから、あなたがたの天の父が完全であるようにあ

なたがたも完全なものとなりなさい。」

私は汚れて、欠点ばかりの、失敗しやすいもの。また神をないがしろにばかりする者、弱いものである。けれども、そこで「仕方ない」、と安住してはならない。私にはできないけれども、神様ならできる。全ての造り主なる神様ならできることを絶えず覚えて、神様の求めておられるところまで引き上げて頂くことをいつも渇き求めて行こう。神様のきよさにまで変えて頂くことを求めよう。私は今まだ完全ではありえないが、やがての時、神様の前に立ち、キリストと同じ姿に変えられる時にはじめて完全なものとなる。「だから、今はいいや」ではいけない。神様はご自身のみ旨ならば、造り変えることのできるお方である。

十月十八日　午後六時半

食欲のある　しあわせ
ごはんを　おいしく食べられる　しあわせ
あったかい　ごはんのしあわせ
あったかい　みそ汁のしあわせ
健康な時は感じもしない　わからない
食欲のあることがいかにしあわせであり　恵みであるか
主はわたしを打つことによって
教えてくださる。

十一月二十三日　午前六時半

〝緑も深き　ナザレの村よ〟

聞き覚えのある曲だと思っていたら、小学生の頃か中学生の頃か忘れたが、夜十一時の天気予報のうしろで流れていた曲だった。その頃は神様も賛美も知らなかったけれど、あの頃すでに神様のはたらきがあったことを深くおもう。

十一月二十四日　戴帽式　創世記二八章一五節－二一節

「わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう。」（一五節）

このように豊かに養われ、何の価値もない、捨てられて当然の者がかえりみられ、罪人の頭なる者でありながら救われて、神様の選びの初穂として生かされている。日々のパンを与えられ、着る物を与えられ、枕する所を与えられ、神様の栄光を現して行く者として、このように愛されているのに、私の心と歩みはなんとおろかな、汚れたものであるか。不平をこぼし、人をねたみ、ぐちを言い、さげすみの目をあびせ、やさしさも愛のかけらもない。私はいったい何者なので、かえりみられているのか。もう一度、自分の姿を覚えよ。自分がどんなに醜悪な者かを深く感ぜよ。

もはや私が生きるのではなく、私のために死んでよみがえってくださった方のために生きるのである。
　イエス様のために生きる人生へと、どうか全く変えられますように。全ての思い、行い、言葉が主のためのものとなりますように。わたしのいのり。

一月二日

K兄が帰ってきた。あかしを聞く。確実に兄弟は強められ、確信をもって歩いているのを目の当たりにみる。少しうらやましくなった。わたしは確信が持てず、かすみがかかった状態であったから。しかし、主の試みの時であることが示されているゆえ、不思議と私はその中を戦っていく構えが、力が与えられていた。実際には、みことばがちっともひびいてこない状態であったけれども、そこから又、立ち上がる力が与えられることをどこかで信じているゆえに、私は今、落ちているのではなく、確実に信仰の螺旋階段を上へ登っていることを思っていた。

一月二十一日

キリストがこなければ、
ただ神様だけであったならば、
私たちは終わりの日に　さばきに　耐えられなかった。
みんな滅ぼされる者だった。

キリストはさばきの日に
私たちを　とりなす者として　降りてきてくださった。
私たちを救わんと
神が人のかたちを　とられた姿だった。
『信じる』ということだけで
この大きな希望を　私たちにはこんで下さった。

一月二十九日

自分の内なるけがれに打ちのめされる。しかし、主は言われる、「あなたがたの罪が緋のように紅くても、雪のように白くなる。」みことばを信じていこう。
寒さの中を自転車をこぎながら、伝道集会へ向かった。夜空を見上げたら、オリオン座が出ていた。少し下にはシリウスが光っていた。二千年前、一つの輝く星をみてあの博士たちは心をおどらせた。希望をもって、その星を目指して行った。私もキリストをそんなふうにみたいと思った。
盲人は、イエス様が通られる時、「ダビデの子、イエスよ、私をあわれんでください」と叫んだ。何もかもかなぐり捨てて叫んだ。イエス様は言われた、「私に何をして欲しいのか」「見えるようになることです」「見えるようになれ」。盲人の目はいやされた。この盲人のように、イエス様の名を呼びたい。

一月三十一日

外来勤務に降りてから、一カ月ぶりに病棟へあがった。用事を済ませて、帰ろうとした時、喫煙室から声を掛けられた。おなじみの長いこと入院している人たちだ。しばらく話をした。あたたかかった。そうしてもらえる程私はやさしくなかったはずなのに。偏見の目でみることもあったのに。私の制服の色が変わる日を応援してくれていた。私のこころもあたたかくなって、階段を降りた。窓の外は雪がふっていた。

夢幻の中で

大田敏夫

神様の御愛に感謝

あれから夢の様な一年が過ぎました。夢は目が覚めるとウタカタと遠い彼方に消えてしまう筋道も何もないはかないもの。

しかし、今度の入院中見た二つばかりの夢！それは夢と現実がからみ合って、何時までも脳裏から消えない。マザマザとしたものでした。

その一つ、場所は美しい浜辺の広がる白い砂浜。そこから後の山に向かって、数十段の長い石段があって、その上に病院があり、私はそこに入院している。廊下伝いに、先生方の宿舎もある。国境を接して隣の国はイスパニヤ？看護婦さん達は、皆その国の人、皆さん美人で優しく日本語がお上手。私は貝殻拾いをして遊んでいる。

沖からやって来た黒船、そこから背の高い異人さんが上陸して来て、刀を差した警護のお侍さんと何やらヒソヒソ話し、反物らしい献上物をあげている。さて？。

そこはかっての私の職場、真っ赤な情熱の花ハイビスカスの咲き乱れる、南の国種子島か、でもない？。私の生まれ育った

朝鮮釜山の松島海水浴場かも?。沖に仕掛けた大敷網でお魚がよく穫れる。ぶりやさわらや太刀魚が…。私はそれを小さな舟に積んで市場に売りに行っている。病人の私がなぜ?。

＊松島海水浴場は、その昔、私が十九才の時、助膜を患って暫くそこの漁場の納屋で静養したことのある懐かしい思い出のある所。

夜中に榎本先生から電話がかかる。今飛行機で着いたがもう遅いので、明朝五時に病院に伺うと。そして朝早く、お見えになった。

先生は私に、奥様と一緒に撮されたテレホンカードを下さり、「大田さん、私も家内と二人で…あなたも奥さんと二人で…」と堅く手を握って励まして頂きました。私はババさんの差し出した紙に、渾身の力を込めて書いて先生に応えた。

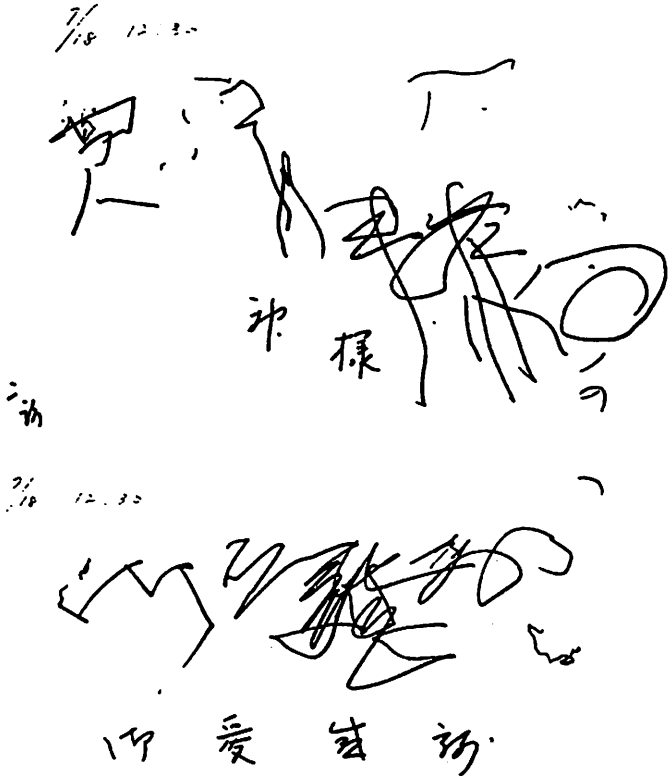
『神様の御愛に感謝』

賛美歌を歌い、お祈りして頂いて、先生は朝一番の飛行機で八幡に帰られた。

ハテ、夢か、幻か?ほかのことは一切夢と消えたが、先生から頂いたテレホンカードと、この字とも絵ともわからぬ書き物は、現実として、ちゃんと残っている不思議!最悪の瞬間が近づき、モーローとした中にあっても尚、主が私の中に働いて下さった七月十八日のことでした。目が覚めて、??の中でイエス様に感謝しました。

この日、ババさんが長年可愛いがって飼ってきた亀の…ノコちゃん…が、私の身代わりとなって天国へ。ババさん、私の看病につきっきりで、ノコちゃんの世話まで手がまわらなかったのです。暑い暑い中可哀想に!ノコちゃんご免ね。

生死の岐路に立たされたこの時、素晴らしい主は、私達の進むべき道をお示しになり、皆様のお祈り、又、家族の者達の祈りに応えて、奇跡ともいえる業をなして下ったのです。



明日もわからぬ毎日の中でも

六月三十日の第二回目の手術、『さあ出陣だ、行ってきます』と手を振って、勇ましく手術室に出掛けたものの、あとは…。

心臓が何度も止まる十二時間を越える大手術となり、担当された先生方も精魂を尽くされたでしょうが、控室でこれを待つババさん達の心配も、辛抱の限界に達し、ただ神様により頼む必死の闘いだったことでしょう。知らぬは本人ばかりなり。

弛緩剤で眠らされ、その後の気管切開、口も手も、訴える手段は何もなくなり、何一つ自分で出来なくなってしまった私。そして十五日、最悪の宣言下る！ガンに侵された胃を取り除いて折角繋いだ食道と腸とを、又もや切り離し、栄養剤だけで生きると？もう植物人間の様になるしか生きる道は残されていない！。

そんな中でもベッドに横たわる私、見える範囲は天井の模様だけ！。それを眺めながら、昔のこと、今のこと、いろいろなことを思い巡らせながらも、…死の恐怖…等、小指の先程も考えたことはありませんでした。苦しみも痛みもなく、楽しいことばかりあれやこれや！ババさんに甘えながら。

天井の模様が変化して、ライオンになったかと思うと、鐘鬼様になり、そして、ヒゲを生やしたイエス様が、『大田さん、早く良くなって教会にお出で…』と優しく語りかけて下さいます。信仰の薄い私にも、こうして、イエス様は常に傍らで優しく励まして下さいました。

家族会や信徒会の皆さんの顔が浮かんでくる。どうして神様は私に、こんなにひどい懲らしめの白羽の矢を？、神様は恐ろしい方だなー、いやいやそうではありませんよ、もうすぐわかりますよと慰めて下さる皆さん！。イエス様の顔も笑っている。ペテロに対するイエス様の様に、子供の私を叱ったり慰めたり、教会はいいなー、天国？はいいなー、ベッドの中も楽しい楽しい幸せな毎日でした。

わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない、
その戒めをきらってはならない。
主は、愛する者を、戒められるからである、
あたかも父がその愛する子を戒めるように。

（箴言三・一一－一二）

再びこの地上に戻されて

長かったベッド生活の六ヶ月、ババさんは辛く苦しい中の全てを、よくメモに残し、これを整理して、『神様の栄光』と題して長文の闘病記にまとめ、神様に感謝のお証しを捧げてくれました。感謝です。

その中で、…今夜は歩いて帰ろう、人目のない夜道をトボトボと。美しい星空を見つめながら、

『…主人も良い時に、帰る所をハッキリとさせて頂いてよかった、あの空にまたたくお星様の様に、イエス様と共に、もう私の手の届かない所に旅立って行くのでは…』

のくだりを読んで、ババさんにも大変な苦労をかけたなーと、思わずホロリ、涙をさそうのでした。

苦しい時もありました。痛い時もありました。喉に突き刺された金属管の取替えの時、あまりもの痛さに、思わず大声をあげて、オシッコを漏らす不覚を！恥ずかしいこともありました。三十分ももたないゴホンゴホン！慌てて、吸入器でタン取りをしてくれる看護婦さん達のご苦労！彼女の顔が天使に見える程の感謝でした。

そんな中で、記念すべき七月十九日、主の栄光の賜物として、奇跡的に『奥さん繁がっています』と、第三回目の手術が回避されてから、一進一退を繰り返しながらも、癒されつつあることが、ベッドの中でも感じられる様になりました。

お盆の頃、「大田さん、もう重病人ではありません、おしっこ位考えて自分でしなさい」と怖い看護婦さんの一渇！（以来彼女のことを愛の…さんと呼ぶ）この一声が、ベッドに寝たきり、自分では何も出来ないと甘え切っていた、怠け者の私の回復への意欲を奮い立たせてくれました。

五十四日振りの感激の水、又、『人はパンのみで生きるのではない』、そのパンすらも食べることを許されなかった私に、二ヶ月振りの食事！声も出る様になり一人で立てる様になった喜び！

『俺も又、元通りに生き返るぞ！』。否、イエス様が元の体に生き返らせて下さったのだ！それからはもう、感謝感謝！リハビリにも元気を出して。

順調にと思っていた十月の中頃、どうしてか？お粥も食べられなくなりました。一口食べては戻し、二口食べては戻す様になり、ババさんの渋い顔！検査の結果、せっかく繁がった食道と腸の縫い口が僅か五ミリと狭くなっている。これでは、お茶すらも通るのが難しい。又手術か？しかし、先生苦心の結果行われたバルーンによる拡張術、その痛さ！「先生もう止めて下さい、死にそうです」と、悲鳴をあげる程の苦しさでした。しかし、そのお陰でご飯も頂ける様になった時の嬉しさ、苦しみの後だけに格別天にも上る喜びでした。『お酒が飲めなくなったら死んだ方がましだ』、遠い昔、誰かがそんな贅沢を言っていましたね。よくも言ったものです。イエス様に守られ、皆さんの暖かいお祈りを頂き、よい先生と看護婦さん達に恵まれた私は本当に幸せ者です。こうして再び、皆さんとお会い出来る

この地上に戻されました。

主に守られて

こうして年末には退院、再び我が家へ。クリスマスにも出席させて頂き、思わぬ劇への飛び入り参加、皆さんから祝福を頂いて感謝の気持ちで一杯です。

しかし、私達の幸せとはうらはらに、年末には尊敬する三好喜代市兄が、続いて又、二月には敬愛する高木敏夫兄が、相次いで天国に召されました。神様の御旨とはいえ、申し訳ない気持です。地上での使命を全うされた両兄に、御苦労様でしたと、謹んで御平安を御祈りするものです。

今私は全てを癒され許されて、再び地上に戻されました。神様有難う御座いました。主の深いお恵みと憐れみに対し感謝の念が尽きません。又、苦しい時に賜りました、榎本先生はじめ皆様の御祈りと御厚情、どれだけ私達を励まされたことか、改めて厚く御礼申しあげます。

一つの大きな節目を越え、新しくスタートする私達のこれからの人生に、神様は何を望んでおられるでしょうか。

今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。　（Ⅰペテロ二・二）

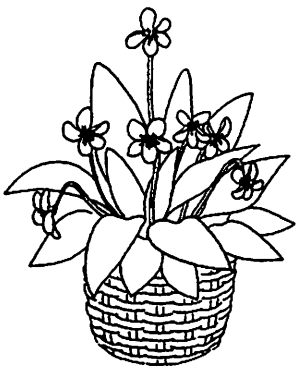
四年前の受洗の時頂いたみ言葉が頭の中に甦って参ります。

お恵みによって生かされ、生まれかわった私達です。これからは神様の命じられる四季の大道をひたすら真っ直ぐに歩き、賛美歌五三二番のみ言葉を常に頭の中に描きながら、感謝の人生をと、心から念願しております。皆様とのお交わりの中で。

それにしても、あの細い体で、不眠不休一日の休みもなく、厳しい毎日を良く耐え、病気にも負けず、付き添ってくれたババさんを、又、三度の食事を忙しい中を休みなく運んでくれた家族の健康を、共に、神様よくぞお守り下さいました。この六ヶ月の最も大きな御恵みでした。

有難う御座いました。万感の感謝をこめてお証しさせて頂きます。

（平成七年七月七日）



神様の栄光

大田邦子

主は王となられた。
世界は堅く立って、動かされることはない。
（詩篇九六・一〇）

平成六年五月三十一日、健康そのものの主人に思いもかけない「胃癌の宣告」、ここから王となられた主が、この様な者を顧み、愛するが故にと成されました主の力強いみ業をもって、真実でいらっしゃる生ける主に触れさせて頂きました。主の栄光を見せて頂きました。主のご計画のあまりの整然さにただ襟を正すのみでございます。

言い尽くせない豊かなお恵みは、私の拙いペンではとても書き現すことは出来ませんが、只ひたすら主とのお交わりの中、十字架の赦しと憐れみによりすがりながら歩ませて頂きました六ヶ月の入院生活を、僅かなメモと記憶を辿りつつ、心からの賛美を以て感謝させて頂きます。

（医療の用語は素人の私、誤りもあると思います、お許し下さい。）

思いもせぬガン宣告

五月十六日　例年の如く私と共に、H病院に定期検診に行く。F先生、レントゲン写真を前に、胃の上部にある微かなくまどりの様なものを指して、「これは多分何でもないと思いますが、確認の為にカメラを飲んで見ましょう。結果は電話でいいですから二十六日にして下さい」。

五月二十六日　カメラ撮影の結果を電話でお尋ねすると、「電話ではお話ししにくいので、三十一日に時間をとりますからいらして下さい」。

私はいやな予感がする。

五月三十一日　H病院にF先生を主人と共に尋ねる。F先生、「食道から胃に入る入口に潰瘍があり、その中に疑わしい組織が見つかりました」。「疑わしいとは癌ですか」。「そうです」。気の早い患者と明快な先生のやりとり、そして早期であることを告げられ切除手術を勧められる。ああやっぱり！、私はためらわずに、手術が一番と心に決め、まず早期発見を感謝する。主人も決断の早い方ですから冷静に受け止めてくれるものと思っていた。処が…。

実は、五月二十五日、山口湯田温泉での先輩の同窓会に招かれ、夫婦同伴で出席する。会長の奥様が一昨年乳癌の手術を受けられ、お元気で大阪からお揃いでご出席、集まられた皆さん

から「よかったですね」と喜んでのご挨拶。その時、主人が、「今の医学では癌も早期発見なら九八％は完治するそうですから大丈夫ですよ」と、例の軽い口調で。

奥様は、「いいえ、早期どころか、私のは大分進行していましたの」。病気のことは無知に等しい主人が先日新聞で聞きかじったばかり、私はギクッとし、又人ごとかと思って、病んだ方の気持ちが全然わかってない…、奥様に申し訳なく、

「すみません、大変な中をお通りになられましたね…」。

こんな一件があってまだ幾日も経ってない。日頃信頼しているF先生の所見だし、そんなに乱れるとは思っても見なかった。ところが主人は納得せず。

「先生、もう一ヶ月待って、もう一度検査して、消えてなかったら外科治療にお願いします」

「一日も早い方がいいですよ」

先生と私に押し切られた形で、病院も年金か化成か、先生にお任せして、化成病院に決まる。主は最善をなして下さると信じ、全てをお委ねして、主人と共に祈る。

大能のみ手の下に己を低くせよ。時至らば、神汝らを高くし給わん

先ず榎本先生にお電話しお祈りして頂く。帰宅後荒れに荒れました。自分を病人扱いにする。

＊自覚症状も何もないのに…誤診だ。

＊自分は絶対にガンなんかにならない。

＊身体にメスは入れたくない、もう八十才だから死んでもいい。

＊化成病院で検査の仕方が悪かったら年金にする。

等々、声を荒らげて…、日頃の潔よさはどこに。

夕食時には口数も少なく、憮然とし、何を言っても駄目、イエス様はどこに?。日頃あんなに強がりばかり言って、自分の弱さを認めないで、人様の時は簡単に片づけ、自分中心もいい所、勝手な、と…。

私も初めは腹立たしく声も大きくなる。荒れる主人の姿に、今一番恐れられているガン宣告を自分の身に置きかえた時胸が痛み、何も言えなくなる。これも主が許して通される道、

あなたは善にして善を行われます。(詩篇一一九・六八)

ガンに目を向けるのでなく、主に目をとめ、見えるものにではなく、見えないものに目を注いで、主を求めて行こうと、感謝を以て心に決める。

汝我に呼び求めよ、我汝に応えん…(エレミヤ三三・一)

自己主張の強い性格の主人には、常日頃から、罪の意識と赦しの自覚、神を畏れ敬うこと、神様の前にへり下る人になって欲しいと祈り願っていた。又、私も主人共々、生かされている者として、信仰を以て自分中心の生活から、神様中心の日々に

と願っているだけに、この機に身も魂も潔めて新しくされたいと…。

六月一日　祈りに応えられ、今朝は打って変わって素直でやわらかい。朝食の祈りの時、「…私の病を癒して…」と言いかけて、「神様憐れんで下さい」と言い直し、初めて主に寄り頼む姿勢に胸が熱くなる。感謝しホッとする。

今度は私の方に不安がのぞきます。主を求める。

六月二日　紹介状をもって、化成の○院長先生にお会いする。とても柔和なお顔。開口一番、

「とてもお元気そうですね、奥様と一緒で覚悟して来られましたか」

ここでまず緊張がほぐれ、落ち着いてお話しを聞く。親切に詳しく、丁寧な説明、F先生と同じご意見、

「ガン細胞が見られ、検査表には（ⅠⅡⅢ…と段階があり）、Ⅴは確実にガン細胞有りです」

＊「まず早期発見でよかったですね。」

＊「私達は患者さんと接して術後の経過の良し悪しは大体勘でわかり、当ります。大田さんは心身共に元気そうで大丈夫です。」

＊「人間は年老えば誰でも一〇〇％死ぬのです。避けるのではなく、正面からぶつかって行きましょう。これまでの人生色々の中を通って来られたと思いますが…」

＊「胃の全摘は絶対にありません。手術方法は今一度検査をしてから決めてご説明いたします。」

と励まされる。入院手術の日が決まる。

恐れるな、わたしはあなたを贖った

六月三日　久しぶりに戸畑教会の金曜会に近づけて頂く。

私は一つの事を主に願った。私はそれを求める。

（詩篇二七・四）

神様第一の生活を教えられる。

…受けし所の苦しみにより従順を学び…

（ヘブル五・七―一〇）

主のみ心にお従いする姿勢を今一度整え、強めて頂きました。

主人の入院、手術のお話しをし、祈って頂く。

六月五日　聖日、礼拝後、堤先生が驚かれて主人に、成瀬先生が五月十二日、八時間かかって胃を全摘、今、化成病院に入院中と伺い、びっくり。日頃お世話になっている外科医の先生が…。神様は私共の弱さを思いやって、共に戦う助け人を与えて下さったのではないかと…。王となられた主が共にいます故、恐れることはない強くかつ雄々しかれと、み前に立

たせて頂く。

午後、家族会に出席、主にある交わりの皆様からの助言やお励ましに感謝する。病気知らずの主人が、思わぬガン宣告を受け、入院を二日後に控え、この所に至る迄の経過、心境をお話しさせて頂く。

榎本先生が、まだ肉とその思いに先立つ主人に、

「大田さん、神様の前には建前ではなく、本音でなくては出られません。大田さんは、自分には素直だけど、神様の前には素直でないですよ…」

神様の恵みと贖いによって救われた者としての的確なお導き、私もここで姿勢を正して頂き、本当に感謝／幸いなスタートとして頂く。

六月七日　入院、榎本先生にご報告。先生が、

「部屋は何号室ですか」

「二〇六号室です」

「私が肺炎をした時の部屋です」

「エッ／」

先生もあのご重体の中、このお部屋で／不思議な主の導き。

その上、病院が家から近いこと、感謝する。

六月十二日　聖日、病院より主人と共に礼拝に出席する。

Ⅰヨハネ四・一八　Ⅰコリント一三・四

完全な愛は恐れを取り除く…十字架のご愛を示され原点に立ち返らせて頂く。

「あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。あなたの神、主の命令を守り、その道に歩んで、彼を恐れなければならない。それはあなたの神、主があなたを良い地に導き入れられるからである。」

（申命記　八・五―七）

手術前だけに、整えられ恵まれる。帰りがけには、皆さんに「行って来ます」と手を振って、まるで戦時中の出征兵士の様、「祈ってますから元気を出して…」と送って頂く。これが十日前の主人とは思えない。少しおとなしくと頼む位に迄、元気にして頂いて感謝／

玄関で榎本先生にご挨拶、

主人「高ぶらない、誇らないことを教えられました」

先生「すべてを離れて主に近づいて下さい」

主人「ハイ」

どうか主の前に、いかなる時にも謙虚に近づけられます様にと祈る。

帰りの車の中で、「朝から晩まで、神様神様と言っておれない…」と。もうこんなことを言って、今日の聖言はどこに。

でも、神様は全てお見通しでした。

手術に備え、榎本先生より、

恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのものだ。　（イザヤ四三・一）

の聖言を頂き、信仰をもって行きましょう、祈ってますと。感謝。

一回目の手術は順調に

六月十四日　今日は第一回目の手術の日。

よみがえられた主が共にいて下さるからとお祈りして励ます。「いざ出陣」と元気良く手術室に、執刀は院長先生、約四時間半で終わる。

主治医のT先生が、トレーに六〜八㎝位の切除部分を持って来られ説明がある。ああ、思ったより小さい切除でよかった、でもこの位で大丈夫なのかなー。

「病巣の場所が悪いこともありましたが、…これからも定期的にチェックして行けば良いと思います」。

何か今一つひっかかるものを感じる、でも無事に終え、僅かな切除で感謝する。

主が、「あなたは私のもの」と責任をもって下さるのだから大丈夫と信じる。その後の経過は、主の憐れみにより、年を感じさせないすごい回復力、「よかったですね、すごいですね」と先生方も感心する程の順調さに心からの感謝を捧げる。

進行ガンの発見、再手術の宣告

六月二十四日　もう入浴の許可も出、待望の退院もあと僅かと楽しみにしている折、

T先生「奥さん、ちょっと」

主人　「私も…」

T先生「いいえ奥さんだけでいいです」

何か不吉な予感、説明室に入る。

「誠に申し訳ないことですが、このままではお返し出来なくなりました。切除部分の検査の結果、噴門近くの処に、進行性硬化癌が見つかりました。初めの組織検査で、感心しない細胞が少し見られましたが、こんなに深く広がっていたとは全くわかりませんでした。これが進行性でなければ、年齢的なこともあり、そのままでいいのですが、今後絶対に広がるのは確実です。一年過ぎると固くなります。世間で一時騒がれた、タレントの逸見さんの癌と同じです。院長はじめ先生方とよく検討させて頂きました。手術の予定は来週木曜日に…、今度は顕微鏡を持ち込んでやります、本当にすみません」。

術後十日、退院もあと一週間という時に、正に晴天のへきれき、喜びも束の間、愕然とする。前回の説明で今一つひっかかったのが的中した。全て、主が許して通される道、お委ねして主に従って行こうと心に決める。このまま返され再発しても仕方がない処、ありのままを言って下さったことを感謝して受け、先生方にお任せする。

再手術を宣告される先生方も辛い決断と…、「主人にもはっきり説明して下さい」とお願いする。

神様の憐れみで、今度は前回と違って、主人も落ち着いて冷静に受け止めてくれる。でも又初めからやり直し…、術後間もないのに可哀想になる。

主を恐れるものよ、主に信頼せよ。主は彼らの助け、また彼らの盾である。（詩篇一一五・一一）

再手術までに備えられた一週間…、主とのお交わりを持たせて頂き、心の備えと共に、体力作りに励むことを共に心に決める。

手術前日の夕方、堤先生がお疲れの中お見えになって、「医者の立場から何とも言えない、術後間もなく、体力、年令等から考えて…」と、正直に言われ、不安気にお祈りされてお帰りになられた。感謝でした。

T先生から手術前の説明、

「前回と違って異なる臓器（食道と胃又は小腸）を繋ぐので、なるべく安静にしておきたいので、食べるまで一寸日数がかかりますが、よい点滴がありますから大丈夫です。手術時間も前回より少し長く六～七時間位…」とお話しがある。私達も前回に比べ、全てに時間がかかる位で回復を信じていた。

のぞみはうせ、詮方つきれど

六月三十日　いよいよ第二回目の手術の日

恐れるな、私はあなたをあがなった…

十三時　手術室へ、「執刀に当たられる先生方の手を祝し、知恵と力を与えて下さい」と祈る。

二十時　時間は過ぎて行く、不安もよぎる…、主が共にいます故、恐れることはない、ただ信ぜよと…。

「本人が罪を犯したのでなく…、ただ神のみ業が彼の上に現われたのである。無事に手術が終え、身も魂もすっかり新しくなして下さい。これがお出来になられる方は、万物の造り主なる全能のまことの神様だけです。憐れんで下さい。信じ、み手にお委ねします」と切に祈る。

時計の針ばかりが気になる。

汝ら心を騒がすな、神を信じ、又我を信ぜよ。

神の栄光の現われん為なり。

ただ、聖言に支えられ、主のみ業を待ち望み耐える。
二十一時　時間がどんどん過ぎて行く、もう九時、私も一美もいたたまれず、控え室と手術室の廊下を行ったり来たり…。
オペ室は何事もないかの如く森閑として物音一つしない。歩くのも足音を忍ばせて…、異様な雰囲気。
　隣の控室にはもう一組、直腸ガンの手術で主人より一時間遅れで入れられたご家族。終られた様、ドアの音がする。説明室に行かれる処、そこに一美が居合せ、驚くことを聞いてくる。
「先程看護婦さんが、輸血のパックを三袋位持って、急ぎ足でオペ室に入られましたよ…」と。
静まりかえった中に、ピーンと緊張感が張り詰める、やっぱり何かが起きている、胸の鼓動が激しくなる。
「あなたは私の子だよ、大丈夫、神を信じ、又わたしを信じなさい」
と主の呼び掛けに、又立ち直らせて頂く。
二十二時　皆で心を一つにして祈り、霊感賦三三番、賛美歌二九一番を心から賛美し寄り頼む。
　望みは失せ　詮方つきて　心よわり　思いしおれ
　再び立つ　力すらも　なき時にも　神を信ぜよ…
もう十時を過ぎた、静けさが不気味な位、細く静かなバックミュージックが、もの悲しくうとましい。
榎本先生にお電話、「もう遅いので緊急のことのない限り、明朝連絡させて頂きます」と。
先生「夜中でもいいですよ」と優しくおっしゃって下さる。
盾も帰宅させる。
二十三時　執刀された院長先生が「ご心配されていると思い中間報告させて頂きます」と顔を見せて下さる。エッまだ終わってない！。
説明室に入る。先生も大変お疲れのご様子、申し訳なさそうに説明が始まる。
「大変難しい手術でした」。うつむき加減に、
「手術中に心臓停止が四、五回起き、トラブルの連続でした」
全身からサーッと血が引くのを覚え、自分の身体を支えるのが精一杯、
イエス様、耐える力を与えて下さい。
「一回目の心停が五時過ぎ、食道が心臓の後にあるので、小腸と繋ぐ為に、心臓に触れた瞬間停止しました。私の心臓も止まりそうでした。心臓の回復を待って、又始めるので時間がかかる上、もう心臓に障れないので、肺の方から…過去に肋膜炎の癒着があって駄目、又変更、今度は肋骨を

切って、やっと繋ぎました。が途中血圧は四〇に下がる、チアノーゼは出る、途中で手術は駄目かと思いました。心停は、H病院よりの所見での狭心症、それに、前回の手術で体力消耗、臓器も年相応だったのかなーと、誤算でした。申し訳ありませんが、こんなトラブルがあると、麻酔から覚める時、七〇％は死亡、生存率は三〇％、その上高齢でいらっしゃるので…」

死の宣告を受けた気持、又スーッと身から血が引き、頭の中が真っ白になる。

「今、部長が代わって縫い合わせていますので、もう暫くお待ち下さい、後から主治医より詳しく説明をします」

あまりの唐突な変化、何故、どうしてこんな恐ろしいことが?、と頭をよぎる。

「主は王となられた、世界は堅く立って、動かされることはない」生きるも死ぬも主のご支配の中、いかなることが起ろうとも、全てみ手にお委ねしますと心に定める。

見えるものにではなく、見えないものに目を注いで…。

〇時五十分　主治医のT先生が見える。

「手術が終わりました、説明室に」

摘出された相当量の胃をトレーの中で広げたり、鋏で切ったりしての説明。もうこんなこと、どうでもいい、「イエス様、もう一度生命を…、生かして下さい」と…。

手術の説明。

＊胃は半分取る予定が、術後間もなかったので癒着の為、全摘。

＊心停で長時間になり食道がどんどん萎縮するので、大分奥まで切り小腸と繋ぐ（吻合）ことは繋いだけれど、心臓が限界、出血多量、命を取り止める為にも、吻合の確認が出来なかった。

＊肺、肝機能低下、吻合場所については、次の三つのことが考えられる。

①食道と小腸が離れている場合…食事が取れないので致命傷。

②ほんの一部繋がっている場合…非常に危険、組織がかなり変化しているので、回復が悪く、いつ離れるかわからない

③離れていても三分の一位くっついていてくれるならば、時間がかかっても必ず肉が盛り上がり繋がる。

①は考えられない、③であって欲しいと願っています。

病院側も総力をあげ、出来る限りの処置はさせて頂きます。

肝臓の血を取替えることも考えています。

人には出来ないが、神には出来ないことはない、ただひ

たすら主に寄り頼み待ち望んで耐えさせて頂く。

七月一日（金）

一時　夜中申し訳ありませんでしたが、榎本先生にご報告、力強くお励ましを頂く。弱い信仰ながら待たせて頂いた幸いを、しみじみ感謝する。

一時三十分　主人、観察室に戻る。

二時三十分　面会、呼びかけるとうす目をあけ、何かモジモジ言いたげ、人工呼吸器が入っているので駄目、もうろうとしている。ナース詰所では、先生と夜勤の看護婦さんの動きが慌ただしい。

三時　お祈りして、後髪引かれる思いで帰宅、あとは一美達に頼んで…。

六時　病院へ、恐る恐る観察室に…、対面、黄だんが出ているものの、すごく元気な顔、ペンを持って筆談、まず「感謝です」と一言書き、「水飲みたいが、×だね」と、落ち着いた様子。イエス様有難うございました。大きな山を越えさせて頂く。

　ベッドの回りは、血圧計、心電図のモニター、人工呼吸器、酸素、痛み止め、吸入、吸引等の器械群の間に、鼻、口、尿道、胸、お腹の側壁にチューブが挿入、吻合場所の洗浄液が吸引方式で溜められている。右手に血圧計が巻かれ、左手には輸血、抗生物質、もろもろの薬剤…管やコード十三本がつけられ、からまりそうに交差している。緊張感と共に厳しさがひしひしと。これが何時迄続くのだろうか?。

十二時　意外に早く人工呼吸器が外され声が出る。

「オーよかった」「今度はオナラや…」と割合力強い声が、かえってたまらなく切ない。当分飲むことは望めない、手術の経過は勿論判っていない、涙がこみあげて来る。

耐えられない試練には会わされない

七月二日（土）

八時　しっかりと手を握って嬉しそう。会話も僅かながら戻る。再手術のトラブルを差し障りない程度に説明する。守られたことを神様に感謝しようね…、共にお祈りする。

T先生に、「お茶が飲みたいです」

「ダメ、大田さん今日は術後何日ですか」

「三十、一、二、三、四日目です」

「いいえ、二日目ですよ」

「ボケたかな…」と笑いが出る位に…。

十八時　夕方より熱が九度を越え、肩で息をし始め苦しそう。朝に夕にレントゲン、動脈からの採血に次ぐ採血。

二十二時三十分　T先生より、夕方のレントゲンの説明がある。

「胸部が真っ白／.吻合場所の洩れからくる炎症か、肺炎か、この写真では原因はよく判らない。」

「肺炎ならまだいいのですが…。吻合場所の異常は今の処は見られない、洗浄液がきれいなので…。」

（でも吻合場所の炎症を懸念しておられる様子が伺われる）

「前回と違って、異なる臓器が繋がれている上トラブルがあったので、安静にしておきたいのです…。」

先生のご意向と反対に、何度も咳込む、痰が出ない、胸部を激しく動かす。

T先生、看護婦さんに、必ず最低三〇分おきに吸引する様、伝えられる。

夜中は、座薬や注射でよく休んでくれる。

七月三日（日）

九時　T先生、溜められている洗浄液に先づ目が行く。先生の表情がさっと変わる。「どうかした?」、慌てて看護婦さんに尋ねられる。吻合場所から汚ない液が出ている。洩れがはっきりした。一番懸念されていたことが起こった。

私達は見えるものに動かされるのでなく、見えない方に目を注いで望みを持たせて頂く。

礼拝に切なる渇きをもって出席、ただひたすら主との交わりを願い、信仰を整え強めて頂く。

十三時　胸のヒューヒュー、ゼーゼーがひどい、痰との戦いも激しくなる。点滴の薬剤が、小さい瓶やらパックやら、輸血も次々と変えられ、それも管をたぐりながら慎重に…。

十六時　洗浄液にとうとう痰が混じり出す。T先生渋い顔。

十八時　息苦しそう、酸素も九〇に、又しても痰との戦い、黄だんも気になる。

二十一時二十分　話すのも苦しそう、又ゼーゼー、ヒューヒュー。どうかして楽にならないかと主人も必至。深呼吸や、うがいをしたり、ベッドを少し上げたり、色々試みるが駄目。「耐えられない様な試練には会わせられない、…逃れる道をも備えて下さる」と、自分に言い聞かせながら、懸命に主に寄りすがっている。

我、限りなき愛をもって汝を愛せり…、信じて感謝。下熱剤…が打たれ楽になる。

二十三時十分　レントゲン、こんな夜中に…。説明なし。

夜中、看護婦さんに起こされ、時々見てあげて下さいと…。夢と現実が入り乱れている。「夢だったか…」と気付いてくれホッとする。

七月四日（月）

八時　レントゲン撮影。ナース詰所で、K部長先生とT先生が難しい顔で相談しておられる。

九時　T先生より説明室に呼び出される。厳しい口調で。

＊吻合場所の洩れの中に痰が出ている。炎症も起こしている。

（後日談、洗浄液の中に、縫合した糸が出てきて、先生方も愕然とされたとのこと…）

＊痰を取り出す為、鼻よりチューブを挿入します。吻合場所を傷つけるといけないので、レントゲンをみながら…。安静を保つ為にも、暫く眠らせます。弛緩剤を使って…。すこしボケるかもわかりませんが…。肺も悪くなっているので、又人工呼吸器をつけさせて貰います。

十時　レントゲン室に降りる為、ベッドの移動準備。輸血、点滴、酸素ボンベ、諸々の機器をつけ、ものものしい重装備。それに看護婦さん三人ついて、恐ろしくなる。「あなたを離れない捨てないとおっしゃるイエス様がご一緒だから…」と祈り励まし送り出す。

涙がこみあげてくる。先生方も看護婦さんも一生懸命…。無事帰ってくる、可哀想…。

お昼頃、幻覚症状が出始める。

「教会で集会があって…お祈りがあっている…。山口のお坊さん皆帰られた?」（昨年の移葬のことらしい）

「榎本先生や皆さんが祈って下さってるから大丈夫よ」

安心した様子。

十三時　T先生、人工呼吸器をつけに。

「暫く口がきけなくなるので、今のうちに何かお話しすることがあったら…」

淋しさ、厳しさに胸が詰まる。挿入される、いよいよ痛々しい。

「耐えられない様な試練には…」、お祈りして、「頑張ろうね…」。

十四時二十分　T先生、看護婦さん、廊下を小走りにナース詰所に…、慌ただしくなる。胸騒ぎがする。血圧が八〇〜四三と低くなる。先生も看護婦さんも厳しい顔で詰めていらっしゃる。

十六時　又幻覚症状が出始める。口がきけない、うがいは出来ない、左手は点滴が入れられ、しっかり包帯で板に固定されている。辛うじて右手で筆談、何か訴えるが通じない、人工呼吸器を自分で外してしまう。どうやら家に帰りたいらしい…。駄々をこねる。ワープロを盛んに打つ仕草、停電とかダメダメと…、余程はがゆいと見え怒り出す。

力が強く、一美と二人で押さえるのが大変、今夜は観察

室で二人で看病を覚悟する。
十七時三十分　T先生、首をかしげて「弛緩剤がもう利く頃ですが…」。
十八時　やっと落ち着き眠り出す。ぐっすりと。
「ゆっくりお休み…、イエス様のみ手に抱かれて」。
T先生「薬がやっと利きましたね。今夜は皆さんゆっくり休んで下さい」と懇ろにおっしゃって下さる。一息つかれたご様子、お疲れ様でした。夜は一美が泊まる。薬が入っているので起きる心配がない。時々覗くだけで、眠れそう。
大変な一日だった。
七月五日（火）レントゲン撮りから一日が始まる。気持ち良さそうに休んでいる。ガーゼで眼と唇を湿し拭いてやる。
T先生「お早うございます。弛緩剤で眠っていますが、意識はちゃんとありますから…。」
「大田さん！」と呼びかけられる。主人、目を開けようとする、反応があった。
嬉しい！一方通行でも。
耳元で聖書の聖言を伝え、祈れること、賛美も出来る、感謝！。
「水は当分飲めません…」。大きな試練が待ち受けている。
お昼からは、血圧も一〇〇、心拍数は一二〇～一三〇、呼吸数三〇、黄だんはかなりひどい。熱も高い。先生方も口数が少なく、額のしわが気の毒な様、ただ会釈するだけ。看護婦さんも黙々と入れ代わり立ち代わり、処置がすんだらさっと詰所に…。
（後日談、ナースの方々も、あの時はいい材料が一つもなく、悪条件ばかり、辛かったと…）
二十一時　遅くにレントゲン、そしてT先生の説明。
＊レントゲンの結果は大分良くなりました。一進一退。
＊人工呼吸器は当分はずされない。酸素量は初めは一〇〇、今は六〇に落とした。でも人工呼吸器は外されない、本人も苦しむ、治療にもよくないから。
＊熱は三十九度くらい、炎症からと思う。
＊肝機能が落ちてきた。万一の時は血液（血漿）を取り替える。
＊今直接、手術の吻合部の検査をすることが出来ない。
＊先ず手術時のトラブルの後遺症を早くたて直す為、全臓器の機能回復に努める。
＊紫斑が出来ている。（あとは専門的なことでよく判らなかった）
「厳しい中ですが、今すぐどうと言うことはありませんから、皆さんお家に帰ってお休み下さい、病院のベッドでは熟睡が

出来ないでしょうから。何かの時は連絡します。」
「今宵も御手に、身も魂もお委ねします」、と祈って再手術後はじめて二〇六号室をあけて家に帰る。主人を残して…、もう時計は十時を回っていた。
七月六日（水）朝も熱が高そう、状態は昨日と変わらない。輸血も淡黄色になったり、赤になったり…、点滴も次から次へと…、採血も…。
寝たままで、食道、腸に造影剤を入れてレントゲンが撮られる。
結果の説明、「寝ていることもありますが、全く腸に入っていないのです。洩れて外に出ています」と暗い顔になられる。胸が締め付けられる、不安が現実となる。うす目が開いている。呼び掛けると反応がある、でも薬が切れて来たらしい。本人が苦しむので…と、又注射される。何ともやりきれない思い。
七月七日（木）外は記録的な猛暑、黄だんが少し消えてきた。お昼からはやはり熱が出だす。氷が、枕、脇下、股間に。ベッドの傍らで聖書を開け祈る。陽が西に傾く頃になると、頭上の窓のブラインド越しに差し込む夕陽が、ピンクのカーテンに映え、病人の顔がさらに紅潮して見える。静かな観察室に、パタンシュー、パタンシューと人工呼吸器の音だけが響く。何とも切ない夕暮れの毎日／又、下熱剤が打たれる。
『わたしは常に主をわたしの前におく。
主がわたしの右にいますゆえわたしは動かされることはない。』
気持ちよさそうに眠り続けている、平安そのものの顔、主に感謝。

見よ、私は新しいことをなす

七月八日（金）T先生の説明。
＊レントゲンは良くなりました。肝臓もぐっと良くなっています。
＊今一番心配されるのが呼吸不全、これだけよくコントロールされているのに血液中の酸素不足がどうしてか判らない。
＊今の状態での人工呼吸の管はもう限界。これ以上おくと雑菌が入り、肺炎を起こす心配がある。呼吸がうまく行かないのではどうすることも出来ないので、喉から直接気管に繋ぐ気管切開に踏み切りたい。痰も取れやすい。月曜午後にと思っています。
エッ／又切られる／しかも喉。気管切開は全く無知、恐れがのぞく。
「何かわからないことがあったら、何でも聞いて下さい」と

T先生、感謝。
まだ時間がある、イエス様、憐れんで下さい。
夕方、榎本先生が見えて下さる。本当に折に合う助けを頂きました。耳元でお祈りして頂く。呼び掛けに頷いたり、首を振ったり、僅かの時間でしたが安らいだひとときでした。反応があり、嬉しく感謝しました。

＊　＊　＊　＊

見える所は厳しく、神経の切れそうになることも、胸が詰まることも度々の毎日が続いています。もう静かに一切から離れてただ「信仰を持たせて下さい」と、主とのお交わりとみ霊の導きのみを祈って来ました。
祈りが応えられました。聖言が示され、パッと光が与えられたように…。
見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、
あなたがたはそれを知らないのか。
わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる。
（イザヤ四三・一九）
今まで、「身も霊も新しくなして下さい」と祈るものの、私の頭の中は病気の癒し、肉の思いで一杯でした。だから容態の変化に揺れ動く有様、魂はもうどこかへ…。
十字架が遠のいていました。
「恐れるな、私はあなたをあがなった…」と示して頂いているのに…。
悔い改めました。み心をなして下さいと祈る。み心は癒しでなく、み許に迎えて下さるのが、み心ではないかと…。
三年前の受洗の時、この自分中心の頑固な主人がみ救に預かり、主はご自身に似るものとして下さると…おっしゃるけれど、どの様に変えられて行くのか、ただ約束の聖言に支えられて来ました今、ああこれが…と。
わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。
（ピリピ三・二一）
み前に傷なく、しみなく、潔い者とし、永遠の輝くみ国に迎え入れ、主のみ前に立たしめて下さることが…。十字架のご愛を示され、心が定まりました。
そして切に祈りました。
「み旨がどこにあるかわかりませんけれど、み心をなして下さい。イエス様が従順であられた様に、少しでもみ跡を辿らせて頂きたく、全てに耐え、全てにお従いすることの出来ます様、信仰を与え、聖霊が助け導いて下さい。尊きイエス様の聖名により感謝してお願い致します。アーメン」。
もう生きるも死ぬも問題でなくなりました。恐れなく平安

と望みが与えられました。肉の思いの淋しさはぬぐい切れませんでしたが…。

（十年前に、兄のガン末期でご相談に伺った時、榎本先生が『肉の思いでなく、み旨がどこにあるか、生死は問題でない、委ねましょう』と導いて頂いた、あの毅然としたお姿、み霊の導きを今思い出し強められました）。

＊　＊　＊　＊

七月九日（土）堤先生が見えて下さる。「もう会いたくない」とおっしゃるのを「会って下さい」とお願いする。そして顔を覗かれて、「何とも声のかけ様がない…」と沈痛な面持ちでお帰りになられた。

明日は聖日礼拝、容態が厳しいだけにまず主のご臨在に近づけて頂きたい。常に主を私の前に置く…、きっちりとみ前に姿勢を整えよう…。主とのお交わり、主のご愛にすがらせて頂こう。主に喜ばれる道を…。もうなりふり構ってはいられない、今のありのままの姿で…、身の引き締まるのを覚える。礼拝でお祈りさせて頂くことを心に決め祈る。

わが行く道、いついかに

七月十日（日）

九時「お早よう」、反応なし。熱も出ている、元気なし、胸が詰まる。

T先生のご説明がある。

「今朝のレントゲンはとても良くなっている。でも、又肝機能の数値が悪く、何かが大変悪くなっている。（大事な検査結果らしいが私にはわからない）多分脱水状態ではないか…。もう胸の水も溜まっていないので、水分を投与しても良いと思う、出来るだけ気管切開は避けたいのですが…。」先生も大変お疲れのご様子、術後より休みなしでの診療に感謝すると共に、先生のお疲れを癒して下さいと祈る。

さあ教会に行こう、主よ憐れんで下さい。

賛美歌四九四番　病室に掲げた主人の愛歌の一つ、心にしみる、胸が熱くなる。

説教のメッセージ　Ⅰコリント六・一二―二〇

信仰の原点を示され、聖言に従わせて頂く力を備えられた。

賛美歌五〇五番　凱歌うたいて　み前に立つ日　さかえの冠を主与え給わん

涙がこみあげて来る。あんなに喜んで出させて頂いた礼拝にも、もう近づくことがないのでは…。胸が一杯になる、涙で歌えない。

教会では、榎本先生はじめ皆様が、ご心配してお祈り下

さっているのが、ひしひしと伝わる。心から感謝、有難うございます。

十二時十分　急いで病院に帰る。観察室の前でバッタリ出会った看護婦さんが明るい顔で、「データが少しよくなられましたよ。」「エッ、ホント！」涙が浮かぶ。

朝はあんなに悪かったのに…、イエス様有難うございます。

そこにT先生、「酸素を六〇から五〇に下げました、四〇になれば気管切開は止め、他の方法を考えます。」

思いがけない主のみ業、感謝。

十六時　T先生、吻合場所の処置に来られ、「良くなられましたよ」と久し振りの笑顔、白い歯がこぼれ、私達も嬉しくホッとする。

七月十一日（月）「お早う」、何か何時もと様子が違う。顔も細くなり、すっきりした感じ、口の中で舌をもじもじやっている。アレッ！熱もほとんどない。看護婦さんが「今朝から弛緩剤を止めました」

暫くすると目が開く、一週間ぶり、「ワアッ、ジジさん生き返ったね、万歳！」気分もいいらしい。けれど、強い薬剤の為か、すごく耳が遠くなっている。

賛美歌三一二番を耳元で賛美する。

十六時　T先生、

「大分呼吸が落ち着いてきました、熱も八度を越えなくなりました」

「大田さん、今度は素直にして、苦しい時は苦しいと…、絶対自分で頑張らないで下さいよ」、と何か信仰のお話しをしている様。

私も主に在って、ふるい立たせて頂く。

先生や看護婦さん達も一寸余裕が出て来たのか、口を開いて下さる。

ナース主任の方が、「術後今日まで先生方は必死でした。私達も絶対にミスのないよう緊張の連続でした。よかったですね」。

十八時　処が容態が急変、熱も九度近く出始める。愁眉を開いたばかりなのに、何が起きたのか。何とも苦しい、辛い夜となる。

主のこころみ　耐えしのばば　愛のひかり照りいでん

＊　＊　＊　＊

この処、再手術の思わぬトラブルの結果に、親戚や知人から、病院の処置に批判的な声も耳に入る。一回の手術でなぜ出来なかったか…、年令も考えて…と。

私は人の手でなされる手術に絶対と言うことはない。癒されるのは主であると信じ、祈って導かれた入院、手術。

私達のことをすべて知り尽くされておられる主が、許してお通しになられる道、神様ご支配の中、病院側も再手術をとるか、ガン細胞をそのままにして時を待つか、選択を迫られ決断されたと思う。

病院のK部長先生はじめ、T先生方、看護婦さんの懸命な対応、処置に感謝、どのような結果になりましょうともすべてお任せする。

善にして善をなして下さる主が、責任を持って下さっていることを心に止め、誰の罪でもなく、誰が悪いのでもない、

『ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。』

（ヨハネ九・三）

主を見上げ、終始この聖言に固く立たせて頂いた。

ついに気管切開に

七月十二日（火）

八時三十分　昨夜のことがあるので早めに病院へ。もうT先生がおられる。先生のお顔を見るのが辛い。恐る恐る主人に会う。昨日の元気はない。「お早う」

やっと目が開く、うつろな目、きつそう。

人工呼吸器に表示される自力呼吸も三〇〇㎖、全く弱い。（肺に入る空気量、普通は五〇〇㎖）呼吸数も三〇を越えている。

十一時　T先生「人工呼吸は止め、酸素だけにします」。胸がドキンと高鳴る。

「大田さん、自分の力を抜いて呼吸してみて下さい」。

頷く、力を入れようとする。

「駄目！自然に静かに息をして下さい」と。空気量も四〇〇㎖前後まで行く。

「頑張って下さい」と励まされる。

私も、「元気を出して、頑張って…」と。

気管切開の決断の為と思われる。

十一時四十分　「よし、管をとろう」と入って来られる。エッ大丈夫かしら？

主が導いて下さるのだから…。全てをお委ねし、病室に戻り祈る。

全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てに耐える。力を与えて下さい。

十二時三十分　観察室に行く。酸素マスクに変っていた。とても苦しそう。息づかいも荒い、気道確保の為、呼吸しやすい様に頭が下げられている。可哀想になる。イエス様、憐れんで下さい。

二十時三十分　T先生、「一〇ℓ酸素補充しても、正常の一番低い数値に達しない。明日午後、切開に踏み切ります」と厳しいお顔。全てをみ手の内に祝して下さいと祈る。

七月十三日（水）人工呼吸器が挿入されとても楽そう。

九時　T先生より説明。

「昨夜より、肺機能だけ悪く、レントゲンも他の機能もよくなっています。午後三時より手術にかかります。切開の傷はすぐふさがります。声が出なくなるのでストレスが一番心配されます」

十二時　呼吸も安定、少し落ち着いた様なので、切開の処置を話す。難聴がひどい、「ウンウン」と頷くがどこまで解ったのか?。

十六時　K部長先生執刀で、約一時間余りで終わる。

金属カニューレが挿入されている。麻酔がまだ利いている。はじめて見る気管切開、もう意思伝達は書くことだけ、でも手も指も萎えて動かない。

痛々しい、胸が詰まる。

ナースの詰所では、K部長とT先生、真剣なお顔でご相談。

洗浄液が汚いのが、私の目にもはっきりわかる。

七月十四日（木）

八時四十分　はっきりと意識が戻る。「お早う」目を開けパチパチとウインクする。イエス様有難うございます。文字盤が用意されている。

十一時　洗浄液が大変悪い。T先生の険しいお顔、私も声をかけるのも気がひける。お互いに会釈するだけ、息苦しい雰囲気。喉がゴロゴロ、前よりも頻繁に吸引が行われる。

十二時　文字盤で会話の練習、意欲なし。掌に指を使って文字表示の練習を試みるけれど、カナやら漢字やら混ざってさっぱり、もうきっそう、熱もある。

K部長先生とT先生が見え、

「明日一階に降りて手術部の検査をします」、洗浄液を見ながら言葉少なに。

夕方、T先生

「大田さん、ラジオで相撲を聞きませんか、貴の花三敗、若の花、武蔵丸全勝ですよ」と、耳元で大きな声で上手に呼び掛けて下さる。

きついのか、全然興味を示さない、あれ程相撲が好きなのに。

最悪の宣告、もう一度手術を

七月十五日（金）

目は開いているが元気なし。口利けない、耳は聞こえない、

体は動かない。自分はどうなっているんだろう?…、主人の心中を思うとたまらない。どうしてやることも出来ない。主よ憐れんで下さい。

午後より、下に検査に行くことを説明、レントゲン、検査のデータも大分よくなっていると…励ます。

十一時　字を書こうとするがダメ。文字盤もダメ、顔をしかめる。何か訴えるがわからない、お互いに一生懸命。又字を書く、やっと「ウンチ」、そのままして大丈夫と言い聞かす。術後はじめての排泄。それから又二回、看護婦さん達にも迷惑をかけ、すったもんだの末、ウンチ騒動も一見落着、さっぱりして気持ちよさそうに寝る。

十五時三十分　いよいよ検査に出発。全てをお委ねする。

万物は神から出で、神によって成り、神に帰するのである。先生方の手を祝し、知恵と力を与え導いて下さい、切に祈る。

又ものものしい装備、人工呼吸器（用手用）、酸素ボンベ、輸血、点滴等…、T先生と看護婦さん三人ついての大移動。

十六時三十分　割合元気そうに帰って来る、感謝。何か口を動かし話しをするけれど…、どうにも通じない。疲れたのか、目を閉じ休む。結果が待たれる。汝ら心を騒がすな、神を信じ、又、我を信ぜよ

十七時四十五分　「説明室にいらして下さい」、一美と一緒に…T先生の態度の鄭重さが気になる。ライトパネルに並べられた写真を前に、T先生「今日はいいお知らせと悪いお知らせです。」

＊レントゲンは大変良くなっています。検査のデータも良く、臓器の機能も大分回復しています。

＊しかし、透視の結果、食道と小腸は完全に離れています。と写真で説明。やはり、造影剤が食道より腸に行かず、吻合場所より洗浄液の出るチューブを通って対外に…。

（手術直後の説明の後、致命傷と言われた最悪の事態／）これを聞いて、又全身よりサーッと血が引く、胸が締めつけられる。でも心は定まっている。生死ではなく、主のみ心をなして下さい、人には出来ないが神には出来ないことはない…と。恐れなく立たしめて頂く。

T先生続いて、

「私達は先ず命を第一に、そして生きることを考えます。それには二つの方法があります。

①食道と小腸が繋がってないと食べることが出来ない。点滴と洗浄で、寝たきりの今の状態で生きる。これでは生きることにはならない…。

②再度の手術…大変厳しい手術です。

現在、食道と小腸が繋がってない。今度は食道と大腸を繋ぐ。

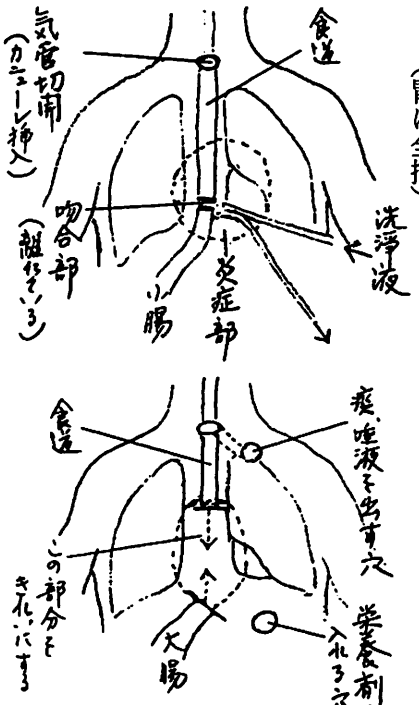
その方法として、

まず洩れている炎症部を綺麗にするため、食道と大腸を切り離して止める。

小腸は癒着して使えないと思うので切除する。

大腸は汚い処なので、綺麗になるのを待つ。その上で、食道と大腸を繋ぐ、もう一度手術で…。それ迄は、胸に穴をあけ、唾液や痰などをこの穴から出す。横腹には栄養剤を入れる為の穴をあける。食道と大腸が繋がるまでは食べられない。しかし、回復後は歩く位にはなれます」。

再手術後
（胃は全摘）



三回目の手術

私「食道と大腸を繋ぐ状態になるまで、どの位の時間がかかりますか」

先生「…」答がない。

いくら外科医とはいえ、神様が造られ生かして頂いているこの身体を、又しても切ったり穴を開けたり、しかも前回のトラブルを考えると、とても成功は望めない…。もういい加減にして下さいと…、瞬間言いたかった。でもこれもみ手の内、全てをお委ねして行こう。聖言がとどまる。

主は王となられた。世界は堅く立って動かされることはない。

もう私の心は定まっている。T先生にお返事する。

「私達の命は神様のみ手の内です。使命を与えられて生かされています。どんな厳しい中でも、使命が残されているなら生かして下さるでしょうし、もう地上での使命が終われば天国に迎えて下さいます。すべて先生のご判断にお任せします。どうぞよろしくお願い致します。私達は神様に望みをおいてますので」。

先生「私達も勿論、望みをもってやります、もうこれ以上好転するとは思われないので、来週木曜日に手術を予定しています、最終結論は月曜日に…」。

説明される先生もさぞ辛くていらしたと思う。私も直ぐ

に主人のベッドに戻る気になれず、病室に帰って静まり祈る。考えられない苛酷な宣告に様々な思いが去来する。

たとえ手術が成功しても食事がとれない、この状態での姿を考える時、主人自身どの様に思うであろうか。私達もとても食事を楽しむことなど考えられない。

涙も出ない。鼓動が高鳴る、胸が張り裂けそう。

観察室に戻る。顔を見た途端、涙がこみあげそうになる。パタンシューと人工呼吸器の音、器械群に取り囲まれ、管の数々、声なし、動けない。哀れな姿。

T先生の説明で頭が一杯。イエス様、こんなに迄して生きなければいけないのでしょうか。もう望みのない手術は止めて、今の処置の一切を外し、楽にして病室に連れ帰り、精一杯看病して、地上での生涯を全うするのが、主人の為にも一番よいのでは…。もう神様から生かされている身分を忘れ、恐ろしい思いが…。

トラブルがあった再手術後、「…生かして下さい…生命を…」と切に祈ったではないか、「霊は?…」と主の声／。

肉の目にどんな形の状態であろうとも、「主の栄光の現れんためなり」、と主が許して通される道、自分が歩むのでなく、主が歩ませて下さることを諭され、悔い改める。主が共にいます故、強くかつ雄々しくあれ、と押出される。

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも

榎本先生にお電話、翌日は土曜日でしたが時間を頂く。翌日、牧師館に伺い、病状の経過、処置をお話しし祈って頂く。そして意識のある中に霊の導きをお願いする。月曜日午後に見えて下さることを主人にも伝える。

七月十七日（日）

「ジジさんお早う」、珍しくあまりご機嫌がよくない。看護婦さんが「イマナンジ」と尋ねられたので「九時」と答えましたと。時間が遅かったらしい…。待ったのだろう。ご免ね…。でも元気、イエス様有難うございます。教会行きを告げ、バイバイする。

聖日礼拝、ベンチに座るともう胸が詰まる。讃美歌、お祈りも涙をこらえ、ただひたすら、主の憐れみにすがらせて頂く。

メッセージ　イザヤ四三『見よ、わたしは新しい事をなす、やがてはそれは起る…。この民は、わが誉を述べさせるために、わたしが自分のために造ったものである。』

造られた者なのに、その上、わが誉れを述べさせる為に…、この様な尊い身分を忘れ、自分中心の思い上がったことが恥ずかしく、今一度悔い改め新たにされ、この処からつかわされることを感謝した。

帰るととてもハッキリしている。何か書きたがる、手を添えてペンを持たすとやっとのことで、「榎本先生は」と書く、辛うじて判る。今日お元気でご用され、明日見えて下さると…。今度は「声は?」と書く、ギクッ!、やはり解っていない、手術後のことを今一度話して聞かせるが…。辛い、胸が痛む。意識がはっきりして欲しいと願うけれど…、複雑な気持、熱も出ている、可哀想。

七月十八日（月）手術が具体的に決まる日。

今朝は今まで萎えていた手が少し上がり、ペンが大分しっかり、手を添えないで書ける様になる。「エノモト先生」やっと判読出来る字で…。よほど待たれる様子。婦長さんにひげを剃って貰い、管を止めていたテープを張り替え、さっぱりして先生をお待ちする。

お昼過ぎ、待たれた先生が見えて下さる。喜んで興奮気味、そのせいか十一時頃より熱が八度、顔が紅潮している。何か書きたいと手を動かす。筆順を辿っていると、漢字で『神様の御愛感謝』と字とも絵ともつかない字で…。驚く。

永遠の腕に支えられ、恐れなく平安の中におらせて頂いているお恵みを感謝。

讃美歌五三三番を…、声はなくとも、一緒に口を動かし首を上下に振って讃美、とても嬉しそう、しっかり握手、お祈りして頂く。

先生「…大田敏夫兄の身も魂もすべて御手にお委ねします…」。私も心から、アーメンと、主のみ業を待ち望ませて頂く。お暑い中、本当に有難うございました。榎本先生お帰りの後、安心したのかぐっすり休む。

午後二時過ぎ目覚め、掌に指で「Tセンセイニダイジナハナシガアル」と訴える。何だろう。婦長さん「今T先生は手術中なので、すまれたら見えますから…」。

今日は再三「ババサンドコデネマスカ」と聞く。又「ココデネテクダサイ」と…。余程心細いのだろう、「ここでは寝られないので、前の二〇六号の部屋で…」と答える。耳もすごく遠くなっている。切ない、体力が衰えて行くのがわかる。今日より、リハビリのH先生が見え、まず指の折り曲げから…。T先生が見える。「主人が大事な話しがあるそうです」。まことにしっかり「コレカラドウナッテユクノデスカ」ドキン!。

先生「もう一度処置しなければならないと思います…」と説明されるが、どこまで理解出来たのか…、どの様に受け止めたのだろうか…、何を考えているのだろうか…。悲しくなる。涙がこみあげてくる。

陽も傾き暑さもひと息つく夕暮れ、病室からの美しい夕映

えが、かえって様々な思いを募らせる。なかなか説明の声がかからない、ガラス越しに、ナース詰所にT先生の姿を見つける。もう待てない、思い切って私の方から問い掛ける。

「如何でしょうか」

先生、辛そうに、

「今の状態では手術が出来ないのです、データも悪く、良い肺の方も傷つけることになるので…。明日CTの検査をし、院長はじめ先生方と慎重に検討して、来週にでも…、結論は明日に…」と。

先生方も厳しい選択を、迷っていらっしゃる様子がよくわかる。何もかも悪条件になっている様…。すべて神様のご支配の中、切に祈る。

夕食をすまし観察室に戻る。意識も朦朧、ぐったり虚な顔、しばらく話しかけるが反応がない…。主人の頼みもあって私も泊まるつもりが、疲れをどうすることも出来ない。「ババさん帰ってもいい?」と聞くと「ウン」。明日から泊まることを約束して、み手に委ねる。しのびなかったが看護婦さんにその旨伝え、九時三十分家路につく。

帰りは歩いて帰ろう…、人も車も避け公園の夜道を歩く。人影もなく美しい星空を仰ぎながら…。主人も一番よい時にみ救いに預かり、帰る所をはっきりとさせて頂いて本当に良かったと感謝し、心も定まっているものの…、あの空にまたたくお星様の様に、イエス様と共に、もう私の手の届かない所に旅立って行くのでは…と、肉の淋しさをどうすることも出来ない、涙が頬を伝う。

たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわいを恐れません。
あなたがわたしと共におられるからです。

（詩篇二三・四）

主の栄光！

奇跡、奥さん繋がっています

七月十九日（火）昨日のこともあって早めに病院へ。

八時三十分　観察室にベッドがない、もぬけの空。もう検査に行っている。

九時三十分　帰って来る。朝から九度近い熱が…。ナースの詰所で、K部長先生とT先生が厳しい顔で相談しておられる。婦長さんが午後一時から又検査がある旨、優しく励ます様に知らせてくださる。

T先生、様子を見に来られるが険しいお顔、何もおっしゃらない…。私も会釈するだけ。息苦しい時が過ぎる。ただひたすら主とのお交わりで耐えさせて頂く。

十三時　例の重装備で又下に降りる。

十四時　広田様ご夫妻、章子様がお見え下さる。何かホッとする。簡単に様子をご説明、そして「遺言書を計画、提出させて頂きましたこと、本当に感謝しております」と…お礼を申し上げる。

そこに、T先生が急ぐ様にドアをノック。

「皆さん、お揃いでよかった、説明室にどうぞ…。」

広田さんにお引取り願って、一美と説明室に急ぐ。

先程までの先生のお顔と全く違う。

ライトパネルに写真がずらり…、前のと今日のと…。

「奥さん！見て下さい、造影剤が腸を通っています、繋がっているのです！」

「エッ！ほんとですか！」

前のには、食道から管の方に、腸には何も見えない。今日のは、はっきりと白い物がきれいに通っている。

思わず、先生の腕を叩いて「有難うございます」と、もう涙が止まらない。

「奇跡です！奥さん達の祈りが通じたのでしょう、私もこれを見た時、嬉しくて涙が出そうになりました。本当に良かったです、良かったですね」と、重ねて…、喜びを噛み締めておられる…、満面笑みをたたえて…。

「今日は、どうせ又手術をするのだからと、一か八か、思い切って吻合場所に管を突っ込みました。処が腸に通って行ったのです。勿論洩れはありますが、これなら、絶対くっつきます。癒ります」とご自分にも言い聞かす様に…、説明にも力が入る。

「胸を開けなくてよかったです、まだ問題はいろいろありますが…。」

手術がギリギリの所で回避されたのです。感動の一瞬！。イエス様有難うございました。主の栄光をまざまざと見せて頂きました。何と感謝したらよいのでしょう。

見よ、わたしは新しい事をなす、やがてはそれは起る。

…この民はわが誉を述べさせるために…。

（イザヤ四三・一九－二一）

神様の力強いみ業をもって、今一度地上に戻して頂けるのです。食べて生きることが出来るのです、もう顔は涙でくしゃくしゃ、このままでは主人に会えない。気持ちを落ち着かせてベッドに行く。

T先生「ご主人に説明しておきました」と。ただ「有難うございました」の言葉しか出ない。安堵された様子が伺える、先生方のお疲れが癒されます様祈る。主人も納得したのか、熱はあるものの笑顔が出る、心から感謝を捧げ、

精一杯励ます。張り詰めていた緊張がほぐれ、看護婦さん達からも「よかったですね」と白い歯がこぼれる。

今夜より二〇六号室に一美と交替で泊まり込んで看護にあたることにする。主人もとても嬉しそう。さすが、この夜は感動と興奮で眠れなかった…。辛く苦しかった二十日間、神様はこの様な者をも顧みて、奇跡をもって、主の栄光を見せて下さったご愛とご真実をしみじみと噛みしめる。

この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである。

（ヨハネ一一・四）

夜中、ときどきベッドを覗く…、み手に守られている、感謝！

一夜明け、息苦しかった雰囲気から一転、感謝も一入の朝、明るい表情が見られる。さあ、元気を出してリハビリにがんばりましょうと…、午前と午後、手足の上げ下ろしから…。

すっかり萎えた手足、僅か二十日間でこんなに迄…、寝たきりの恐ろしさに驚く。

二〇六号室に喜びの生還

奇跡の手術回避から一週間、その間、肺の異状、高熱が出ての大騒ぎ、死ぬほど苦しかったというカニューレの取替え、昼夜をとわず唾液と痰との壮絶な戦いもあったが、主の憐れみにより、症状も日に日に収まり、二十四日には酸素だけにして、自力呼吸が試みられる、感激！。

指文字も筆談も少しずつはっきりとして通じ会う様になる。

K部長、T先生、「洗浄液も大分綺麗になりました、炎症が収まってきた証拠です。どうか早く呼吸が元に戻って…、熱が三八度を越えなくなって欲しいです…」と。

七月二十六日　朝の目覚め、熱いタオルで顔を拭く、「ヒゲを剃ってみない？、共同作業でやろう…」。

ヒゲ剃りを手に持たす。やっとの思いで顎に持って行きソーッと引く、白い石鹸の泡がすーと消える。ワー出来た、握力も出た…、イエス様有難うございます。胸に入れられていた洗浄液の注入管がとれる、動きやすくなる。

人工呼吸器は止められ、酸素だけで自力呼吸を試みられる。調子が良ければ二〇六号室に帰れるかも…、主人も大喜び！

リハビリのT先生の介添えで、ベッドに半身起こして貰う。T先生、「明日部屋に帰りましょう。色々検査がありますが…」。信じて待つ。主の恵み深きことを味わい知れ、主に

寄り頼む者は幸なり。

七月二十七日（水）午前中検査があり、T先生今一の様子、帰れるかな？昼過ぎ、婦長さん「うつりますよ／」。嬉しい様な…、恐ろしい様な…。すべてみ手の中、感謝します、有難うございます。

いよいよ引っ越し開始、人工呼吸器は外されたものの、器械群、管に取り囲まれての大移動。

「ジジさんお帰り」

「ヤッタ／」両手が上がり万歳する。感謝、感激。

今夜から同室で看護が出来る、声が出ないので、ナースコールの外に、私用の呼び鈴を備える。

七月三十日（土）日増しに癒され、血圧計も外され、点滴も次第に減り、部屋がすっきり。

T先生「点滴が減り淋しいですね」と笑いと冗談が出るほどに…。

「もう命は大丈夫です、明日は日曜日、検査はお休みにしましょう」。

毎朝、レントゲンに始まり、点滴に次ぐ点滴、輸血、採血につぐ採血、夕べのレントゲンで一日が終わる…検査検査の毎日でしたが、大きな山を越えさせて頂き、T先生と、「よかったですね」「有難うございます」と喜び感謝する。

孫の斉、夏休みで帰省、盾と一緒に顔を見せる。ジジさん大喜び、早速斉に「イエス様がそばにおられるから大丈夫」と書く、すっかり萎えてしまった足のリハビリを頼み、いい御機嫌／兄弟揃って久し振り、頼もしさも見える、感謝。

七月三十一日（日）聖日、礼拝、週報にもしっかりと目を通す。

賛美歌五三四番を歌ってくれと…、共に賛美する。まだ一滴の水も飲めないけれど、大手術より一ヶ月の感謝を主人と共に捧げる。

腓骨神経麻痺に驚く

いよいよ八月、相変わらずの猛暑、レントゲンから始まる。検査のお迎え、ストレッチャーで、初めてベッドから離れ、酸素ボンベをつけてのお散歩？「行って来ます」と元気で…、祈って送り出す。

夕方、説明室で。

＊洩れが少なく、きれいに繋がって来ています。

＊繋がることと、食べることは違います。初めは大変むせると思います。特に吻合場所は狭くなっているので、（後日、狭窄で食べることに苦労、十月より厳しい拡張術が四回行われる）

＊カニューレはそんなこともあるので、まだ暫く付け、酸素吸

入はマスクにします…、発声練習のため。
＊肺炎はまだ少し残っていますが、心配ないと思います。
＊飲んだり食べたりする前に、立てるようになってくれると有り難いのですが…。
八月二日（火）酸素も外され、尿管もとれ、待たれた発声練習が始まる。カニューレの穴をふさぎ、「アー」、アッ声らしきものが出た。「オハヨー」かすかながら…、「よく出来ました」と拍手、感謝！。
サーチレーションも九〇～九二になる。（指先をはさんで体内酸素量の測定器。普通九七～一〇〇）
八月七日（日）余裕が出てきたのか、今の症状について問い出す。
熱が八度前後続くこと、痰との戦い、時々息苦しくなること等…、これは？、あれは？、どうして？と筆談で…。気管切開もさだかでない、今一度、再手術からの経過を辿りながら、図解して説明する。
吻合場所の離れも、気管切開もやはり理解してなかった。途中段々顔が紅潮するのが見え、もう三度目の奇跡の話しは止める。
やはり、「気管切開の話しは初めて聞く、何時した？」「初めて恐ろしい話しを知りました。有難う、心を入れ替えます」と興奮している。
胸が詰まる。お祈りして、ゆっくり休もうね…。
八月八日（月）リハビリのH先生の介添えで、ベッドから離れ、二、三歩すり足で歩かせて貰う！スゴイ！。処が左足がおかしい、足先が垂れている、足首が動かない、右足よりずーと細い。左足の筋肉が全然使われていなかったからと。
整形の先生の診断を受ける。腓骨神経麻痺による尖足と診断される。
「リハビリで頑張っても駄目ですか？」
「やはり回復は望めないでしょう。でも膝、腰は大丈夫です、危険なので装具を作りましょう、杖も一緒に…」。生涯、装具と杖を覚悟する。
観察室の時、ナースの方々が、床ずれ、尖足にならない様にと、体位を変えたり、足首を支えたりされていたのが今やっと判る。
婦長さん、主任さん達が、「申し訳ありません、私達の不注意で…」。
（只今では、これも奇跡！殆ど癒され、今は杖もなく歩かせて頂く。婦長さん、「よかったです、一番気になっていました、嬉しいです」と…）

ひとたびは死にし身も

八月十日（水）カニューレの穴を塞いで声を出す。初めは喋れることを忘れ、つい手が動いて、「言葉も忘れた」と…。でもすぐに気がつき、「オハヨー、アリガトウ、ババさん…」と、こうして日に日に、お話しも大分出来る様になり、すこしづつ耳も聞こえる様になる。

サーチレーションも九五～九七になる。

八月十三日（土）四十三日振りに今朝は自分で痰が出せる様になってとても楽になる。熱も八度を越えなくなった。カニューレの調子もよく、気分かいいのか、よくお話しも出来る。奇跡の三度目の手術回避のことをボッボッながら話す。

主人「詩篇二三篇　たとい死の蔭の谷を歩むとも、わざわいを恐れません…の通りだね」と…。

胸が熱くなる、平安の内におらせて頂いた主の顧みを感謝、聖書を開き、心を一つにして祈ることの出来る迄にして頂いた幸せをかみしめる。

K部長先生「お元気になられましたね！もう一息、水が飲め、食べられる様になったら、もう全部取ります…」嬉しい。

T先生「呼吸も心配なくなりました」。

八月二十二日（月）伝い歩きが出来る様になった。

＊　＊　＊　＊

主人も、私達の休日なし二十四時間勤務の看護に少し気づかってくれる。

「ババさん…昼も夜も…神様に守られて…だね」そして「こんな賛美歌があったね？」

「あ、…五三二番！」開く。今の私達にピッタリ…、感謝して心から賛美する。

ひとたびは死にし身も　主によりて今生きぬ

……昼となく夜となく　主の愛に守られて……

家拝もぼつぼつ出来る様になり、丁度ヨブ記を読んでいて大変恵まれる。

神は苦しむ者をその苦しみによって救い、

彼らの耳を逆境によって開かれる。（三六・一五）

すべてを離れて、ただ主に目をとめ、格別な主との交わりの時を与えて頂いたことを新たに感謝する。

水が飲め、声が戻る

八月二十三日（火）待望の水！五十四日振り、一日三〇〇ccのお許しが…。

この日をどんなに待たれたことでしょう、イエス様、有難うございました。

神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを

慕いあえぐ。
わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕う。
（詩篇四二・一―二）
この大きな恵みをしっかり心に止め、常に渇きをもって神様を慕い求めて行くことの出来ます様に…、感謝と願いを捧げる。
翌日は、お茶がいただける、ああ美味しい！と、五十五日振り…。
八月二十六日（金）透視の結果、万歳！。水分制限解除。
八月二十九日（月）食事ＯＫサイン、二ヶ月振り！。重湯、梅干し、牛乳、でも食欲なし。重苦しい食事になる。
八月三十日（火）水に続いての喜びが。七月十三日の気管切開で挿入されたカニューレが抜かれて、四十九日振りに昔の声が戻って来た。「すぐ塞がります」と先生の言葉通り、傷跡もすぐ塞がる。神様が造られた人間の治癒力に又驚く。
横腹の管も抜かれる。
手を貸さずに一人立ちが出来る様になる…。よかった万々歳！。車椅子で下のレントゲン室に降りる。終わって、主人が嬉しそうに話す…。
「撮影の時一人で立った、スタッフの皆さんから、『ワー』と歓声が上がって拍手して奇跡の生還を喜んで下さった」と…。
一番厳しい時から、毎日、朝に夕に撮りに来られていただけに…。もうレントゲンのフィルムも看護婦さん一人では待ち切れなくなっていた。
こうして身体に差し込まれていた管は全部とれた、後は点滴だけ…。
さあ、新しい一日の始まり、回復に向けてのスタート。明るく歩み出させて頂く。

＊　＊　＊　＊

全く健康を誇っていた主人の身体が、急転直下全機能を殆ど失い、寝ること以外何一つ出来ない所から、呼吸が出来る、声が出る、喋れる、立って歩ける、耳が聞こえる、水が飲め、食事が摂れる。今迄考えても見なかった一つ一つが、神様の恵みにより癒されて行く。感動と感謝の連続！人間の無力さを知らされる。
しかし月が変わって九月に入った途端、喜びも束の間、思わぬ症状が又次々と起きる。八度六分の熱が出始める、軽い肺炎らしい。しかし、抗生物質は使われず、ネブライザー（吸入器）を駆使しての痰取りに励む。
エコーやデータで、肝機能低下。又輸血、食事も逆戻り、絶食…水、お茶からに…等。ＭＲＳＡが検出される、トラブルの数々！

しかし、み手に支えられ一週間振りに、一足とびに五分粥、感激！又一つ大きな山を越えさせて頂きました、感謝！。

処が又思いもせぬことが起る。

よき助け人が隣のお部屋に

何時も大変お世話になっている堤先生は、成瀬先生のご入院のこともあって、ご自分の身体をいとわれる間もない程のご多忙の中を、毎日の様にお見舞い頂き、いつも「…成瀬先生と二人、一日も早く良くなって下さい…」と、励まし祈って下さいました。

流動食が喉を通る様になった日も、主人の脈をとりながら、「大田さん、奇跡としか思えない、顔色も全然違う、救われていて良かったですね、神様の証人ですよ」と。感激、涙を浮かべて喜んで下さいました。

処が、九月二日、お見えになった先生は、顔色も悪く、背中の痛みを訴えておられ、憔悴しきったお姿が、とても気になっていました。それから、バッタリと途絶えました。どうされたのか心配になる!?。

九月九日、先生より「大田さん、食べられていますか?…」と心配されてのお電話、何と、H病院に六日から入院中とのこと、藪から棒に、エッ！と。

そしてびっくり！ 十二日に化成病院に転院される。しかも、私達の隣の部屋に…。何もかも備えられて夜中の大手術！。神様のなされる急テンポのみ業に、目を見張る思いでした、ここでも主の栄光を見せて頂きました。

順調な回復で、十月二十五日ご退院、その間の約一ヶ月半、隣同志でご一緒の生活、主人は、…同じ戦場に戦う戦友として、又信徒会支部?のお仲間として、毎日お祈りお証しで貴重な時間を与えられました。お世話になりましたと。

私も同じ気持ちでした。私達の弱さを思いやって、又とない助け人を神様から与えられ、医師の立場から詳しく先の先まで説明して頂き、又、何でもお尋ねも出来、元気づけられました。感謝でした。

その間、主人のガンを見つけて下さいましたH病院のF先生も心配して見えて下さいました。

「こんなことになろうとは…」と申し訳なさそうに。

「いいえ、感謝しております、よくぞ見つけて下さいました」と、お礼申しあげる。

堤先生と成瀬先生と時を同じくしての入院、私達は本当に幸せな日々でした。神様のお導きを心から感謝しました。

外泊を許されて

十月末より外泊、退院の話しもチラホラ…、本当に待たれました。でも何度かキャンセル…。とうとうその日が来ました。十一月十二日、試験外泊、懐かしの我が家へ…。もう二度と帰ることはないと、心に決めた時もあっただけに…感無量…。爽やかな秋晴れに恵まれて、まずワン公達の歓喜しての出迎えに大喜び！主人のためにつけた手すりを伝い、杖を手に各部屋をしっかり点検、帰宅の実感を確かめている…。

格別自分の部屋では「オー！」と声が出る、壁にかけられた聖言

「汝ら心に憂ることなかれ、神を信じまた我を信ぜよ」の額を眺めて感慨深そうに…。

久し振りの夜、私は興奮して寝つけない、隣に主人がいるのが夢の様…、主人は安心したのか、グーグー、懐かしい。以前はこのいびきは安眠妨害で嫌われもの、孫が持っていた耳栓を借りて休んだこともしばしば！今はこのいびきも感謝、本当に夢の様！、神様、有難うございました。

その間、順調に見えていた胸の縫い合わせ場所から、糸が出たり化膿したりして塞がらない。検査、透視…CTを数度…MRと、手術も局部麻酔で二回、全身麻酔で二回行われる。

原因は、六月末の再手術が長時間に亘った為、筋肉が細菌に対して抵抗力がなくなり、又組織のバランスも崩れている、吻合部のひどい洩れもあった。強力な薬剤が使われてる等…、その上もう薬が効かない、先生方も頭をひねられる。

とうとう、十一月二十四日に最後の仕上げと、全麻でかなり広範囲に切開され、悪いところを切除される。これで一〇〇％といいたいのですが八〇％…でしょうかね、でもこれが最後になって欲しいです…、と切なる願いを込めて説明…。

「完治にむけ努力します」のお言葉、誠心誠意尽くして処置されるK部長先生、T先生に深い感謝！主の豊かな祝福をお祈りする。

創造の主を仰ぎ見て

前回手術の時、

私「外科医は厳しいですね。人間の可能性と限界に挑戦、患者の身体も症状も一人一人違いますし、常にそこで二者択一を迫られ、すぐに決断して、処置されなければいけない、大変なお仕事ですね。今の医学のすごさも分からせて頂きました」。

先生「いいえ、そんな大げさなことではないですよ、誰でもその気になれば出来ますよ、私達はただ人間の治癒力のお手伝いをするだけです。ただ体力だけはタフでないと…。だから私達は早死しますよ…」と、笑いながら、謙虚におっしゃる。

癒されるのは本当に人間を造られた神様／いろいろ教えられました。

人間の身体の精巧さ、緻密さ、そして治癒力には、ただすごい／の一語に尽き、創造の主を仰ぎ見るのみです。

今の医療の高度な技術、機器にも驚きでした。医療現場の厳しさに、胸を打たれることも度々ありました。

婦長さんはじめ、看護婦さん、看護助手のおばさん達、大変御世話になりました。有難うございました。

今も心に残る先生、ナースの方々の言葉の数々。

＊奥さん達の祈りが通じたのでしょう。

＊お祈りしてます。皆で応援してますから、頑張って下さい。

＊ベッドの傍らで、聖書を開いて祈っておられる奥さんの姿が、とても印象的で、私達も気が引き締まりました。

＊大田さんの病室に入る時は祈りながら入ります。

＊あんな厳しい中でも、「感謝です」の言葉が出ることが考えられない。

＊一時は、病院側があそこ迄することがよかったのか?、すごい薬の量、そして症状を見る時、普通なら不平不満の一言二言も言いたい所、何の不自然さもなく「感謝です」が、不思議ですと…。

＊奥さん達の看護に神様が助けて下さったのですね。

主の聖名を崇め感謝を捧げます。

十字架の御血潮を崇めて

思いがけないガン宣告、一度ならず二度、そして三度目の奇跡の手術回避で生かされました六ヶ月の入院生活。

神様の素晴らしいシナリオのもとで主の栄光を見せて頂きました。これまでは、『主の栄光』という言が、私にはあまりにも大き過ぎ、恐れ多く、遠い存在に思え、とても言い現すことが出来ませんでした。

処が、愛するが故にと、思いもせぬ主人の病気を通し、俄然事をなして下さいました。ご真実でいらっしゃる主が、み霊の不思議な力強いみ業をして、栄光を見せて下さいました。ただただ、厳かに受け止めさせて頂き、今は実感をもって、『主の栄光』をはっきり言い現すことが出来る様になりました。

この様な者を『わたしはあなたを贖った』と仰せられ、神の子とされて、祈れば応られる身分とされた十字架の御血潮を崇め感謝致します。

榎本先生がおっしゃいました。

「主のご愛は、研ぎ澄ました剣刃の上を歩いて初めてわからせて頂ける。本当に何も頼りにならない、ただ、主の聖言だけです…」と。

まさしくその処に立たせて頂き、

もし信じるなら神の栄光を見るであろう

（ヨハネ一一・四〇）

大きなお恵みをいただきました。私達はこの様な中を通ることで、まことの神様のご愛、人様の心の痛み、悲しみ、苦しみを、少しわからせて頂きました。

過ぎました日、主の奇しきみ業をもって、母、兄、姉を看とり、一美の病気を通し、一つ一つがこの時に備えられていました事を…、み業を崇めるのみです。天国に迎えて頂く備えもさせて頂きました。

待ちに待った退院のお許し、十二月十三日、喜びと感謝でベッド生活ともお別れ！。

クリスマス礼拝、祝会にも揃って出席、イエス様から何よりのプレゼントを頂きました。例年と違って格別、感慨一入のご降誕日でした。

この度は、榎本先生ご夫妻はじめ、教会の皆様の熱いお祈りに支えられ、神様のご支配の世界に生かされ、癒され、導かれました十字架の赦しとあわれみを心から感謝申し上げます。

ひとたびは死にし身も　主によりて今生きぬ
　　つみの雲消えにけり
み栄の輝きに　　主の愛に守られて
昼となく夜となく　　世にはなき交わりよ
いつか主に結ばれつ

（讃美歌五三二番）

先生方の懸命な処置にもかかわらず、胸の傷は完治とならず、二月と四月に再度入院、手術がなされ、只今も外来通院中ですが、傷も小さくなり、主にあって望みを持たせて頂いてます。

主の恵みにも馴れ易く忘れ易い私共に、小さく弱い者であることを心に止めなさいと…、主のご愛の記念のしるしと、感謝して受け止めさせて頂いています。

そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。…

わたしの恵みはあなたに対して十分である。

わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。

（Ⅱコリント一二・七―九）

雪のあしたに

上野米子

御聖名を崇めて、おめぐみを感謝いたします。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」

（伝道の書三・一）

「神のなされることは皆その時にかなって美しい。」

（伝道の書三・一一）

静かな朝、いつもと異なり、肩が冷え寒い。雨戸を繰り、ガラス越しに庭を見て驚きました。眼に映りし今朝の庭、何と素晴らしいことか、一面銀世界です。芽吹き始めた木々も白いベールをまといました。福岡に住まいして、雪らしい雪に出会ったのは初めてです。関東に居りました頃は、一夜のうちに三、四十ミリの積雪は度々でした。恵みの雪も、朝日を浴びて、水晶と替わり、庭木をうるおし、小砂利もぬれて、美しくなりました。

主の御わざ　春のあしたの　雪模様

豊年の　貢うれしや　雪の朝

雪とけて　春を告げるか　ふきのとう

日溜まりに赤くふくらむ沈丁花も、春を告げるかのように、静かに咲いております。

ガラス戸越しの光を浴びながら、私は針を運びつつ、自分の歩いた教会生活を省みて居りました。戦災に会い、疎開生活によって、教会生活は芽をつまれましたが、主人の姉の文書伝道によって、からくも根を枯らさずに居りました。主人の勤務が福岡になりましたので、子供の小学校卒業を期に、九月福岡に移り、姉の導きにより、福岡大濠公園教会が与えられました。見知らぬ土地に来ての御聖日礼拝には、それはそれはおそれをもって出席致しました。この日は姫路福音教会の末永牧師先生によって、お言葉をいただきました。当教会の折瀧先生のご健康がすぐれずとのことでした。

聖書は「ルカによる福音書一九・一〇」でした。

「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。」

暫く閉ざされていた私の信仰は、この時息吹き始めました。今日のご聖日、今日の聖言はまさに私に与えられた神様のみ旨でありました。

私はうれしくて、先生のお帰りがけ、車に足をかけられおる先生に小走りに急ぎ、感謝のご挨拶を申し上げました。心中も

語りました。「よかったですね」と言葉がかえり、握手をいただきました。そのぬくもりは心のぬくもりとなって、未だに残って居ります。

戦災戦後の試練の中に、神様のあわれみを賜り、限りなきご愛とお力をいただき、守られてまいりました。

「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。」

（Ⅰコリント一・一〇）

まことにお言葉の通りでございます。

尊い御聖名と十字架の御血を崇めて、心から感謝を申し上げます。

平成七・三・五記

阪神・淡路大震災被災地視察報告

正野眞宏

平成七年一月十七日早朝、阪神・淡路島地方を襲った震度七の直下型地震は、一瞬の内に家屋を倒し、五千人もの尊い人名を奪った大震災となった。

百年間も大きな地震がなかったこの地方、人々は地震に対する備えもないまま、安心して経済発展を最大課題として近代都市を築いてきたが、それらがもろくも崩れ去った。それはかって人類が神に近付こうと営々として築いたバベルの塔を神様が壊された様を思い起こさせる。それにしても自然の力の前には、なんと人間の力の弱いことであろう。あらためて私たちは神を畏れなければならないと思う。

さて、北九州市では、さっそく政令指定都市の先輩格である神戸市に、その日から消防局を中心とする救助隊が派遣され、瓦礫の下敷きになった人々の救出に当たった。私はビデオに記録された救出シーンを見せてもらったが、一般のテレビでは見られない生々しい画像は、まさに感動ものであった。また、私の属する保健福祉局が中心となり、医師会の協力も得て医療救援隊が三日後に派遣された。活動拠点は兵庫区の兵庫高校で、

そこには約二千人の被災者が避難していた。被災者は寒さだけではなく、これからどうなるのか、いつまた大地震が起こるかわからないという余震が続く中での不安、そして病気。医療救援隊はこれらの人々の治療と精神的なケアを担当した。

一時の混乱が治まり、復興に向けての活動が軌道に乗り始めた頃、市内部では、もしこの震災が北九州市で起こったらどうなるか、その対策を事前に講じなければならない、そのためには幹部は現地の状況を直に見ておく必要があるということになり、医療救援隊の激励も兼ねて神戸市に視察に行くことになった。私は他の四人とともに、まだ新幹線も在来線も全面開通していない二月十日、神戸市に向かった。

以下、その時の神戸市の状況と印象を記してみたい。

JR車中にて

新幹線姫路駅からJR神戸線に乗り換え、兵庫駅へ向う。明石市に入る頃から木造家屋の屋根にビニールシートを覆うている様子が目に付くようになり、いよいよ被災地に入ったことを予感し、胸の高まりを覚える。

神戸市に近付くに従い、被害の状況がひどくなる。古い木造家屋はほとんどやられている。それも原型を止めていないほどの壊れようだ。

横倒しになり、崩壊寸前の家が目に付いた。それはなんと弱々しい姿だろうか。我々は家を堅固な安全なものとして信頼し、安心してそこで寝ている。しかし、その実態は、自然の前になんと無力で、頼りないものであろう。

砂の上に家を建てた愚かな人の例えを思い出した（マタイ七・二四）。人は嵐が来ることを忘れている。思ってもそんなに大したことではない、今のままで大丈夫と考えている。いま自分が砂の上に居るのだと言うことがわからない。しかし、その嵐は我々の想像以上のものなのだ。その時、人々は途方に暮れる。我らが信頼し、寄って立つまことの岩は、神の言葉以外にはないことを思う。

「このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは怒れない。」（詩篇六・二）

兵庫駅にて

兵庫駅に降りる。外は時折小雪がちらつく寒さである。この寒さの中で被災者はどうしているのだろうと、ふと思った。ここはなぜかエアーポケットのように被害がないので、被災地にきたという感じはない。店もほとんど開いている。

ちょうどお昼時だったので、どこかで昼食をすることになった。同僚がもし食べるところがないといけないからと、駅弁を買っていた。公園で食べようかということになって行ってみたが、寒くてとても食べる気はしなかったとのこと、寒い避難所で冷たい弁当を食べるしかない被災者の惨めな気持ちがわかったような気がした。被災者に気兼ねしながら、近くの店で暖かいうどんを食べた。

被災地の状況

医療救援隊が用意してくれたマイクロバスで、被災地を一巡することになった。道路は市街地の一部を除いて、ほぼ開通していた。各地で復旧作業が懸命に続けられている。

兵庫駅から少し行くと、辺りの様子は一変する。木造家屋の一階部分が完全に潰れ、二階が一階になっている。それは異様な姿だ。二階に掲げられた商店の看板が目の高さになっている。直下型地震は家を持ち上げ、そのまま落ちたので、自らの重みで一階がつぶれたのであろう。一階に寝てたらほとんど助からない。

その横に建っているマンションは無傷のようだ。また同じ木造でも被害が少ない家もある。ほとんど同じ場所に住んでいながら、余りの違いに「ひとりは取り去られ、ひとりは取り残されるであろう。」（マタイ二四・四〇）という主イエスの言葉を思い出し、衿を正す思いだった。

最も被害が大きく、大火災となった長田区へ行く。テレビや新聞で見ていたが、実際に見るのと大違い。木造家屋は全部焼け、所々残ったビルは痛々しく焦げた姿を曝している。それが

広範囲に広がって、異様な雰囲気で、ただ言葉もなく、立ち尽くすだけだった。それはまるで戦災跡地である。焼け残った所は全く見る影もなく、あんなにもグチャグチャになるものだろうかといぶかるほどであった。

神戸の中心街、元町へ行く。十五階建てぐらいの明治生命ビルが傾き、中程で折れ曲がっている。建築技術の粋を集めた建物がこんなになるなんて、ただ茫然と見ているだけだった。神戸市役所の旧館の三階部分が完全につぶれて無くなっていた。ビルの玄関口の所の地面が二十センチぐらい下がっている。とても信じられないほどの力が働いたのだ。

ふと、イエス様がおっしゃった「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう。」（マタイ二四・二）を思い出した。当時の神殿がバラバラになるなんて、弟子たちにとっては信じがたいことだったに違いない。今の人間も同じことを考えていた。しかし今、それが現実となった。神の前には人間をどんなに誇ってみても、それは何とはかなく小さなものであるか。

避難所の状況

兵庫高校の避難所一箇所だけを見たが、とても中に入って様子を見ることははばかられる。今は数が減って、約千人とのこと。医療救援隊の話しをまとめてみる。

避難した当初は皆助かったことを喜び、安堵していた。しかし、時間が経つにつれ、家や家族を失った悲しみ、これからの生活の不安が押し寄せてくる。加えて余震が続いて、そのたびにあの時の恐怖がよみがえる。また大きな地震が来るかもしれないというデマが飛ぶ。飢えと寒さで眠ることもできない。

心身の疲れ、栄養不足から体を壊す人が増えてくる。精神的にイライラしてトラブルが起こる。二千人収容に三百個のおにぎりしか来ない。分配をどうするか。

高齢者が悲劇だ。寒さの中で持病が悪化する。夜中にトイレに行こうとすると、他人の布団を踏むので文句が出る。それで我慢をしてちびる。臭いと言われて、とうとう入り口の所にやられる。そこはまた寒い。おしっこをしないためにと水を控える。すると脱水症状を起こして病状を悪化させ、たちまち寝た切りとなる。

ここでは情報が最も必要だ。デマが飛ぶ。問題を解決する仕組みがない。リーダーがいない。それが一層混乱を生む。

我々も困難にあった時、神様からの情報（聖言）が特に重要だ。それが途絶えると、慌て混乱するのだ。

市役所の状況

震災当時の市役所は、ほとんど機能しなかったそうだ。それはそうかもしれない。なにしろ市役所そのものが被害を受け、職員も死亡したり、家と家族を失ったりして、とても役所に行ける状態ではない。また行ける人はいても、交通は寸断され、行くすべがない状態である。大混乱の中で職員確保はできなかった。

加えて電話は通じず、どのような被害なのか、どこが被害がひどいのか、いま何が必要なのか、まったくわからない。しばらくは無政府状態だったようだ。市の幹部は不眠不休で疲れ果て、放心状態だったという。

自衛隊が入り、全国から多くの応援部隊が駆け付け、被災者救済や復旧作業は急テンポで進んだ。救援物資も全国から寄せられた。直接避難所に持っていった分はよいが、トラック便などで市役所送りになった物は、そこから避難所に送り出す手段がないため、しばらく山積みされていたそうだ。食料品などは駄目になった物も多くあると思われる。また、医薬品なども、テレビで湿布薬が不足していると放送されると全国からドーッと来る。しかしその時は湿布薬よりも、風邪が流行って薬とマスクが不足、それが放送される。治まった頃、また全国からドーッと風邪薬が届くといった具合で、使われない医薬品が倉庫に山積みされているという。システムがないと、すべてが後手後手になり、必要なものが必要なときに届かないことになる。

混乱期の危機管理能力の重要性を思わされる。

私たちも予期せぬ出来事に遭遇し、慌てることがあるかもしれない。その時、私たちは弱くとも、危機管理能力はなくとも「汝、心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ」（ヨハネ一四・一）とおっしゃる主が共に在すということは、なんという大きな力だろう。

「天災は忘れた頃にやってくる」とあるが、日頃から防災訓練に心掛けていないと、いざ鎌倉という時に慌てることになると同じように、私たちも危機的状況に陥った時にうろたえることのないよう、日頃から主との交わりを欠かしてはならないと思う。

ボランティアの状況

頼りとすべき行政は機能せず、市立病院も崩壊して救急医療

にも支障が出て、文字通り都市機能がマヒしたとき、被災者の身近にあって支援活動に当たったのが、全国から集まったボランティア達である。

私が行ったときも、どこの避難所にも、福祉施設にも、街角の交通整理にもボランティアが活動している。どこから集まって、どのような組織があって誰がコーディネートしているのかわからないが、とにかく多くのボランティアが被災者の中に入って、炊き出しなど献身的な活動をしている。兵庫高校の避難所にいった時、ちょうど被災者をバスに乗せて風呂へ連れていくところだった。これは行政にはなかなかできないことで、かなわないと思った。

私たちが長田区を歩いて見て回っていると、壊れた民家に一枚のはり紙がしてあった。「私たちを助け出してくださった方、いま〇〇避難所で元気にしています。ありがとうございました」と書いた礼状だった。多分、通り掛かりの人が下敷きになった年寄り夫婦を救い出し、名も告げずに立ち去ったと思われる。それでお礼のしようもないので、このようなはり紙をして感謝の気持ちを表しているのであろう。心温まるエピソードである。

それから、医療救援隊の話だが、日頃、町内の自治組織がうまくいっているところとそうでないところとでかなりの差が出たという。例えば、先の例のように、避難所に僅かな食料しか差し入れがない時、多くの場合は奪い合いになるところだが、自治組織がしっかりしているところは、代表者が集まって分配の相談をし、まず子供と年寄に配るなど、いろいろな問題をみんなで話し合って円滑に解決している。また、いつまでもボランティアの皆さんに頼ってばかりいてもいけない、自分たちでできることはやろうと、自立に向けて立ち上がってきているとのことである。この差は大きいと思う。

今、ボランティアがだんだん手を引いてきている。それは救援が長くなると、被災者が救援慣れで依存心が強くなり、自立心を阻害しているという反省からである。

助けるという一事だが、難しい問題である。

神様が私たちを助ける時、いつもこの問題と直面しておられるのかもしれない。神様は助けたくても、私たちが肉についているので、すぐ甘えの構造が出てくる。「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない」（ヨハネ六・六三）「肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安」（ローマ八・六）なのである。

神様の願いは、神様の恵の中に眠り込むのではなく、信仰をもって立ち上がって来ることではないだろうか。艱難の中にあっても、神様がなんとかしてくださるだろうと座り込むのではなく、この中で神様は私に何を求めておられるのか、ここで私は

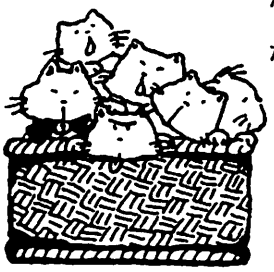
何をなすべきか、聖言に従って立ち上がっていく。この自立の信仰によって、神様は私たちを聖別してくださるに違いない。

帰途に着いて

あちらこちらと回ったので、いささか疲れた。気が付くと五時を過ぎている。冬の日没は早い。高架となっている兵庫駅のプラットホームから見る夕日は美しかった。

人々が災害に会い、肉親を亡くし、生涯を掛けて築いた財産を一瞬のうちに失った心の嘆き、悲しみ、涙、絶望…そういう人間の営み、歴史を超越して、変わらない姿を見せていた。私は今までのことを忘れて見入っていた。そこには不思議なやさしさ、暖かさを感じていた。

ふと、ノアの洪水のことを思い出した。方舟から出たノア達が最初に見たものは、美しく陽に照らされた虹だった。それは神様の救いのしるしでもあった。今、神戸の街を暖かく照らす夕日の中に、愛をもって見つめておられる神様の眼差しを感じ、言い知れぬ希望が湧いてくるのだった。



雑　詠

榎本　利三郎

豊かなる　主のみめぐみに　今朝もまた
新たな世界に　生んとぞ思う

梗塞をわづらいし妻の枝となり
歩きつづける栄光の道

目さむれば主の臨在に包まれる
こよなきめぐみ涙あふるる

主のめぐみ豊かに賜り八十路過ぎ
短かき夜も長々と眠る

主のめぐみ豊かに給いて今朝もまた
新しき生命に歩みゆかなん

おりおりにうけしめぐみを忘れじと
詠めるこの歌　埋め草となる

いたづきていためる妻のあわれなり
われ夜もすがら祈りつづける

忘れじと思いて忘れるあわれなり
うけしめぐみの限りなきかな

・旅　雑　感

広々とひろがる田面の切株も
青々芽ふく延岡の旅

ひるさがり列車走れば幼児の
赤いランドセルゆれて走るも

冬枯れの山ふところに赤々と
柿の果美し豊後路の旅

伐採の跡痛々し山肌に
雑木にすがる病葉あわれ

みどり濃き杉山に射す夕陽かげ
色とりどりに紅葉照らすも

日向路を駆ける列車に夕陽射し
辿る夢路は果ることなし

夕陽うけ色鮮やかに銀杏の木
絵にも描き度し歌にも詠み度し

マラソンに名を知られたる延岡の駅
人もまばらに秋風の吹く

永遠の課題（ローマは一日にして、成らず）

緒方　とみ子

一九八二年に、私は「おともだちの会（祷告簿）」というのを作りました。一九八〇年に、受洗いたしましたが、神様の事も分かっていず、まして祈る事さえ、心の中にあるものを吐き出すなんてとても恥ずかしい事でした。ですから、祈りが出来ずに困りました。私が始めて祈ったのは、確か食前の感謝だったと思います。故野村先生より「とみ子さん、お祈りして下さい」と言われドキッとして、何を言ったのか覚えていませんが、とてもさわやかなものが残りました。学生時代の友達や洋裁仲間が多いので、祈ってみたいがどう祈ったら良いのだろうかと言う疑問で、私は子供が集ってる日曜学校（高木・岩隈先生のクラス）にも参加させて頂き、八幡前田教会の祷告会（金曜日）にも出掛けましたが、ベテランの先生方にまじって「今日こそは！」と思うものの、踏み出す事が出来ないまま自然に足が遠のきました。一九八三年に、私は、姪達に笑われたのですが、白紙（六〇×八五㎝）の上に日本地図を書き（祈っている方々の家を訪ねてまわりたいと―私の夢です）赤印を付けて、その地図を見ながら祈るのだとハッスルしたものの、一人で祈る事は本当に難しく、言い訳ばかりで二年続いた後はプッツン。一九八八年十二月二十五日クリスマス礼拝後、私は、現在「緒方新聞（クレマチス）」と「おがたしんぶん・夏休み子供版（ルコー）」を作るきっかけとなったワープロを習いに、戸畑教会に二泊させて頂き、感謝な事に、ワープロまで貸して頂いています。残念ながら主人は仕事でしたので、一緒に礼拝出来ませんでした。

一九九〇年に、祈っていた主人が受洗し一緒に教会へ。所が相変わらず昔の習慣（私も身に覚え有り）と仕事の都合で、思うように出掛けられず、クリスチャンホームも夢の中です。しかし伊規須先生が、家庭礼拝を教えて下さったので、二人で六月よりするようになり、神様との交わりタイムも持てましたが、三年二ヶ月で、これも又プッツン。

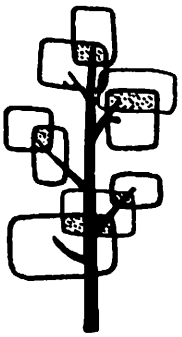
一九九三年十月三日に息子の婚約者を連れて四人で礼拝。我家も、遅れながらも××家の様なクリスチャンホームを目指しています。亡父から私への最高のプレゼントが今、開かれようとしています。（故野村先生宅で書かれた六十の手習い「救主福音」の文字が、頭に浮かびます。）

一九九四年三～四月号で「おがた新聞（クレマチス）」が、三十号を迎えました。始めは、なんでも記事になりましたが、同じ事ばかり載せていると、自分もいやになり、多分読む人も

同じだと感じてしまったり、それから記事になるような事を勉強もしました。しかし「楽しみに待っています（感謝）」「あーうるさいな、犬のことばかり」「私の事を載せて頂いて有り難う（感謝）」「ワープロ、頑張って下さい（激励）」「もう送らなくて結構よ」色々な批判と形で読まれていますが、たとえ捨てられても、支えられている神様に感謝し、我家と自分自身の証を書き送り続けて行きたいと祈っています。

我家の庭にクレマチス（植えて七年目）、ルコー（植えて二年目）が有りますが、それぞれの花の出会い話（神様の許しあれば一九九五年の夏休み子供版に予定）もあり、天に向かってどんどんつるを巻きながら伸びて行く姿勢を見習いたいと思っています。

若い人はどうしておのが道を清く、保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかありません。



自転車盗難事件その二

畠山英子

〈教会に出られる喜び〉

◆畠山正三が主のみもとに召されてから、彼の生前むずかしかった教会出席も、感謝のうちに出来るようになりました。日曜日の御礼拝、夜の伝道会、水曜日の祈祷会、金曜日の婦人会（金曜会）など、御臨在に近づけて頂いております。

まず私の家より自転車で下曽根駅まで…朝は九時二三分の列車、夜の集会は六時半に駅まで行く。日曜日は息子と車で教会へ。

下曽根駅のホームまでの階段、西小倉（駅）での乗替の階段、九工大前（駅）のホームの階段など、足は弱いのですが、列車が遅く着いた時は、若い人に負けずにかけのぼる事が出来るほどの足になりました。

最近年をとりまして自転車の運転もにぶく、毎々こけたりおきたり、にぎやかな私です。だから怪我をしたりするのですが、行かせて頂ける間、主のみもとに近付けて頂きます事が何よりの喜びです。

近所の同年齢の方が、お稽古にダンスにと忙しく出て行かれますが、私はほんとうに主なる神のもとへ行かせて頂けると感

謝しながら自転車で（下曽根）駅まで走ります。この自転車は［家←→下曽根駅］間の専用です。

一方、九州工大駅前では、ぶどうの木一九号にのせて頂いた盗難事件のあと、立派な自転車置き場が出来ましたので、［九州工大駅前←→戸畑教会］間の専用自転車を安心して預けておけます。

〈下曽根の発展と新しい自転車置場〉

◆最近（この四月から）、下曽根駅前の発展は目覚ましいもので、振興住宅地からの人の波です。また大手スーパー「西友」の進出で、改札の駅員は多い時は三人になります。（以前は一人で充分でした）

それに、駅の自転車置き場には千台からの自転車です。この前、教会に行こうと九時の列車に乗った時、千五百番の番号札を貰った始末です。この置き場は立派な建造物で、係の人も五、六人いて整理しています。しかしそこまで持って上がる（自転車と共に乗る特殊な）エスカレーターが非常にきついので、私はそこに預けるのをやめて、駅の階段の前の道路のかたわら、フェンスの所に置くことにしました。

〈以前から自転車盗難事件が多かった〉

◆その前のことを申しますと、私はここ数年の間に三台の自転車をとられています。そもそも下曽根から乗る学生は、たちの悪いのが多く、（とられたのは）私ばかりではありません。ちょっと油断？すると乗り逃げ乗り捨てされるのです。現に、最近私の家のまわりに三台、あちこちに自転車が捨ててありました。名前の書いてあるものは御本人にＴＥＬしてあげましたら、喜んで下曽根町からとりにこられ、「もうこれで二度目」との事でした。うちの隣の人は、貫の山の方の道ばたに捨てられていたのを人が見つけ、取りに行かれました。

あるとき、立派な自転車が捨ててあるので、派出所にＴＥＬしてあげましたら、車体番号を聞かれたのはよろしいのですが、「持って来てほしい」との事。自転車二、三台（乗り捨て）ぐらいの事は、多忙な派出所にとって問題にならないらしいのです。

〈再び自転車をとられる！〉

◆話が横にそれましたが、それは四月でした。多くの自転車にまじってそこに置いて、鍵をかけておき、水曜夜の祈祷会へ行く。祈祷会がすんで、下曽根駅におりたのが十時前です。そして自転車をとめておいた所に、片手に聖書のバッグ、片手に鍵を持って行く…しかし自転車が見当たらない。「無い!!とられた!!」。一生懸命にほかの自転車の間など探しましたが、無くなっている。私は立って祈る。もう十時近くて駅より降りて来る人は少ない。紛失していない人は、自分の自転車に乗ってすーっと夜の闇に消える。私は歩き出しました。そして祈りました。

「主よ、このあいだ買ったばかりの自転車です。遊びに行ったのではありません。この自転車がなくて歩けば、足の指の間がすれて痛みます。しかも、自宅までは淋しい所で人家も少なく、囲いのある家ばかりです。あの自転車は二万六千円もしました。どうぞ探し出して下さい。戸畑（九工大前駅）の時も見付けて下さいました。みわざをあたえてください」と。

〈三日目の奇跡！〉

◆そして家にかえり、月曜日も火曜日も探しに行きました。しかしありません。新しく自転車を買う事にきめて、水曜の夜も探しに行きました。（水曜日の朝の集会で先生に祈って頂く）。夜の十時ごろでした。息子の車にのせてもらって、自転車のなくなった付近を見に行きました。「おや！」と、わが目を疑いました。見覚えのある車体、四、五台の自転車の間に、無造作にもとの位置に（方向は逆でしたが）おいてあります。無くなってから三日目です。鍵はこじあけてのけられていました。前と後の買いものかごもありません。しかしまさしく私の自転車です。

〈奇しき御業をなさる神に感謝〉

◆私は涙が出る程うれしく、感謝致しました。主は私の祈りをお聞き下さったのです。私は夜の空に向かって、今度は神と主なるイエス様に声を出して感謝致しました。主は悪坊主の心に仰せられたのでしょう。「もとの所へ戻しておきなさい。それは畠山英子が教会へ行くのに必要な自転車です」と。主はお働き下さった。

「もろもろの主の主に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない
ただひとり大いなるくすしきみわざをなされる
者に感謝せよ。そのいつくしみはとこしえに
絶えることがない」

（詩篇一三六・三―四）

〈あとがき〉

◆回数券を買って、きつくても自転車置場に預けることにしました。係の方たちにこの話をしますと、「そんな事はめったにない、いや殆どない。幸運じゃったなあ」と感心していました。私の「自転車盗難事件その二」はこれで終ります。

伊規須先生は私の知らない間に下曽根駅の自転車置き場に来られて、係の人に「どうしたらたやすく置かれるか」尋ねて、研究して下さったそうです。感謝です。おまけに、私の隣組の御夫婦が整理係に採用され、持って行った自転車を二階だてセットに置いてくれる事がわかりました。

でも私はチェーン鍵を買い、忙しい時にはフェンスにつなぎます。

以　上

二回目のOB会

久保田　宮子

待ちに待ったOB会を五月二十八日（土）に黒崎の古仙で行いました。神様の恵みを一杯に受けた爽やかな晴天です。

間違いのない様世話人としては連絡をしたのに、当日一人来なくて終了まで心配し帰宅後電話すると、人間の勘違いとは恐ろしい事で次の日曜日と思い込んだらしく、とんだハプニングでした。然し、そのお陰様と言っては変ですが、最初の予定より会員が減ったので赤字が出て困ったなあと思っていたところ、その方より迷惑料と言って多額の御祝儀を頂き、思いもかけない出来事にただただ感謝しました。本人には大変申し訳ない気持ちです。出席もしないのに会費と祝儀まで出して頂いて!!

然し、何と言っても発起人の柴田さんと言う方が満九十才を迎えられましたが、とてもお元気で自分で漬けた瓜の味噌漬けを会員全部にお土産として下さったのには驚きました。とてもおいしく、感謝してかみしめて食べました。百才漬と書いて手紙がそえてありました。その内容は、「私もやっと九十才になりました。そこでもう一頑張りとの念願で百才漬を作りました。先ず瓜を作り、米味噌に漬けて、これを毎年百名様に差し上げて召し上がって頂いています。どうぞあやかって召し上がって下さい」。感謝です。

今回つくづく思った事は、年々病気の方が多く予定の半分しか集わず、世話も大変なので、今回で終了したく意見を聞こうかと思っていましたが、この会が生きがいであると最高令の方から挨拶されるとついつい言う事が出来なくなり、私共も柴田さんにあやかって出来る限り頑張らねばと思いました。例の如く主人が衣裳をつけ歌で盛り上げ、美味しい料理に花が咲き、盛大の中に又二年後を約束し終了しました。病気の方の多い中で、私共二人は人様のお世話をさせて頂く事の出来る喜びを神に感謝しました。信仰も全く同じで、神と人から愛されてあやまちなく人生を全うする事が出来ます様祈り続けて行く覚悟です。拙な短歌ですが

百才漬を噛みしめかみしめ味わいて
　卒寿を迎えし人ぞ思う

二年振りにまみえし友よ美しく
　きざみし皺に人柄の出ずる

手作りの雛人形を送り来し
　友の顔思いて涙こみあぐ

祝福された一年

金生一郎

主の御名を崇めます。

神学校にきて、早いもので一年になります。この一年間、振り返ってみると、さまざまなことを経験させていただき、あっという間に終わってしまったような気がします。伝道集会やキャンプなどで奉仕させていただいたこと、路傍伝道、訪問伝道、キャロリングなど今まで経験したことのないことをさせていただいたことなど、自ら恵まれ、喜びに充たされた時もありました。しかしその逆に、先輩や同級生と考え方の違いから衝突した時、奉仕の結果を見て焦るなど、神様を見失い（自分から目を離してしまって）、自分にはやっていけないのではないかと思った時もありました。そして年があけ、最後には関西大震災をじかに体験し、深く考えさせられた一年でした。

そのなかでとくに教えられたことは次のことでした。

まず一つは自分自身が本当に愛のない人間であるということに気づかされたことでした。誰とでもあわせることができるように思っていた私でしたが、湊川伝道館で団体奉仕を通して、一人の留学生とぶつかってしまいました。教会の奉仕、特に掃除などをしているとき、「彼はなぜきちんとしないのだろう」と思い、最初は注意していましたが、その後だんだんと注意することもせず、逆に「彼はそういう人なんだ」とさばいてしまうようになり、自分だけでぶつぶつ言いながらするようになっていきました。そしてその思いがどんどんエスカレートしていき、自分自身のうちに壁を作り、そのなかに入ってしまい、不満をためこんでいき、そしてさらに大きな壁を作ってしまうという悪循環を繰り返すようになってしまいました。その根本には自分自身の奉仕に対する義務感、いやだという思いがあったからだと思います。

そんなときに迎えたのが、九月の断食聖別祈祷会でした。三日間の断食でしたが、その間、静まる時が与えられました。そして最初のメッセージの時に、「あなたに何を与えようか、求めなさい。」（列王紀上三・五）とのみことばが与えられたのです。そこで私はその時悩んでいた彼との関係について祈ることとしました。「他の人を愛するようになりたい。その愛を与えてください」と祈り始めました。

断食聖別祈祷会も三日目になり、ヨハネの第一の手紙四章を読んでいるときに、自分は今まで自分の愛が自分の利益を求めている愛であったということに気づかされました。自分にとって都合のよくないことは排除し、都合の良いことだけを受け入

れようとしていたのです。他の人が何かして下さったとしても、いいことであれば、あまり気にもとめずに受け入れ、悪いことであれば、ちょっとしたことでも、心のなかで怒り、不満をためていたのです。そのことに気づかされた時に、「もしわたしたちが互いに愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである」との一二節の後半の部分が、私にとって、力となり、ささえとなりました。自分には愛はないが、しかし神様は互いに愛し合おうとするわたしたちのうちに働いてくださり、そして神様の愛を現わしてくださるのだと思ったとき、言い知れぬ喜びがあふれてきました。そして留学生の彼に対して初めて心を開き、謝ることができ、祈り合う、感謝の時をもつことができたのです。呼べば答えてくださる神様は、今も変わらなく答えてくださることを体験でき、感謝でした。

次に教えられたのは、十一月の神戸聖会の時でした。私の心の中は、みんなを引っ張って、この聖会の奉仕を全うしなければという義務感に支配されていました。奉仕の一つに聖会中の賛美の奉仕がありました。義務感からきている奉仕のため、私には全く喜びがありませんでした。そしてその影響は他の奉仕者にも及んでいました。私は「なぜこんなにうまくいかなのだろう」と悩みだしました。

そんな中で、一日目のわたしたちの賛美が終わり、二日目の留学生の賛美を見たとき、留学生の彼の賛美の表情が全く違っていることに気づかされました。そしてその姿を見たとき、私は今まで奉仕がうまくいかなかったのは、私のせいだったのではないかと思うようになりました。私自身、全く自信をなくし、「自分は神様に仕えていくことはできないのではないか」とか、「神学校にいても、変わることはできないのではないか」などと悩み出しました。そんな私の姿をみて、同室の神学生は心配し、「祈ろう」と言ってくださったのですが、「天のお父様…」と言ったきり、全く祈ることができませんでした。祈ることに確信がなく、だれに祈っているのかわからなくなってしまったのです。次の日、授業にでようとすると、周りの人から止められるほどで、元気がなく、食欲もなく、結局、金・土と二日間、授業を休みました。金曜日は聖会だったので、奉仕には行ったのですが、土曜日は奉仕も休み、何もしないという状態が続きました。そうしているうちに、だんだんと気持ちが落ち着いてきて、聖書を読んだときに「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」（ヨハネ一五・五）のみことばが与えられました。そして自分の奉仕をふりかえってみると、確かにイエス様から離れて、自分の奉仕をしていたことに気づかされたのです。自分で奉仕を作り上げて、その完成させたも

のを神様に献げようとしていました。神様の管としての奉仕でなく、神様に対面して、まるで自分が同じ立場にたっているかのように高ぶった状態で奉仕をしていたことに気づかされました。そしてそのことに気づくと、本当に久しぶりに祈ることができるようになりました。形式としての祈りでなく、心から感謝し、素直になって神様に祈ることを経験しました。

入学してから、それまで小さな波はありながらも、なんとかやっていくことができるという思い高ぶりをもっていましたが、それもその経験によって、砕いていただきました。私は神学校に入る前に、神学校から逃げだしたくなることがあると聞かされていました。しかし私自身、厳しい教会献身を経験したのだということを誇りとしており、自分は逃げだしたくなることはないだろうと思っていました。そんな私を神様は取り扱ってくださり、イエス様がいなければ、決してやっていくことはできないのだということを教えてくださったのです。これから先もさまざまなことがあり、これ以上にやっていけないと思わされることがあるだろうと思いますが、その度ごとにこの経験を思い出し、主に立ち返らせていただくのだと思い、感謝しています。

最後は関西大震災に関してです。

地震が起こった一月十七日、五時四十六分。私は六時からの早天祈祷会に備えて、ベッドの上で、起きて祈りはじめたところでした。突然、ガクッと大きなゆれがあった後、二十秒ほど揺れが続きました。最初は何が起こったのかわかりませんでしたが、地震だと気づき、とりあえず布団を頭からかぶり、祈りながら揺れがおさまるのを待ちました。そして揺れがおさまってから外にでました。神学校は建物自体はどうもないようでした。しかしテレビやラジオによって災害の状況の報道を聞き、その大きさに驚かされました。また余震がつづいたり、風によって灰が飛んできたりするのにも災害の大きさが薄々と感じられました。

そんな中、神学校でわたしたちは二日ほど、学校で祈り、待機することになりました。そして三日目から阪神地区の教会の救援活動にあたるようになりました。神学校の中で話や映像としては知っていても、実際に出てみると、そのものすごさに圧倒される思いでした。普通に見えていても建物の一階が全くなくなり、まるで二階が一階のようになっているところ、また全壊してしまって、すでに瓦礫のようになっているところもありました。火事が起こったところでは、あたり一面焼け野原になっており、まるで空襲の後の写真のようで、一週間後でも焦げ臭い匂いがしていました。救援活動も瓦礫の片付けや家財道具の整理、また炊き出しや救援物資の配布、さまざまなものがあり、

いろいろなことを経験させていただきました。

その中で、わたしは二つのみことばをいただきました。

まず一つが「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」（ヨシュア一・九）でした。このみことばは年頭の新年聖会で与えられたものでしたが、地震の起こった日、不安になり、先のことを考えようとしていたときに、本当にこのみことばが力となったのです。「今、余震が起きたら、どうなるのだろう」などとつい思ってしまい、何も手につかないようになっていました。しかしそのときにもう一度このみことばが与えられ、今までわたしを守ってくださり、そして導いてくださっている神様が共にいて、わたしを今このように生かしてくださっているのだということに気づかされ、初めてこの恐れから解放されました。そしてもう一度、主の導きであればどんなところにもいくのだという決心をすることができました。

もう一つのみことばが「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」（ローマ八・二八）でした。有名なみことばであり、何度も覚えていたみことばでしたが、このみことばの力強さを初めて教えられました。震災によって様々な苦難を受けたり、また家族と連絡をとれずに心配している人と出会いました。その時にわたしは相手とともに悩んでしまうばかりで、何も力になれないことに気づかされました。そんなときにこのみことばが与えられたのです。現実がどうなるかをいうことはできなくても、神様がこのみことばを与え、そしてそれを信じていくときに、わたし自身がまず力を受け、そしてその神様を伝えていくことができるのだと思います。

このように神学校での一年間はわたしにとって、山あり谷ありの一年でした。しかし、かけがえのない、恵みにあふれた一年だったと思います。これからあと二年間の学びがありますが、さらに主は恵んで下さると信じ、また従っていきたいと願っております。

「わたしに呼び求めよ、そうすればわたしは答える。そしてあなたの知らない大きな隠されていることを、あなたに示す。」

岐路

緒方　とみ子

見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。ただ、あなたがたの不義が、あなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。

（イザヤ五九・一―二）

◆我家には、絶えず問題が有ります。問題のない家などないでしょうが、やはり私達夫婦が神様に選ばれて、祈るべき課題を常に持っていなければ生温かい信仰になるから、やはりそこは親であるべき主が、新年の標語の如くに、「今の時を生かしなさい」とおっしゃっていることを教えられます。

◆しかし、私は今まで「救い」に対して深く考えた事が有りませんでした。所が、我家にある問題が起こり、初めて救われている事がどんなに大事な事であるのか、更に、その事で私達夫婦が取るべき事はなんなのかと言う事を、深く教えられ、現在、心からそのようになる事を祈って、生活しています。

◆事の始まりは、＊「御犬様」です。偶然にも、新年頃に子犬を出産予定と言う、問題のある親犬が我家に出ました。これまでは、新年はいつも教会に出掛けていたのに―あれほど神様に頼んでいたのに、なんと言う事か！

私は、「イザヤ章」を読んでいて、この聖言に出会った時に、今までの自分達の「不義」について考えさせられました。それに、お互い年なのでしょうか？近かった箱庭のような戸畑教会がこの所随分と遠くに感じられ、お互いなにかの理由を付けては遠ざかっています。おまけに、神様に信頼申し上げるなら話しは分かるが、御犬様にどうも主人は貢ぎ捲っています。私も随分時間を使っています。

◆そんな時、問題は重なるものだと思いました。一人息子の結婚です。相手の方はこれも神様の悪戯でしょうか、主人の中学の時の親友の娘さんでしたので、お互いに二十数年ぶりの再会に驚いたわけです。彼女にはすでに母親がなく、祖母と兄の四人暮らしで、息子とは会社で知り合ったと言う事でした。我家も、クリスチャンホームを目指しているものの中身はまるでなっていませんが、信仰薄い夫婦（結婚して九年目）にしては、曲がらなかった息子（良く出来たと言いたいが、それは神様の一重の哀みによるものです）と付き合って二年余りのおかしな家庭です。家庭環境や性格が似ていて引かれあったのか、どうしても結婚したいと言う二人でした。

◆お互いの家が納得はしていましたが、何時、結納や式を上げるのやら全く決まっていず、息子もしっかりしていませんので、

若さゆえの過ちで「どうも子供が出来たらしい」と言う話が出ました。それからが大変でした。しかし、よくよく考えて見ると、結納〜式〜出産ですから、問題はないのですが、お互いの家にとっては始めての事だらけでしたので、なにをしても不満が付いて、一向に話が進みませんでした。それに一番悪いことは、先方の家に我家がクリスチャンである事を主人が隠していますので、言いたいことも言えず、じっと我慢をしていますと、主人の爆弾はいつも私の方向にやって来て堪ったものでは有りませんでした。しかし、私も随分と横着になっていると良く主人に言われますので、神様の前でも多分そうなのだろうと、自分の信仰度にチェックを入れます。（しかし、根付いた物はなかなか取れないので、祈っています。）本当にこの結婚の話し合いが進まなければと頭の痛い思いをし、伊規須牧師にも祈って頂いた私達でした。本当に問題は息子の結婚式なのか、親子関係の事で、親友から親の責任を問われたりして、御金の無い懐を探られたりしましたが、結局、自分が一生懸命に神様を求めて通っていた事を懐かしく思い出したのです。主人にも「のがれの道」を神様は用意して下さっていたのかと思ったら、とても感謝でした。

◆それに、前にも証しをしたように、教会まで高速道路を使っても一時間半はかかりますし、近いと思っていた道が随分と長く感じられ、強かった（会社では、小さな巨人と言われます）主人も近頃やっと自分を見詰め直しているようです。この問題は一昨年でしたか、団地の方々の苦情問題（犬を飼う為には、お互い譲り合いの精神を）の時にも出ましたけど、そんなに切羽詰まっていませんでした。これから先、独立した息子にも頼られず、もう答えは出ています。主人といつも「戸畑（北九州）へ帰ろう」と私達は二年後（私達の計画）の与えられる地に心を躍らせています。

『見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。』　（マタイ二八・二〇）

わかれのあいさつ

伊規須　太郎

◆うちの近所は「猫地帯」でした。「でした」と言うのは、今月からそうでなくなったからです。

以前から、猫はよく見掛けておりましたが、「どこにもいることだから」と、それほど気にしませんでした。顔を覚えたり、どこの猫だろうと考えたこともありませんでした。猫のほうも知らん顔でした。彼らは人間の気持ちをよく感じとっていて、一応は警戒しながらも、無関心を装っているようでした。

◆それが二、三年前から急に数が増えたように思いました。気をつけて見ると、どうも南東側の隣家Nさん宅の猫らしいと分かりました。今考えると、その頃、子供が沢山生まれたのでしょう。裏どうしは近いのですが、（表の）玄関が別の道路に面しているので、ほとんどお付き合いはありませんでした。

昨年でしたか、「ぶどうの木（二十号）」に「小鳥を食べられた話」を投稿しましたが、あの頃から猫たちと顔見知りになり、お互いに話が分かるようになりました。

◆あるとき、二階の窓から見渡すと、あちこちに五匹の猫が見えます。「少なくとも五匹はいる！」と驚きましたが、どうもそれだけではなそさうです。ある日、「猫を取りにきました」と言う女の子に聞いて見ると、「いま十一匹います」と言いました。

◆各戸の境界はブロックべいですから、猫たちにとっては格好の通路で、入れ代わり立ち代わり行ったり戻ったりしますし、うちの物干し場に飛びおりては、箱の上に寝たり、バケツの水を飲んだり、時には植木鉢をひっくり返したり、なかなか賑やかでした。彼らはそれまでずっと放し飼いにされており、彼らの地図には、私の家が「陣地」の一つとして登録されていることは確かでした。

◆最近になってまた数匹の子猫が増えましたから、恐らく二十匹くらいにはなっているでしょう。それだけいますから、どれかがいつも遊びに来ていますが、またいつの間にか帰って行きます。

そうしているうちに、そのうちの一匹と親しくなりました。女の子に聞くと、名前はジャービスというそうです。年のころは三歳くらいで、男性と思います。それからは、名前を呼ぶことにしました。

J「おはようございます（ニャー）」

私「おはよう、ジャービス君。ごはんはすんだかい」
J「はい。おじさんのうちの中を見せてもらえませんか。僕たちは、新しいところを探検したいんですよ」
私「いたずらしなければ、入れてやるよ」
大体が温和な猫ですから、あるとき扉を少しあけてやると
J「ワッ、うれしい」
と音も無く、ひとっ飛びに、飛び込んできました。好奇心一杯で、あちらこちらかぎ回ったり、見てまわったり、その間には、私と家内に一生懸命に挨拶をします。家内のそばに行って尻尾を振り、体をこすり付けますが、その態度がいかにもお義理で、おかしくてたまりません。
◆少しずつ行動範囲が広がり、二階に上がって、教材室の高い棚に上がったり下りたり、本の隙間に潜りこんで、「ここは落ち着くなあ」という顔をしたりしていました。特に喜んだのは、絨毯で爪とぎをする時です。家では叱られていたらしく、私の顔色をうかがいながら、おそるおそるカリカリとやります。黙っていると、「これが最高！」とウットリしています。猫には表情が無いと言いますが、私は彼の気持ちがよく分かりました。その後も頻繁に遊びに来て、朝から夕方までグッスリ眠り続ける事もありました。
◆あるとき、彼らにとって大事件が起こりました。うちから見て北東側のT家の奥さんは、猫ぎらいで、いたずらをされたり、糞をされたりする事がたまらなかったと見え、あるとき誰かが駐車場に排泄した事でとうとう爆発し、N家にきつく苦情を言い、「即刻、どこかに捨ててきてほしい」と迫ったそうです。N夫人が涙ながらに、「殺せと言われたようなものです。どうしたらいいでしょうか」と私に訴えます。
聖書にペットの飼い方は書いてありませんが、
①もう放し飼いは難しいので、この際、室内飼いにするか、運動場を作ってよそに出さないほうがよいでしょう。
②急に閉じこめるとノイローゼになるので、一旦狭い籠などに入れて二〜三日を過ごさせ、そのあと運動場に放すとよいそうです…と勧めました。これはある本に書いてあったことです。
◆間もなく、N家では住宅の改造が始まりました。最大のねらいは、裏庭を全部囲って猫の運動場にする事でした。T夫人には、「改造が終るまで待ってほしい」とお願いして工事を急いだそうで、間もなく十数坪の運動場が出来ました。全体は透明の塩化ビニールの波板で覆われ、周囲は緑色のスポーツネットで囲われ、屋内と運動場の間は自由に出入りできる通路が設けられています。それまでその庭にあった物干し場は、運動場の中になった訳です。その中には改築工事の残材や、古い棚や箱

などが乱雑に置かれており、猫たちにとって変化に富んだ遊び場ができました。

◆工事が進むあいだ猫たちは最後の自由を楽しんでいました。工事が終り、いよいよ閉じ込められる時が近付いたようですが、いつからそうなるのか私たちは知りませんでした。

八月二十八日、日曜日の午後でした。何とも言えない異様な物音がしました。私たちはハッとして、顔を見合わせました。「猫が浴室に入ってる！」と直感しました。時々窓から入る事があるからです。しかし、中を見ても誰もいません。今度は誰かが勝手口に激しく体当たりしているようです。そのうちに取っ手を回すガチャガチャという音がします。ドアを開けて見ると、ジャービスが見上げて「入れて！」と言っています。半びらきのドアに手を掛けて、グイッと引っ張る力はずいぶん強いものでした。今までこんなに激しく要求した事はありません。そのとき私の心にひらめくものがありました。

私「ジャービス！、君は何か悪い事を考えているんじゃないのか？…君がN家を脱走して、（私の家で）飼ってくれと言っても、そんな事は出来ないよ。ほかの連中がみんな網の中にいるのに、君一人が外側をうろついたらどうなる？」

J「グニュニュ、ムニャムニャニャ…（なんと言っているか分からない）」

私はキツーイ顔をしてドアを閉めました。彼は再びやって来ませんでした。翌日は月曜日でした。（猫たちの）朝食の時間が過ぎても、誰一人出て来ないので、運動場が閉めきられた事を知りました。そっと中を覗いて見ると、ジャービスがゆったりとした顔をして梁の上に乗っていました。それを見たとき、私は「悪い事をしたな」と思いました。彼は、すべてを知っていたのです。自分たちがT夫人から嫌われている事も、明日から閉じ込められる事もちゃんと知っていて、最後の日に、私の所に別れに来たのでした。それは脱走ではありませんでした。あの「グニュグニュ、ムニャムニャ」は、私の誤解を解こうとして一生懸命に説明していたのでしょう。

◆こうして私は猫語を学びました。彼は相当に複雑な感情を持ち、事態を正確に理解し、自分の将来を予測して、いろいろ考え比べた上で、「閉じ込められても、やっぱりこの家で生きて行こう」と考えたのでしょう。

猫にさえこれほどの知恵を与えられた神様は、私たち人間を遥かに勝ったものとして造られました。猫が人間と交流できるとすれば、私達は神様と交わる事が出来ます。全神経を集中して、み旨をうかがいたいし、また私たちの思いを精一杯訴えたいと思いました。おわり。

（一九九四・九・二五記）

救われた者の幸い

高木　ツルヱ

神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

（ローマ八・二八）

長い間、榎本先生ご夫妻を始め皆様方に祈っていただきました主人が、神様の深い摂理のもとに、平成七年二月五日天に召されて早や一か月になろうとしています。

一日の旅路を終えて、神様の前に一人静まっていますと、次々とあふるる主の恵みの一つ一つが頭をよぎってきます。あの時あの事も、その時には分からなかったけれど、すべてを益となして下さっていたのだと感謝でいっぱいです。

人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、
人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。

（詩篇八・四）

と、ありますように、神様をほめたたえずにはおれません。

二回目の永田病院入院

昨年二月一二日、悪性リンパ腫から、肺炎を併発し、永田病院へ再度入院することになりました。院長先生のご好意で、一回目と同じ個室を与えられ、早速いろいろな検査をしていただいた結果、一回目入院時よりかなり厳しい状況にあることが分かりました。

病状は一進一退で、息苦しく酸素吸入と点滴の毎日でした。食欲もなくなり、二月一六日からは二四時間の点滴が必要となりました。私にできることは、ただ神様に信頼してひたすら祈るほか道のないことをこの時しみじみ悟りました。

神様のあわれみと祈りに答えられ、二月二〇日頃より病状も少し落ち付いて、二月二四日午前三時に七六回目の抗がん剤の点滴をしました。体力が弱っていたので副作用も激しく、吐き気と嘔吐に苦しみましたが、御真実なる主がとどいて下さって、午後には治まり楽になったと感謝しておりました。

発病以来六年余、主人もみ国に迎えていただく日の近い事をご聖霊に示されたようでした。

二月二四日午後五時頃、榎本先生ご夫妻と、和義先生ご夫妻が、思い掛けずご一緒にお見舞に来て下さいました。神様を讃美しお祈りをしていただき、聖言によって魂が整えられたと主人は大変喜びました。

主人は、これまでの先生方による終生忘れられないご愛とお導きに深い感謝の念で心からの握手でお別れをいたしました。

お帰りの折に「教会員の皆様にも、これまでの長い間のお交わりとお祈りいただいたことに、ひとことお別れのお礼を申し上げたいので、報告の折によろしくお願いします」と、榎本先生にお願いをしました。

病院の方では、「今は一番大事な時だから、どなたの面会も遠慮してもらいたい」と言われていたのですが、本人のたっての願いで仕方なく許可していただきました。

礼拝で、榎本先生より、主人の病状と先の伝言を皆さんにお伝え下さって、それからの数日間は、たくさんの方が代わる代わるお見舞いに来て下さいました。そのお一人お一人にこれまでのお礼とお別れを申し上げて、ほんとに幸いな時を与えられ感謝でございました。

この時を機に主人の体調も一時的に強められて、岩隈さんの届けて下さった説教テープに耳をかたむけては、尽きることのない主のあわれみに魂は満たされ、讃美をして過ごす日々を与えられました。

うるわしい天の国、約束の都には、
いのちの川豊かに、人々をうるおす
その御国目指しつつハレルヤと声をあげ
導きを主にゆだね、日々歩むうれしさ
再臨のその日には主と共に天に行き
勝利の白い衣、身につけて主をほめ
ハレルヤと讃美するすばらしいその時を
待ち望み日々歩む、希望に満たされて

これは、ある姉妹から贈られたテープの讃美歌ですが、主人とよく讃美したことを忘れることができません。

黙示録二一章を繰り返し読んでは、救われた者の帰るべき天のみ国を待ち望み、永遠の生涯を喜び感動しておりました。

五月二一日、私共の思いに勝る主の御愛とあわれみによって、奇跡的にも退院を許されました。このことは、榎本先生を始め皆様の背後のお祈りがあったことを深く感謝しております。

退院後のこと

退院後は暫く家で療養を続け、体力の回復につとめておりましたが、あわれみに富む主は、切なる願いに答えて下さり、礼拝に近づけていただくまでに強められました。

また体調のよい時は、礼拝後の信徒会にも出席できるまでになり、今までの自分に対する主のお取り扱いに感謝のお証しが出来たと大変喜んでいました。

ゆえにあなたがたは、みずからを聖別し、
聖なる者とならなければならない。

わたしはあなたがたの神、主である。

（レビ記二〇・七）

これは、主人が若い頃与えられた生涯をとおしての聖言の一つですが、この聖言によって格別光を与えられ、主に示されては一つ一つのことを悔い改め、十字架の御血を崇めて限りない感謝をささげておりました。

最後の悔い改めは、「家族の病気は自分が全部引き受けるよ」と、軽い気持ちで以前言ったことに対し、「わたしは何と高ぶったごう慢な言葉を口にしたのだろう、主が限りない愛とあわれみをもって支えて下さっているのに、主に対して、まことに申し訳ないことを言った。」と、涙乍ら悔い改めました。

三回目の入院

主人は、平成七年元日の新年礼拝に、願っていたように近づけられ、新しい年のために主に寄り頼むべき聖言をいただきました。

恒例の記念写真撮影が終って、大阪の石丸さん、正岡さんと再会を喜び合った後、帰りの車の中で「今年も聖言によって勝利だね」、と言いました。年末より再び体調のすぐれない日が多くなり、横になってよく休んでいました。そんな日が続き、もしかすると最後の聖会になるかも分からないと悟って、さまざまの思いをこめて私に語りかけたのだと思います。

一月四日より高熱が暫く続き、座薬を使い熱を下げるといった毎日でした。

一月九日、産業医大で診察を受けた結果、リンパ腫の再発と肺炎のおそれもあるからと言うことで、熱を下げる点滴と、抗がん剤の八〇回目の点滴を受けました。

これからは自宅療養は無理で入院が必要との医師の指示があり、急きょ永田病院に三回目の入院となりました。病状からして集中治療室の個室に入れていただき、早速胸部のレントゲン写真を撮って下さったのですが、肺は全体に白くなって症状は相当進んでいるのにも拘らず、それから一週間余りは熱も下がり、食欲もあり、一見快方に向かっているように思われました。主治医の先生のお話しでは、「この状態は、ステロイド系の薬を多く使っているためで、長く使えませんので安心はできませんよ」、と言うことでした。

一月二一日頃より主人の体力も徐々に落ちてゆき、点滴の量もふえ、肩の血管を出す手術をしてそこから絶え間なく点滴がなされました。

あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。

（ヨハネ一四・一）

そんな状態にある時、主がこの聖言をもってやさしく語りかけて下さいました。「主よ、主人が立つも倒れるもあなたのみ手のうちにお委ねいたします、あなたはすべてを益になして下さるおかたです」、と主に信頼するお祈りをささげることが出来て、心は平安が与えられました。

一月二六日、榎本先生ご夫妻、和義先生ご夫妻がご一緒にお見舞いにおいでて下さり、讃美とお祈りをしていただきましたが、主人は、動悸と息切れで、例の大きな声ではお祈りすることができませんでした。

長く居ては疲れるだろうからとの先生方のご配慮から、短い時間でお別れしましたが、その折の先生方からしていただいた握手の手の温もりがいつまでも残っていて嬉しいと、子供のように喜んでいたのが、今も心に残っています。

この頃から、主人は目を閉じている時が多くなり、私が「どうしたの」と聞きますと「神様とイエス様とお話しをしているのだよ」と言いました。それからは目を閉じている時はなるべく話しかけないようにしました。

一月三一日、信徒会を代表して鈴木さんがお見舞いにおいでて下さいました。病状を案じて下さり、僅かな時間でしたが心に残るお祈りをしていただき感謝でした。

鈴木さんが帰られてから主人は「教会の皆さんには、この前、お礼もお別れもすませたので、会わなくても心残りはないよ」と言いました。

点滴ばかりが続き、相当体力も消耗して苦しかったのでしょうが、一言も苦しいと訴えたことはありませんでした。子供が親に信頼しているように、常にイエス様に満腔の信頼を持って苦しさの中にも平安そのものでした。

二月三日頃から、呼吸が苦しくなったので、看護婦さんにお願いして酸素吸入の量を増やしていただきましたが、さほど効果はありませんでした。息苦しい中でも、看護婦さん達からしていただいたどんな小さな事にでも、その都度「ありがとう」と、かすかな声でお礼を言っていました。「お礼は私が代って言うので、あなたは言わないでいいよ」と私が言っても、言葉の出る間は最後まで「ありがとう」と感謝していました。

二月四日、土曜日の午後でしたが、主人が急に「榎本先生にお祈りしていただきたい」と申しますので、それではと電話を掛けようと病室を出ると、何と榎本先生がナースステーションの前に立っておられるではありませんか。私は思わず「アー先生」、と言って絶句しました。神様のなさることはほんとうにその時にかなっていることと、摂理の深さを今更の如くおぼえ感謝しました。

早速、榎本先生を病室にお迎えしました。その日は呼吸が少

しでも楽になるようにと、座薬を入れて下さった直後だったので眠っていました。先生に最後のお祈りをしていただき、隼人さんも来てくれていましたのでともに讃美をしました。「先生、お父さんも口を動かして一緒に讃美していたようです」と隼人さんが嬉しそうに言いました。先生がお帰りになってから間もなく、勤めを終えて娘も来ました。だれの目から見ても主人の状態は重篤だと思われましたので、その夜は三人で交替で看病することにしました。

妹のシヅエさんや三人の孫達にも最後のお別れをさせようと隼人さんは家に帰り、ゆりと二人になりました。ご聖霊に導かれ、讃美歌三二〇番「主よみもとに近づかん、のぼるみちは十字架に」を讃美し、「神様、主人を聖手にお委ねします、どうか魂を受入れて下さい」と祈りました。迎えに行った孫たちも、妹のシヅエさんも揃ったところで、皆んなで主人の愛歌一二一番「馬槽のなかにうぶごえあげ、木工の家にひととなりて」を心をこめて讃美しました。ところが不思議なように主人が目をひらいて、さも嬉しそうに、讃美している一人一人の顔を見回していましたが、すぐに目を閉じ、そして再びひらくことなく、二月五日午前〇時五五分、平安と勝利のうちに永遠のみ国に召していただきました。

信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである。（Ⅰテモテ六・一二）

榎本先生に常に教えられたように、家族の者が主の前に心を一つにし讃美と祈りをもって主人を天に送ることのできたことは、主のあわれみであり限りない幸いだったと思います。

顧みますと、昨年の二回目退院後の七ヶ月余りの日々は、主人にとっては、主のみ前に立たせていただく備えの時であり、私共家族の者には、信仰をととのえられる最良の時だったと感謝を新たにしています。

神よ、われらはあなたに感謝します。
われらは感謝します。
われらはあなたのみ名を呼び、
あなたのくすしきみわざを語ります。
（詩篇七五・一）

これからは、残された私共家族の者が、主人の信仰を受け継いで主を仰ぎ、み旨にかなう歩みをしたいと願っています。どうか皆様の励ましと、お祈りをお願い申し上げます。

長い間、主人のため、また、私共のためにお祈り下さいました榎本先生ご夫妻、主に在る皆様、まことに有難うございました。

平成七年三月

主に全てを捧げし輝ける生涯

綾部時男

「わたしは自分の行程を走り終え、
主イエスから賜わった、神のめぐみの福音を
あかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは
自分にとって、少しも惜しいとは思わない。」
（使徒二〇・二四）

私の叔父・高木敏夫は、大正十二年三月、福岡県筑後平野の牛隈に農家の五男として生れる。兄四人姉二人妹一人の八人姉弟である。まぁ昔の人は百姓をしながらこんなに沢山の子供を産んで育てられたもんだと驚いてしまう。

高木は生まれた時から、丸顔で可愛い顔立ちであった。

私の母は一番上の長女であったので、その子をよく抱いて可愛がっていたと聞いている。田畑一丁余りを持っていた。成長するに従って農業の手助けをしながら学校に通った。貧乏の家庭に生れ、木綿の着物にわらじを履いて通学した。高木は、堅物であったが規則正しく真面目一方で、人ともあまり雑談を交わすこともなく成長して行った。いつも身だしなみは清潔好きの性格で、きれい好きの性格だった。昭和十二年三月、尋常高等小学校を卒業して間もなく、福岡の書店「金文堂」に住み込み店員として奉公するようになった。その時、私に参考書を送ってくれて、勉強の手助けになり嬉しかった。高木からプレゼントされたのはその時が初めであった。一年程でその書店を辞めて商船学校に籍を置き、二年間海軍の軍隊の訓練や教えを学んだ。そして十七年の春、私の父（従兄弟の一つ下）を頼って、二人で八幡に働き口を探しに来た。仕事が見つかるまでにと、父が仕事をしていた日通の仕事の手伝いをさせた。八幡駅に客車便で送られてくる小荷物の配達の仕事である。朝は暗いうちから夜暗くなるまで、汗水流して懸命に働いた。高木はその時二十才になったばかりの働き盛りだった。私の父と母は従兄妹同志の結婚だったので、いわば私は血族結婚によってこの世に生れた者である。高木と私の親父は従兄弟であったせいか、気易くして、よく面倒を見て弟のようにして過ごしていた。駅に着く荷物は日曜でも祭日でも容赦なく送られてくるので、一日も休まず働き続け、体はクタクタになっていた。それでも一生

懸命に働き続けた。私の家に同居していたので妹や弟の面倒をよく見てくれて、菓子や果物等を仕事の帰りに買ってきては分け与えていた。自分は決して無駄使いはせず、酒も煙草も一切口にしなかった。

給料を貰った日には映画を見に行く程度で、当時映画は十銭で、帰りにチャンポン二銭を食べて帰るぐらいで、毎月三十円も、多いときには三十五円もの金を私の母に渡しては田舎の両親（私の祖父祖母）の元に仕送りを欠かさなかった。

兄弟で一番の孝行息子だと祖母がよく話していたのを耳にしたことがある。昭和十八年、兵隊検査を受け見事甲種合格となった。あの小さな体で甲種合格だから不思議でならない。体は小さくても引き締まって、体格が人並以上に肥えていた。それからは毎晩のように、出征して行く時の挨拶の練習を繰り返していた。そして、間もなく、一枚の赤紙によって兵隊に召集された。陸軍二等兵として満州へと任地についた。

海軍の厳しい訓練や教育を受けたことは無に等しかった。もう一人の私の父の弟（高木と従兄弟、一つ年下）は、陸軍の訓練を受けながら、海軍に入隊して戦死した。入れ替わっていたらどうなったか分からない。昭和二十年八月、終戦を迎え、その年の終りに復員してきた。再び父を頼って八幡に来、日通の荷物の配達を続けた。仕事を続けながら、昭和二十一年、その時二十四歳の彼は、八幡製鉄所の試験を受けて見事パスした。第一軌條工場の中で働くようになった。そして黒崎にある製鉄所の寮に移って住み込んだ。彼は人との交わりもなく、寂しい孤独な毎日を過ごした。仕事は過重でくたくたに疲れ、それでも仕事は一日も休まずに勤め、行く所もない彼は、私の家に遊びに来ては、あまり語りもせずに帰って行った。毎日のように出入りしていた。孤独感はつのる一方で、ストレス解消の方法もないままに空しい毎日を送るばかりだった。昭和二十六年の四月、仕事の帰りに一枚のチラシが目についた。それが彼の人生を変える大きな転換となった。「賀川豊彦氏来る」、と書いてあった。夕方になって、早速八幡大谷会館に話を聴きに行った。大勢の人だかりの中で後の席で話を聴いた。何やらキリストの話をしているように感じた。キリスト教など一度も聞いたこともなく、全く縁遠いもので、興味のないものだった。しかし聴いているうちに自分の心の中に響いてくる何かがあった。感動を覚えるものを感じた。寮に帰って床に入ってもなかなか寝つかれなかった。興奮して朝まで眠れなかった。当時、私は枝光という所に住んでいたので、遊びに来た帰りに教会を探していたら、上本町にキリスト教会の看板が目につき、そこの教会にしばらく通った。何も自分に喜びを与えてくれるような平安もない、そう思った彼は、黒崎の寮に帰る電車の中から八幡前田

教会の看板を目にした。そうだ、今度の日曜日にはこの教会に行ってみよう、と思い八幡前田教会の門を叩いた。昭和二十六年五月二十二日の事だった。先生の説教を聴き、賛美歌を唄っているうちに、彼の堅く閉ざされていた魂が次第に溶かされ砕かれ、話しの内容はよく分からなかったが、今までに一度も味わったことのない喜びと感動に包まれ、涙がしたたり落ちていた。それからは日曜礼拝には仕事を休んで代休をとって必ず出席するようになった。

暇さえあれば榎本先生のお宅へ伺って、「先生今日は何かご用はないですか、何でも言い付けてください」と素直に幼な児のような気持ちになって先生の家にお邪魔するようになり、食事をごちそうになったりして家族の一員のようにして頂いた。神の測り知れない愛を感じていた。そして、早天祈祷会、伝道集会、木曜会とすべての集会に励むようになり、自分の全てを主に捧げようと決心した。昭和二十六年十月二十二日に六名の方と洗礼を受けさせて頂き、新しく神の子とされた。その晩は寮に帰って床に入っても嬉しくて嬉しくて涙ばかり出て眠れなかった。一夜明けると、目に映る硝子戸から本棚や畳までが全く新しく見えて、もうたまらなく嬉しく感動を覚えた。なんと素晴らしい神様の恵みなんだろう。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」

（Ⅱコリント五・一七）

このように自分のような者が新しくされた事で喜びと希望に溢れた。そして、大分県玖珠郡の湯布院教会に所属していたクリスチャンの先輩である伊藤つるえさんと昭和二十七年のクリスマス礼拝の後、結婚式を挙げさせて頂いた。それから二人三脚で信仰に励み続け、主の力強いみ手に全てをゆだねて歩み続けた。昭和二十九年三月に娘が誕生した。

素朴で素直な明るい子になるようにと（ゆり）と名付けた。その頃、住居は転々と替わって、山の手の神山町に住みついていた。雨の日も風の日も、一粒種の（ゆり）を背に負いながら各集会に出席して神様一筋に生き続けた。娘の（ゆり）が小学校の一年生の時、私が文房具屋で鉛筆、ノートを買って寄った。丸顔で目がきれいで可愛らしい無邪気ないい子だった。その時会ったのが子供の頃の最後になってしまった。

十九歳になった娘（ゆり）は、京都で仕事をしていた時、一人の男性と知り合い、その男性、西岡隼人氏と結婚に導かれた。折尾のアパートに住むようになり、一人娘を奪われたようで寂しく二人で暮すようになる。そして五十年一月に初孫、五十三年三月に次弟、五十四年九月に一女と、俗に言う一姫二太郎が

与えられて、幸せの家庭の中ですくすくと成長し、家族揃って神のみ前に礼拝を捧げるようになった。

「われ救われん為に何をなすべきか

主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん」

神さまが約束したみことば通りを成してくださった。私は昭和五十年の夏、突発性脱疽という病に罹ってしまった。右足が、徐々に血管が詰まって血が通わなくなり、指先から次第に溶けていく病で、もう我慢ができない程に痛みが走り、足を切断しなければ治る見込みもない時だった。手術をしなければならないので、家族の人に来てもらうようにと言われた。しかし、私はこの世で悪の限りを尽くし、妻子とも十年前に別れて、今では頼る者もない天涯孤独の身だった。仕方なしに、叔父（高木）が教会に行っている事を知っていたので、来て貰うように教会に連絡をとった。二日後に来てくれ、その時十五年振りの再会で涙を流して喜んでくれた。私が音信なしの行方不明だったので、放浪の末どこかに行き倒れて死んでしまっていたのでは？と心配してくれていたらしい。早速私の頭に手を置いてお祈りをしてくれた。「我はエホバにして汝をいやす者である、汝の病十字架に転移せり」、そのような祈りをしたように憶えているが、少しも有難いと思うどころか、他の患者さんに迷惑だからやめてくれと言ったり、もう少し小さな声でしてくれと小言ばかり言っていた。でも足の痛みはますます悪くなる一方で、毎晩毎晩眠れない夜が続いた。叔父は私の病を治したい一心から、説教テープ、讃美歌のテープを持って来ては聴くように言って帰り、また翌日にも代わりのテープと重たい大きなカセットテープレコーダーなるものを汗を流して運んでくれた。そのテープを私は足の痛みで眠れぬままに聴き続けた。讃美歌の四九三番（罪の渕におちいりて、沈みゆく人々に、たすけ船を漕ぎよせよ雨の日も風の夜も）この歌が流れてくると、涙がとめどもなくしたたり落ちてしまった。痛む足を押さえながら、涙でベットのシーツを濡らしながら聴いているうちに、次第に腐敗していた指先に赤身がさして痛みが徐々になくなってきた。当時、私は教会にまだ行っていなかった。教会は堅苦しいし好きでもなかった。しかし、治りたい一心から一生懸命に「神様どうかこの痛みを少しでも和らげてください。そしたらあなたの言う通りにします」と、その時初めての自前の祈りをした。そして、みことばを味わっているうちにすっかり治って、自分も驚いた。

足首から切断する手術の日も決まっていた。手術もせずに退院したので整形外科の先生方も驚いて、この病院が開業して二十年になるが、脱疽で入院して、どこも切らずに退院したのは初めてだと言っていた。これも叔父高木の中に（生きた神の力が宿って癒しを与えて下さった）と、つくづく感謝しています。

それから高木は、お前は教会に来なかったら駄目だ。徳山にも教会はあるが、八幡の前田教会に来なかったら駄目だと申すもので、私のような悪の中に、どっぷりと浸かった者が教会に行ったら迷惑になるだろうと迷ったが、とうとう説得に負け、今は朝五時半に起きて、六時半の列車に乗り込んで礼拝に励むようになった。寒い時も雨の日もあったけど、主のみ前に歩ませていただける幸が嬉しくて感謝な毎日を送らせて頂けるようになった。よく教会員の方が「遠くから礼拝に来られて大変でしょうね。」と言われるが、「いいえこれが感謝ですよ。あなたも近くから礼拝を守られて感謝ですね」、と申し上げる。そして、何でもかんでも感謝なんですね、神の愛は私たち一人ひとりに等しく注がれているんですもの「人には能わねど神には然らず、それ神は全ての事を成し得るなり」とありますように、人である医者そして薬も何の役にも立たなくなった時にでも、最終的には神が最善をつくして奇跡的とも思えるような癒しを与えて下さるんですね、ほんとうに素晴らしい方、この方を仰ぎ見つつ歩んで行きたいと願って居ります。

また昭和六十年に胃癌で徳山の総合病院に入院して、胃を三分の二切除した時にも、叔父は八幡から新幹線でかけつけ、私の為に懸命に寝ずの看病に当たり、医者からも見放され、もう駄目だと言われた時も、ただ神を信じ懸命に祈りに祈って祈り抜いて、四ヶ月の入院の後健康が与えられたのです。

現在も元気に過ごさせて頂いています。そこで私が忘れてならない事は、主のみ旨は何であったのか、もっともっと奥の方に神の深い思いが隠されていたのではないか?

そのことをいつも教えられるんです。自分の事、家庭の事、子供の事、そして身内の者のいたましい現状の中に遭ったときに、癒しが与えられた後は感謝が薄れてしまっているのではないか、主の心と思いはどこにあるのか、そのことをもっと考えて見なければならないと思ったのです。

どんな場面に直面しても、「いっさいの思い煩いを神に委ねなさい。」と言われ、そして「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と私の心を問い、探り出して居られる主に、「はい分かりました。これからそうします」と、心の中で思っているが、人の心ではできない。だから頭で分かっただけでなく、いつも主に心を向けていなさいと言われているんです。あなたにはできないから、いつもわたしの前に出て礼拝や集会に出て、みことばを受け入れて完全な歩きをしなさいよ、と。「我限りなき愛をもって汝を愛せり故に我たへず汝を恵むなり」と、やけるようなお気持ちで語りかけて下さる主に、命を預けて信頼して歩ませて頂く以外に生きる道はないのですね。

叔父高木も、今まで転々とした借家住まいやアパート暮らしをしていたが、昭和六十二年に新しい住居が与えられ、折尾のアパートに住んでいた子供や孫たちとも一緒に住めるようになり、家族七人が共に過ごすことができるようになった。

主が建ててくださったすばらしいマイホーム、明るい太陽の光を受けながら、庭の樹々の間からは小鳥のさえずる声を耳にしながら静かに主を仰ぎ見るときに、何ともすがすがしい思いに浸ることができ感謝が溢れるばかりである。

榎本先生が福岡大濠公園教会に御用にお出での時には、野村先生、伊規須先生と高木が交互に前田教会で証のご用をさせていただいたりして、高木の証しを聴いていると、あの無口な寂しがり屋で人の前で話すこともできなかった無学な者を、神さまはこんなに素晴らしい器となして下さったことが、もうたまらなく嬉しくて嬉しくて涙がボロボロと落ちてきて仕方がなかった。そして各家庭集会には必ず出て信徒の交わりを益々深めて、皆さんからも親しまれるようになり、信者の方から電話が掛かってきたりすると、よき相談相手となったり、いつも電話口でお祈りをしていた。

また、何組かを結婚に導き、教会での結婚式の仲人役もさせて頂いたりして、今でもその方々が揃って礼拝に出られている姿をみかけては、叔父の事を思い出して涙ぐんでいる毎日です。

そして都城に住んで居られた当時の丸山さんのお宅での集会には、前の晩の夜行列車に乗り、集会に出て神の言葉を語り、深い祈りと賛美を捧げて、又その日の夜行列車で帰る、その繰り返しを続けていたようでした。年を老いてからは行かなくなってしまった。平成三年頃から極度に体力が衰え始め、産業医大病院に入退院を繰り返すようになった。

本人の精神力と愛する兄弟姉妹の心からの篤いお祈りで、その都度癒しが与えられていた。平成四年頃までは、病院でベットに起き上がれる状態であった。私が説教のテープ等を持って行くと喜んでくれて、起き上がっては私の為に熱心な祈りをしてくれ、七階の病室からわざわざ下の玄関先まで寒い中をマスクをして見送ってくれて、私が見舞いに来てくれたことを嬉しそうに笑顔でいつまでも見送ってくれて、その時の笑顔が最後になってしまった。神の奇跡的な癒しが幾度となく与えられ、少しでも気分が快くなれば礼拝を守っていた。平成五年一月、折尾の永田病院に入院してからは、酸素吸入し、細くなった身体に点滴を受けながらベッドの上に横たわり苦しそうな状態が続いていた。もう駄目だと自分で悟ったのか、皆さんに別れの挨拶がしたいと榎本先生から言われ、信徒の方が何人か伺ったそうで、そこで叔父は皆さんの前で前田教会そして愛する兄弟姉妹の皆さんに心からなる祈りを大きな声で感謝したそうであ

る。最後の最後まで祈り続けた生涯。「死に至るまで忠実であれ」とあるように信仰に生涯をかけた人生だったと思います。

もう駄目だと思っていたが、又癒され身体が回復してくると、弱った足を杖を頼りに、ヨチヨチ歩きで礼拝の前に姿を見せては大きな声で真剣な祈りを捧げていた。そして今年の新年聖会二日目に聞いた祈りが最後になってしまった。

もう聞くこともできない、最後の生涯、輝ける生涯を全うできたと、つくづく感動して居ります。天に宝を積ませて頂けたのではないかと思っています。

今では、苦しみ痛みさえことごとく拭い取って下さった主イエスのみ元で安息が与えられ静かに過ごしている事と思います。二月五日早朝、七十二才の生涯と四十五年の信仰を立派に戦い抜いて、天に錦を飾って凱旋することができ、本人も喜んでいることだと思います。人は泣きながら生まれてきて、泣きながら死んで行くと申しますが、高木は喜び勇んで旅立つ事ができました。これまで永い間、皆様とのご交誼と心からなる温かい御祈祷を賜りました事を心から篤く感謝申し上げます。

ハレルヤ　アーメン

我が思い出（四）中国（旧満州）編

鈴木一幹

当時、私の所属した満州第二一二部隊（野砲第二十四連隊）での日課は、夏期と冬期では差があるが、十月では朝六時起床（夏期は五時）、六時半点呼（人員点検）、引続き馬舎行「水飼・飼付＝馬に水を飲ませ、餌を与える。」、七時三十分朝食、八時から十二時まで午前の訓練、その間十時頃十分間の休憩が一回あるのみ、十二時に昼食休憩、十三時から十七時まで午後の訓練、午前中と同じく十五時頃十分間の休憩が一回、十七時から再び馬舎行（水飼・飼付）、十八時夕食、夕食後は二十一時の消灯までは内務班教育および自由時間となっていた。二十一時は消灯ラッパを合図に常夜灯以外は総て消灯され、就寝することになる。従って衣類の修理や縫物あるいは手紙を書きまた読書をする者は、下士官室の隣りの予備室を利用できることになっており、この部屋だけは一晩中電灯がついていた。勿論ペチカもたかれ、室内は暖かくなっていた。以上の時間割で毎日が繰り返されたが、初年兵には到底消灯前には自分の時間は得られるよしもなかった。

一、向うをむけ

起床ラッパで飛び起き、服装を整え、枕・敷布・毛布・包布等をたたみ、寝台の奥に重ね、次は古兵殿の寝台に行き、同じく毛布等すべてをたたみ、すばやく整頓し、六時三十分の点呼に間に合うよう、洗面をし、厠も済ませねばならない。当四班の古兵殿は約六十名、初年兵十二名で、初年兵一人当り五人の古兵殿の世話（寝台整理等）をする必要があるわけで、さらに古兵殿の中には、「おれのフンドシを洗っとけ」、「下着を頼んだぞ」等と、たくさんの洗濯物まで引受けさせられ、これ等の整理に追われ、点呼前に便所に行けば洗面ができず、洗面に行けば便所行の時間が無くなる。モタモタした者は両方できずに、やっと点呼に間に合う始末である。

以前から朝形であった私は、洗面より先に急いで便所に行ったが、士官・下士官用を除き兵用の便所は十か所で、その各扉の前には既にそれぞれ数人づつの兵達が並んでいた。

待つこと久しくしてやっと中に入って驚いた。入口の扉はあったが中の間仕切が無い。無いと言うより、有った間仕切を最近のこぎりで切り取った様子である。とり急ぎズボンを下げてしゃがみ込み、ひょいと顔を上げると、なんと前にいかめしい髭づらがこちらをにらみつけているではないか。衿章は三つ星の上等兵殿でした。「おい、貴様は向うをむけ。」とどなられ、「はあっ!!」と私は立ち上り、やっと後向きになりしゃがんだとたん、今度は二つ星の一等兵殿がこちらをにらみつけていました。そして今度は「貴様は下を向いとけ」とどなられました。さすがの私も、出かけたものが引込んでしまい、便所をするどころではありません。顔面ひや汗をかき、そのうち外から扉をたたかれ「おいまだか」とどなられ、ついに命からがらあきらめて外に出ました。

それにしてもどうして間仕切りをはずしてあるのか不審に思いました。またこのとき自分の朝形を夜形に変えなくてはと思い、消灯後であれば朝のようなことはないだろうと思った。

朝食後に、こっそり陣内上等兵殿に便所の間仕切について尋ねると、小声で「それはな、昨年入隊した初年兵が、毎日の訓練に耐えかねて便所で首吊り自殺しよったからじゃ。それで間仕切を取り除き、どこからでも一目で見えるようにしたのや。お陰でみんな迷惑しとるのや。また夜間に逃亡したやつもいたが、朝点呼で大さわぎ

になり、皆で手分けして探したところ、雪の中に倒れ、凍死しとった。けっして死ぬ等つまらぬこと考えるなよ。」との話しであった。それは内務班における初年兵教育という美名のもとで行われる毎日の古兵からの陰湿な制裁に耐えかね、逃亡したは死を選んだのだろう。これからの毎日、どんな制裁を受けるのだろうか、どのようにしてこれに耐えろと言うのか、非常に不気味な予感を感じた。

二、五臓六腑の苦しみ

今朝は気温も零下五度とのことで、いよいよ本格的な冬の到来である。朝食頃から外は吹雪となり、窓ガラスの枠には雪が付着してきた。ペチカが赤く燃え、室内は二十度以上の暖かさである。第四班の初年兵十二名が集められ、佐藤班長殿より、それぞれに担当兵科の発表があった。

先づ砲手班に、私と戦友の川上君（長崎の三菱造船勤務）それに山崎君（小学校教員）、野中君（前原町のお寺の住職）の四名、次の御車班（馬を扱う）に緒方君、八木君等四名、通信班に三名、観測班に一名が割当てられた。

教育担当の班長（下士官で伍長）の紹介があった。これからの訓練は各兵科の班毎に行われるとのことであった。

我等砲手班の教育担当は、たまたま私の班の佐藤班長殿が兼ねていました。勿論第四中隊の初年兵五十名は、それぞれ砲手班二十名、御車班十六名、通信班八名、観測班六名に分けられていた。

初年兵中、幹部候補生有資格者は八名で、全員が砲手班に編成されていた。我が四班では川上君と山崎君と私の三名でした。午前中は各兵科班毎に、その班長殿から説明があり、午後からは吹雪もおさまり、初年兵全員に初めての乗馬訓練が行われた。第四中隊付の大神少尉殿の引率で馬舎に行き、ここで御車班の荻原班長および教育担当の上等兵五名の紹介があり、各自の自分の担当馬を一頭づつ馬場に引き出した。大神少尉殿より次のとおり説明があった。先づ馬の骨格構造、一番大切な馬蹄（足の爪の裏側に打ち付けてある蹄鉄。冬は鉄さいというスパイクのように釘の付いた馬蹄がはめられ、雪や氷上でも滑らぬようにしてある。）について。馬の性質、馬の病気、鞍引具等の説明があり、馬の口にとり付け、手綱を取りつけている「タイロク」（馬の口に入れ舌を挟む金具）の噛ませ方、手綱の持ち方等手本を示し、各自にやらせた。

いよいよ各自の持ち馬に乗馬することになった。

十頭づつの五班に分れ、先づ上等兵殿が乗って見せた。

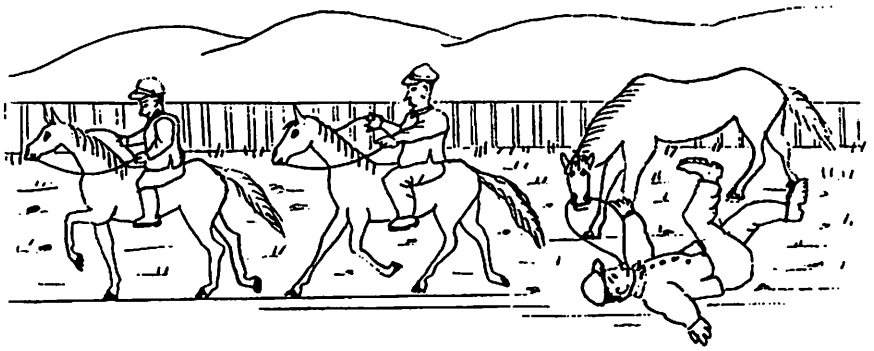
乗鞍は付けていない、いわゆる裸馬であるから、先づ左手で馬の「たてがみ」を二重に手に巻き付け首にしがみ付くように

一気に飛び乗った。じつに見事な乗り方に、さすがは古兵だなと感心した。初年兵は前列の者より乗りはじめた。

しかし、誰も要領が悪く、どうしても一人では乗れず、古兵殿が手伝って尻を下から持ち上げてやっと乗っていた。

私もとうとう押し上げてもらった。

満州の軍馬は内地の馬より一回り大きいように思え、冬のためか毛も深く、よく太っていた。馬の背丈は我々の頭の高さより少し高い位であった。私の身長は百六十五糎で同じ初年兵中では低い方で、しかも親譲りの短足であるので、あぶみの付いた乗鞍であればと思い、また防寒被服で着ぶくれたいでたちでは到底飛び乗れるものではないと思った。馬の背にやっとまたがると、以外に高く感じたのには驚いた。屋根に登ったようだ。足を締めろといわれていたが、



馬の腹が余りにも太く、足が短いためか、力を入れても全く効果はなかった。

馬場を一列に並んで進んだが、馬の振動が尻に伝わり、朝便をしていないため腹が張り、ガスが上に行ったり下ったり五臓六腑をかけめぐり、唇を噛んで我慢して進んでいたが、先頭馬の上等兵殿の「早足進め」の号令で馬が一せいに早足となり、しかも馬場の曲り角にきて馬が急に方向を変えたため、不覚にも横に落馬し、その瞬間ドスンと言う音と共に腹に貯っていたガスが一気に噴き出しました。馬は立ち止まって後ろを振り返り、落ちた自分を、あざ笑うようにじっと見ていた。

三、幹部候補生受験辞退意思表示

夕食が終りほっとする間もなく、いつものとおり、班内の初年兵に対し、古兵殿の説教が始まった。今日は御車班の古兵殿二人から、乗馬訓練について厳重な注意が始まった。「乗馬中は足を内側にしぼって乗れと言っておいたが、皆言うことを守らなかったから落馬者が続出した。これは気合が入っとらんからだ。今後は絶対落ちないように今から貴様達に気合を入れてやる。覚悟をしろ。」とここまで聞いた時、「鈴木二等兵はおるか」と廊下から入って来た中村兵長殿の声。「はい、ここにおります」と答えると、「佐藤班長殿がお呼びだ、すぐに班長室

に行け。」とうながされた。これからみんなと一緒に古兵殿からの制裁を受けるのに、と行きあぐねていると、兵長殿が「早く行け。」と言われたので、「行ってきます」と特に大声で叫んで走って班長室に行きました。

小々狭い部屋ではあるが、長机と椅子が四脚、班長使用の文机と椅子、それに壁側に寝台が置かれ、毛布等の寝具が正しく整頓されていました。「鈴木二等兵参りました」と言うと、「おお来たか、その椅子にすわれや」といわれ遠慮なく腰掛けました。「貴様は行橋出身やな、それに一人息子やな」と言いながら、名簿を見ていました。それから話しを続け、「おれはなあ、宇佐出身や。わしの班には日豊線の者は貴様とおれ二人だけだ。中隊でも他にはおらんようじゃ。行橋には入隊前には良く行ったものだ。姉が新田原のカトリック修道院に勤務しとるので、ちょくちょく逢いに行ったもんや」と言われた。私は「班長殿はキリスト教でありますか。」と質問すると、「ああそうや、カトリック教徒や。両親や姉は実に熱心な信者だが、おれは子供の頃から腕白で、洗礼は受けたが遊ぶことがいそがしく、なまくさやったなあ。ところで、貴様は名簿によると幹部候補生の有資格者だな。受験に備えてしっかり勉強しなさい。この部屋の隣の部屋が予備室になっており、夜間電灯がついているので、そこでしなさい。」と言われた。

そこで私は意を決し、前から思っていたことを次のとおり話しました。「お言葉は有難く感謝しますが、私は中学時代陸士を受験し、一度は合格しましたが、身体検査の目の精密検査で視力が足らず不合格になりました。以来軍人には不向だと信じ、受験は考えておりませんのでどうかよろしくお願いします。」と申し上げました。すると班長殿は「そうか、残念だが貴様がそう言う意思ならわしは了解するが、中隊長殿はどう言われるかなあ。まあ時間も充分あるから良く考えて置け。これから何でも相談に乗るから遠慮せずに何でも言え、よいなあ。」「はい、ありがとうございます。ところで一つお願いですが。」

「おお、なんでも言え」と班長殿が答えられた時、ドアがノックされ「お茶を持って参りました」の声がした。「ご苦労、入れ」で入って来たのは当番兵の古賀一等兵殿（後で佐賀市内で漬物屋をやっているとわかる）で、お盆にお茶二人分と大福餅の入った紙袋を乗せ、目の高さに持ち一礼して机の上に置きました。班長殿は「ご苦労、貴様よかったら餅を一個持って行け。」「有難うございます。では一個いただき帰ります」と言って出て行きました。

「おい、ここで食え。もらったものだが、今頃は内地ではなかなか食えんぞ」

「班長殿お願いですが、自分は今朝から厠に行くまがなく困っ

ていますので、これをいただく前に今から一寸行って来て良くありますか」

「ああそうか、朝は時間が無いだろうなあ。貴様は今夜から夜便形に変えたらよかろう。今から行って来い。すませたら、またここに来て餅を食え。中村兵長には申し付けてあるので心配するな。」と言われ、地獄に仏とはこのことかと思った。

餅をいただき班長殿と行橋のこと、班長殿の郷里のことなどに花が咲き、内務班室に帰ったのは消灯後半時過ぎてからでした。既に皆は眠っていた。翌朝戦友の川上君から昨夜の話しを聞いた。

初年兵全員制裁として床に腕立臥をさせられ十分位頑張ったが、その内、腹が床につくと木銃の台尻で尻を叩かれたとのことであった。

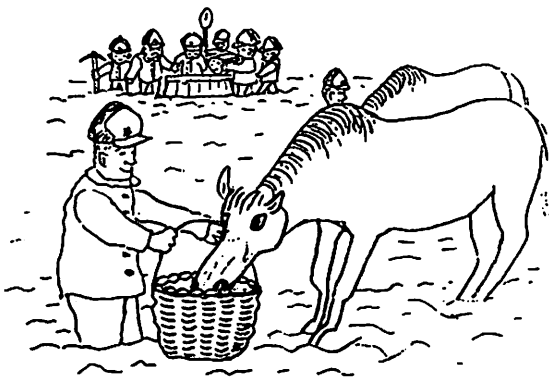
四、笊で水を汲む

今朝は営庭のポールに赤の三角旗が一本昇っている。マイナス十度代である。防寒帽の垂を下してかぶり、防寒服、外套、防寒靴、防寒手袋等を着用し、活動的でない格好で屋外に出た。外は雪が十糎位積んでいる。石段も道路も境が良くわからぬまま、馴れた古兵殿に従って歩いた。外気が零下十度のためか、はく息まで白く、顔が突っ張った感じがした。

馬舎作業を終え、朝食を済ますと、直ちに訓練に入った。

今日の訓練は、初めて馬を引いて営外に出ての雪中行軍である。四中隊の初年兵五十人、石井見習士官殿の引率で馬舎に向った。御車班の上等兵より馬舎横の倉庫に誘導され、「前に用意してある台車に倉庫の中にある柳笊を積み込め」と命ぜられ、台車に約五十個位積み込んだ。この柳笊にはそれぞれ紐が付いているが、いったいこれを何に使うのだろうかと、皆が訝った。皆が口々に「何に使うのだろうかなあ」と言っていると、古兵殿が「うるさい、その内にわかる。命令通り早くやれ」と言うのみであった。一人一頭づつ馬を引き、台車は古兵殿が馬に引かせた。古兵達は乗鞍の付いた馬に乗馬し、我々は馬を挽いて歩いて行った。

馬はスパイクのような「鉄さい」を履いているので滑らずに進むが、我々の防寒靴では凍った道はすべって歩きにくく、馬の速さに付いて行くのは大変だった。それでも約三時間位行った処で、小休止となった。見習士官殿が「小休止は貴様等を休ま



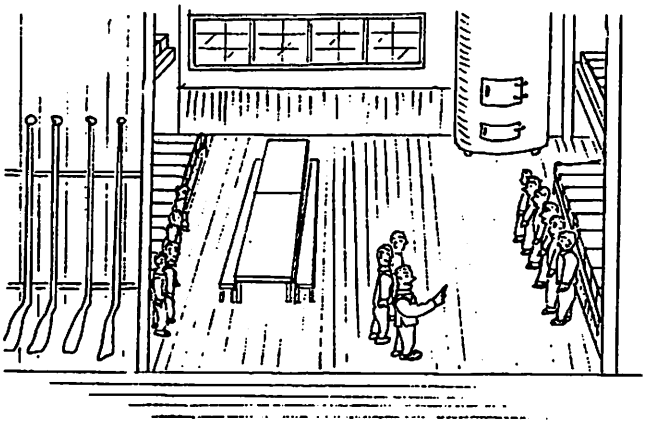
せるのではない。天皇陛下からお預かりしている大切な武器である馬を休ませるのである。従って貴様達は古兵の命に従ってそれぞれ馬に水を与え、それが終わった者は馬の足をさすれ」と命じました。次に古兵殿が「台車に積んである柳笊を各自一個づつ持ってこっちに集れ」と命じ、一同は近くの土の盛り上った所の井戸の周囲に集りました。

井戸の縁には雪が積もり、深さ約四米の水面は白く凍っていました。ロープを伝って古兵殿二人が中に入り、他の古兵殿がツルハシとスコップを上から下しました。一人が中央部を丸く割り、一人はスコップで割れた氷を側に寄せ、直径一・五米の丸形の穴が出来、水が見えました。氷の厚さは五糎位だったと思われます。古兵殿が初年兵に、「順番に柳笊を中に下げろ」と命じ、その都度笊を水につけ、上に上げさせました。

すると十秒もたたぬ内に笊の周りは氷が張り付きバケツに化けたわけです。これぞ厳寒地における人間の知恵だなあと一同感たんの声を発しました。早速水を汲み、各自持馬に飲ませました。この間十分で、早く飲ませ終えた者は「藁束こう」で馬の足をさすりました。我々は休む暇もなく、足を引ずり、滑っては歩き、ころんでは起き、雪道を必死に歩き、沸爺溝（ブッヤツコウ）の村落に到着しました。この間の距離は約二十粁でした。やっと昼食をすませ、また来た道を引返し、午後の小休止にも十分で午前中と同じく水飼を行い夕方帰隊しました。

五、神のみぞ知る我が命

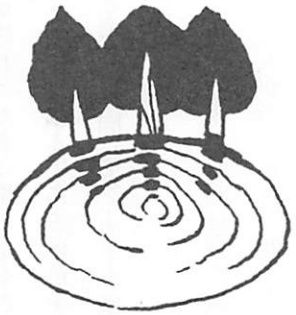
今日は朝から一日中営外での訓練であったので、昼休み予定していた洗濯を夕食後行った。御車班の古兵殿がほとんど馬舎に行っていて班にはまだ帰っていないので、夕食後毎日行われる説教がまだ行われないからだ。洗濯物を干し、一息入れていると、馬舎から古兵殿が帰ってきました。その内の二、三人の上等兵殿は、どこで飲んだか酒くさく、顔も赤くなっていて、その内の一人、金子上等兵殿が「おい初年兵、今から貴様達の所持品検査をするので、衣類以外の物は残らず寝台の上に並べろ」と命じました。他の古兵達も数人「おおやるか」、とこれに同調するように金子上等兵殿のそばに寄り添った。



夕方から降り出した小雪は一向に止む様子もなく、窓越しに吹雪がますますひどくなっているのが見える。室内ではペチカが真赤に燃え、寒暖計は二十四度を示し可なり暖かだ。外はおそらく零下十度は過ぎているだろう。

各自は寝台の奥の整理棚より所持品を出し、寝台の上に並べ始めた。私も全部出し、軍人勅諭・戦陣訓・洗面具・薬類・五円入りの財布・千人針・ナタ豆の入った腹巻（母の手作り）・入隊前に家族で写った写真・最後に聖書と讃美歌を並べた。検査は廊下側に位置する野中君（前原町のお寺の住職）から始まった。

（以下次号）



主の御計画

～住について想う～

野村　美恵子

主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。

（エレミヤ二九・一一）

救にあずかって四十五年、私が勤めを辞めてもう十年、マラソンランナーが駆けぬけて行くような早い年月、世の中も、考えられないような出来事が次々と起こっては去って行きます。そんな事を考えながら主が私の上に与えて下さった御計画、それは何とすばらしい事だったでしょうか。今心熱くして想い、感謝にあふれます。この度は主が備えて下さった私達の住いを通し、主の恵深きを味わい知らせて頂き、その方面から今一度恵みを数えつつ救いの原点を見つめさせて頂いております。

昭和二十五年、この頃は住宅事情は最悪の状態が続いている頃でしたので、住いを見つけるのは大変でした。とりあえず、私の母や妹達の居る戸畑の家に主人は同居してくれたのです。当然狭くて不自由な生活でしたが、皆で肩をよせあって暮らし

た頃も今懐かしく思い出します。やがて妹達は独立して出ましたが、母だけは最後まで私達にゆだねさせて下さったことをほんとに主に感謝致します。北側斜面で日あたりの悪い家は、とても湿気が多くて弱い子供達にとって良い状態ではありませんでしたが、贅沢言える時代ではありませんでした。それでも幼い子供達の成長は、親にとって喜びであり力を与えてくれました。特に乳のみ子がお乳を飲みながら目を見合せてにこっと笑う時、たまらなくかわいく、楽しく少々の疲れも、苦しみも忘れ去ってしまいます。まず子育てを託して下さった主がくださる喜びであり、賜物であったと、今しみじみ思います。主人が子供を連れて日曜学校に行きます。私は後から赤ん坊を負ぶって電車で行きますが、時には終りの讃美歌が聞えたりしてガッカリ。このまま引きかえそうかと思った事もありました。でも勇気を出して会堂に上りますと先生は頌栄に間に合ったから！と励まして下さいました。何とか遅れてはいけないと願いながらどうにもできない私の力なさを恥ずかしく思っていましたけれど、この事に対し主人から責められる事は一度もなかった事を考える時、今自分自身を反省致します。

こんな私達に、ある時大野のおじいちゃんが、子供達の為にと堀炬燵とおふろを作って下さいました。ご自分で材料を集め、心をこめて作って下さった炬燵で食事を頂き、家拝をする場を与えられ、自由の時間にふろに入られる、何と温まりを被った事でしょう。

神様の豊かな恵みと御愛につつまれ、多くの方々のあたたかな励ましに親も子も育てられ、四人の子供達はここからそれぞれの場に巣立って参りました。楽しみあり、涙あり、悩み思いわずらい、家族中のあらゆる想いが一杯つまった丸町の古い家、何と言っても主のいつくしみと、あわれみが切々と溢れる家、それは私達の宝の一杯つまった箱だと思います。

昭和四十二年春、主人が心臓を悪くして倒れ、遂に勤めを辞めさせて頂き、暫く休養してお習字を教える事になりました。昭和五十年、主は私達を二人の生活にもどして下さいました。今、子供達はそれぞれ家庭の最も大変な時期にあると思いますが、時には宝の箱をあけて見ては…と思います。

二人になった私達に主は次の住いを用意して下さいました。この為にお祈りもしていませんのに、ある日、上島兄が突然、「おかあさんのために良い家を見つけた」、と言うのです。そう言われても引越しもめんどうだしと思いながら一応見に行きました。

そこで又驚きました。その家はバス道路から一筋入った狭い道にあり、便利な場所なのにとても静かです。工大の門まで三分、

そんな条件だけでなく、もう忘れている程昔、私は何かでこの道を歩いた時、何となく落ちついた家だな／と見ていた、心のどこかに止っていた家でした。神様は不思議を行って下さいます。早速転居を決め、昭和五十一年、小芝三丁目の住人となりました。広い床の間があり、猫の額程でも表側に植込みと庭がとても気持よく、木もれ日が部屋にさし込む冬、そして何と言っても湿気を感じない住いは心地よい住いであり、主人は大変喜びました。いよいよ恵み主なる主に讃美はつきません。九工大勤務の私は、時間も体も気持ちもどれ程負担が軽くなったでしょうか。その分、集会に行かせて頂くにも、せかせかとあわてなくて済む、ゆとりを感じられます。大きなお恵みです。西鉄電車が廃止になった時、小芝三丁目にバス停ができ、ＪＲ駅も近く、戸畑教会も徒歩で十分、商店街の近い住宅地、主人も六十半ば、まだ元気な頃でしたが、朝な夕なこの静かな家で聖書に親しみ祈りに明け暮れ、御用にあずからせて頂き、尚余りの時間は習字の指導に楽しみながら…

主の御手におまかせする日々はどこにおかれてもすばらしいし、どんな問題に遭遇しても無駄な事は全くありません。全ては主の御計画であり、責任者であられる主は荷を負われるからです。「日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな。神はわれらの救である。」（詩篇六八・一九）

主人が弱いと言っても、私の方がもっと弱かったのかも知れません。腎炎を起こして一ヶ月も入院したり、この時は主人は一人暮らしの経験ができて良かったと思いました。昭和六十一年、私が待ちこがれた退職を迎えました。第二の人生に大きな希望を持っていた私を迎えてくれたのは病でした。第一の望みは、主人と共に先づ全ての御集会に行きたい、信仰生活を第一にしてその上今までできなかった事をいろいろやりたい。欲ばっていた私はどんどん体調が降下し、鼻炎や咳になやまされながら、それでも集会には行かせて頂きました。今はよくわかります。主の御計画は私に一つの道を与え、第一の望みをかなえて下さるために一つの棘を与えられたのだと。「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。…あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイ六・二四）

喘息ですと言われて、なんだかだんだん動く事も苦しさを感じるようになっても、まだ病気の事が良くわからなくて、毎日がまんしながら生活していました。勿論祈っては主に支えられたからこのようにして居られたと思います。私はほんとに愚かでも主は全てを御存知だから大丈夫なのです。ある時私は、玄関と座敷の間の、しきいと柱の間の隙間が大分大きくなっているのに気付きました。主人に「この家は倒れそうよ、長くは居られないみたい」。と言うのは玄関に置いている書棚が重すぎ

たためで傾いて来たようです。主人と、「しっかりした家を探さないといけないかネー。」こんな会話の後間もなく、中島さんのマンションに入りませんかと言われたので、驚いてしまいました。主は私達の口に一言もないのに全て心の中まで見通していらっしゃる、まだ祈りになってないのに答えて下さるとは。六十三年七月に中原西二丁目マンションに住む事になりました。主人は七十七才、大分衰えを感じていましたが、引越しは又子供達が皆で行ってくれたので植木鉢まで引越す事ができました。一階で庭があり、広い部屋に二人でこんなすばらしい所に住まわして頂けるとは考えてもみなかった事です。計り知れない霊の恵みに加えて、現実の住いの上に現して下さる恵みの数々、上より下さったご褒美でしょうか。もともと地位も名誉も財産も健康も何一つない私達、ほんとに無一物（主人の好きなことば）から始まった天幕の生活をどんなに感謝しても足りないと思います。工大前駅のホームまで五分、冬の寒さも、集会から帰る時駅についたらもう家に帰りついた気分だと、喜んで度々言わずにおれないのです。こうして、遂に平成元年を迎えた頃から主人は急に健康が衰えました。平成二年には私自身が、喘息で呼吸が止まるかと思う程の発作で急救病院に行ったまま入院。一ヶ月間、おかげで元気にして頂きましたが、主人を一人留守居させている方が心配でした。そこでやっと喘息について知識を与えられ、絶対がまんしてはいけないときびしく教えられました。お互い主がバランス良く弱きを備えて解り合えるように共に歩ませて下さいます。主に従って、これはどうなのかと一歩下って歩くことは、何か後手々々に廻っているような思いになりますが、やはり主の備えられる時を待つことは最善な道であると信じます。主の御手に従っている時、手おくれだったと言う事はないからです。平成三年、堤先生のお世話で、遂に主人が入院する事になりましたが、この時も主が導いて下さった最善の時でした。後もどりになりますが、平成二年も春から夏にかけて弱って、海老津の御集会を休ませて頂ましたが、十一月七日、十四日、二十一日、二十八日海老津に行かせて頂いたのです。希望を持って、これから又いつまでか主は使わして下さるであろうと主人は思っていたと想いましたが、主の御計画は二十八日で終りでした。海老津最後のお証しのノートにより、私は改めて感謝します。

「イスラエルよ、あなたはしあわせである。だれがあなたのように、主に救われた民があるであろうか。」

（申命記三三・二九）

「主よ、あなたは世々われらのすみかでいらせられる。」

（詩篇九〇・一）

自らの心からの証で、彼の地での最後を終らせられた、ほん

とに幸な主人だったと思います。十二月二日に私が弟の息子の結婚式に参りました。土曜日に電話した時、「元気だよ、心配しないで良い」と言っていたのに、私も気になるのでなるべく早く帰りたいと、日曜日夜九時頃帰りついたと思いますが、主人の帰りが遅いので祈りながら待ちました。十一時頃でしたか、林兄の車で帰って来た主人は、ころんでけがをしたとか。たった一晩私が留守をしたばかりでこんな事がとつい思いましたが…

肋骨のところがはれて痛いので、骨が折れていると私は思いました。家にあったシップをして何とか一晩過ごしました。主人はお祈りしてもらって来たから大丈夫だと言います。私が先に帰っていた事を感謝しました。骨は二本折れていましたが、十二月末頃には何とか繋がったようでした。平成二年も多難な一年でしたが、新年の標語も書かして頂き、主が与えられた全ての御用を主御自身がささえて下さり、クリスマスキャロルには先生始め多くの兄弟姉妹が訪れて下さって、私達には多難どころか何もなかったら知る事のできない大いなる幸の一年でした。主が言われるとおり、「あなたはさいわいである」。身体は次第に弱さが加わるので、どこに行くにもタクシーでなければ動けませんが、何とか礼拝も守らせて頂けます。家では椅子によりかかり、テレビ見たり、主とのお交わりの時は自分の部屋でしっかりとしていました。仕事はできませんが寝たっきりにはならなかった。極めて自由に過ごさせて頂いたのは幸な事です。平成三年六月、入院するまでそんな状態を続けていたのです。やはり呼吸不全なので動くのは困難でした。主をわれらのすみかとする生活、入院中もそこが主のすみかなれば恐れはありません。もう食事もたべられなくなった頃、

「僕は何もいらないよ、イエス様だけで良いのだ」と言って、静かな平安の中にベットに座っていた姿、たんが切れにくく苦しいけれど、顔に苦しさがでないのも主が支えて下さっていたからでしょう。九月八日に礼拝を捧げ、九日に天のみ國に帰らせて頂いた主人は、何と幸な人だったかと思います。マンションに住わせて頂き、弱きを覚える日々でも全ての必要な力は全能者なる主が豊かに注いで下さる、自分の力による生活でない、全く主によって生かされている生活を私は主人と共に歩き見せて頂いたので、大いなる感謝に溢れます。主が私に一人での生活の備えをして下さいました。平安を与え希望を与えるとお約束下さった主により、命の力が与えられ、ここにおける五年余の生活は、主人と暮した最後の家、そして別れの家でもあり、私の一人歩きの為の信仰の基礎を整えて下さった大切な場となり、深く感謝致しております。主人のものの整理や雑用におわれている時、私は一人でない事を肌で感じ取ります。主が共に居て下さる、これは絶対です。そして主人は生前は見える者だ

から主人と私別々の者が今は一つとなった。世の人は三年もすれば忘れると言いますが、悲しみがうすれる事でしょうか。私はそうは思えないのです。なぜか、淋しい、悲しいという思いがなかったから、たしかに内に一緒に居る。実感です。信仰は一人一人のものである事をしかと身に覚え、心に止めさせて頂きました。

何年前にこの公団が建てられたか覚えませんが、その頃ここに入居できたら良いなーと思ったものですが、傾斜家賃でまだ家賃が上がると知れば、高峯の花だと頭からあきらめておりました。今これが現実になるとは、神様の御計画に只々感謝の言葉も出ない程でございます。転居を決めた時、教会の近くにと第一条件を定め、子供達に話し、早速資料を取ってもらいました。私の希望する所は順番待ちで、私は四番目だとの事、一応受け付けてもらいました。六万円程の家賃ですが、交通費を考えれば変らないので、先づ神様の導きを待とうと思いました。始めのうちは主に信頼してきっと主が聞いて下さると信じ待ち望んでいました。しかしどうでしょう。やはり日がたつにつれ信仰なるものはしぼんでゆくのをどうする事もできないのです。

祈っては「大丈夫だ。」、と暫くは良いのですが、周囲から「おかあさん、ほかもあたっているからネ」など声がかかると、気持が動き出します。公団はやはり駄目かも知れないなー。四番目なんだから前の三人が同時にキャンセルなんてとてもないだろう。でもまだ一寸日はあるから、公団を中心で行くからあわてないで良いと、一応ことわります。こんな状態が続き乍らやがて半年近くなった頃、春の町に良いマンションがあると言って来た。公団を延々と待ってもほんとにいつの事かわからないし、又申し込みをやりなおすのもめんどうだし、荷造りした箱が部屋一杯になっているし、荷物の中に寝泊まりしているより早く落ち付きたいと思う心もあって、遂に頼んでしまったのです。

一応了解して下さったと聞いた夜、突然高齢者の一人暮しは駄目だと言って来たとの事、私はさすがにショックでした。高齢者には違いないけれど、それでも一人でちゃんと生活しているではないか。この世は高齢者を駄目人間と思って居るのか、福祉とか言ってるけど本根は困った問題なのだ！と、少々腹を立てて見たりしていました。「世間はどう思っていても私は主が共にいて下さる」と、主に目を向けさせて頂く時、神には何でもできない事はないと言われる主が、私一人の住いを下さらない事があろうかと信じ、又望みを主に置く事が出来ました。次の日、電話でＯＫしてもらったからすぐ内金を入れた方が良いよと言ってきた。丁度社長を知っている友達が居たから頼んでもらったそうだ。こうして、十月中頃引越す事に決めていま

した。規約書を読んでみたら、人間関係を大切にする事、毎月住人で敷地周辺の清掃がある事等々…どこでもある事だけれど、考えてみれば若い人ばかりの中で交わって行くのも気が重い感じもする。生活環境が変わるのも大変だと思い乍ら、これも神様のみ旨ならば、そこで恵んで下さるのだろうから今から思いわずらう事はすまい。少しの不安を持ちながら、神様のみ旨ならば喜んでお従いするはずなのに、何かこの不安は無理があるのだろうか？わたしは何かわからない、しかたがない様な気持が残ります。いよいよ引越しが近づいた或る日、夕方ポストをのぞくと一通の封書がありました。事務的なものです。公団からの封筒でした。急いで開封、同時に驚きとまどいました。部屋があきましたので、入居される様でしたら明日午前中までに電話で返事を下さい、と書いてありました。もう四、五日早かったら私は手離しで喜んだでしょうに。「なぜ今頃」何かと骨折ってくれた人達に何とことわれば良いのだろうか？

主よ私はどうしたら良いのでしょうか。このまま黙って計画を進めてしまえば今は悩まないで良いかも知れないが、神様はなやませて下さいました。私は何遍も書類を見ながら「なぜ今頃なのか？私はこの事を決める直前にも公団に問い合わせました。その時も四番目は動いてないと聞いたから決めたのです。」ぶつぶつ言いながらやっと先生に電話しようと気がついたのです。先生は「良かったですね」と言われましたが、私の悩んでいる事をお話ししましたら、「長い目で見たらやはり公団の方が良いのではないですか」とおっしゃったので、勇気を出して、言いにくいけれど断ってもらおうと決めました。私はとても勇気等ないので祈ってと思っている時、すぐ先生からお電話があり、「あなたは人の事に気をつかいすぎるから、その事が心配だったから祈り返し電話したのですよ。間違ってはいけないからその事が言いたかったから」、とおっしゃって下さいました。何か私の目が開かれた様にいよいよはっきり決断がついてしまいました。「よし、感情がもつれたとしても、交わりがなくなったとしても良い。私は神様のみ旨に従おう、人に迷わされる事がないように歩こう」と。この事を主は教えて下さる為に、「なぜ今頃」という事をもって主の時を示して下さった。その時には、深い大きい意味があり、恵みの時である事を…。

こうして一人歩きの道を一つ一つ教えられ固めて頂き、十月末、公団住宅の住人とならして頂く事ができました。毎朝目の前にそびえる皿倉山の美しい景色を眺め、「わたしは山にむかって目をあげる。わが助けは、どこから来るであろうか。わが助けは、天と地を造られた主から来る。」（詩篇一二一・一―八）

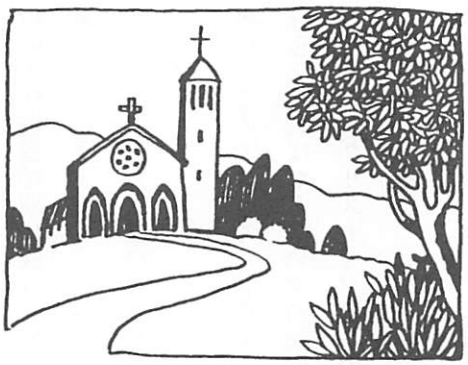
〔聖書　お読み下さい。〕

教会堂まで五分。霊肉共に弱い私に、こんな最高な生活を与

えて準備して下さっていた主に、尽きない感謝をお捧げ致しております。この次の転居先！決まっております。期日はわかりませんがときめきを覚えます。

「あなたは善にして善を行われます。あなたの定めをわたしに教えてください。」

（詩篇一一九・六八）



【参考資料】

結婚問題について

私共が生活して居る現実の世の中には、根強い因襲や習慣、しきたり等が根強く残って、今もどうあるべきか？どうすべきか、判断に困る事が多々あります。現実のそう言う世の中で、主イエスの救いによって、聖書に従って信仰に活きる私共はどの様に処すべきか？を聖書を通して教えられ、主の前に喜ばれる歩みをつづける為に、出生・死・死後の世界について、明確な知識と判断を身に付け、世に勝つ、勝利の生涯を全うし度いと願って、信徒会例会で教えられて参りました。既に「キリスト教葬儀の心得」、「キリスト教結婚式の常識」が出来て、教会ホールに在る本棚に、一部ずつ用意してあります。御希望の方は信徒会の広田寿兄へ御申込下されば実費で差上げます。

ここに取り上げましたのは「結婚問題について」の資料として、私がエーチ師から頂いた手紙を公開しました。主に在る私共の生活姿勢が問われて居る様に思います。祈って、良く読んで頂き、自分の結婚生活の在り方、子供達の結婚の在らねばならない事等、学ばせて頂き、主の聖前に立つ日を、喜びと希望をもって迎え度いと願います。

『エーチ師の手紙　一九三四年十月十一日　台湾にて』

（前文省略）

〇〇さんの長女について、一言伝え度いのです。

彼女は、日本の習慣でいわゆる結婚適齢期に成ります。私はこう考えます。日本では、適齢期に結婚すると言う事は単なる習慣ではなく、守らなければならない重大な義務とされて居る様に思います。

然し、忘れてならない事はどこの国のどんな習慣も、どんな根強いものであっても、守らなければならない神の法則ではありません。それはこの世のもので、クリスチャンはこの世のものではありません。事実、信者は世に従うな（ローマ一二・二―三）、又この世を愛するな（Ⅰヨハネ二・一五）、と命じられて居ます。その事は救い主が明らかに教えて下さって居ます。

（マタイ一九・一―一二）

キリストの心を心とした使徒パウロも、Ⅰコリント七で教えているように、クリスチャンは、信仰生活を全うするために、結婚してもしなくても自由です。そして彼等が感情が燃え上がらない様に自制出来るなら、結婚するより、パウロの様に独身で主に仕える様に導かれているのでしょう。

多くの人々では無いが、この様に自分を制して、罪におちいらないために結婚しない人々もあります。何故キリストの教えに反して迄も、世の習慣に従って結婚しなければならないのですか？これは良くない、世より先に先ずキリストを自分の前に置かなければなりません。

世が私達を嫌っても、またそのために迫害されても、私達はキリストに従うのです。この世は私達より先にキリストを嫌いました。私達もキリストと共に迫害を甘んじて受けるのです。それでなければクリスチャンではありません。終りの日に、主も私達を知らないと言われます。（ヨハネ一五・一八―一九、マタイ一〇・三七―三九）

娘さんについて思い悩むのではなく、むしろ、神の御手に委ねて祈りの課題とする事をおすすめします。（ピリピ四・六―七）主はその祈りを聞き、必要で良いと主がお定め下さるなら、最も良い時にふさわしいクリスチャンの彼を備えて下さるでしょう。従順なクリスチャン婦人は、不信者と結婚する事は出来ません。（Ⅱコリント六・一四―一六）

私自身の考えは、娘さんは速やかに成長されますから、出来る事なら二～三年結婚を延期して、能力を蓄え、キリストの教会で、クリスチャン婦人としての働きに適応する様に、もっともっと自身を充実する事が、結婚して居ても、キリストと結婚して独身であっても、彼女に取って益であると考えます。

（原文は英文）

≪エーチ師については、柘植不知人著『ペンテコステ前後』に、次のとおり記されています。≫

第十七章　台湾伝道旅行の土産

なんじらはわが証人(あかしびと)なり　(イザヤ四四・八)

エーチ宣教師

台湾伝道旅行中に宣教師エーチ師に交わることを得て大いなる感化を受けた。師は英人にしてその家族はカナダに現住せらる。師はカナダにて大学を卒え、更に学者として世に立たんとてドイツに留学中、或る熱心なる信者の家庭に寄寓して居る時に感化を受け、更に恵まれて後日本に宣教者として遣わさる。かく使命を受け、研学を中止しカナダに帰り、許嫁の婦人があったが伝道者として召されたる以上は殉教するのであるから、寧ろ結婚せざる方、相方の幸福なるべしと、遂に破約し、単身日本に渡られた。横浜に着した時所持金約八百円ほどであったが、任地に着いた以上これも必要なしと思い某教会に悉く献げ、僅か月給十五円で逓信省に雇われて自活の道を開き、日本語を学んだ。その後北陸に伝道し、更に大和に転戦し、全く献身的奉仕をなし居らるる内に台湾生蕃(せいばん)伝道の必要を示され、遂に渡台して各地に転戦し、台湾語及び生蕃語を学び、今は交通尤も不便な東海岸に移り生蕃伝道のため尽粋し居らるる人である。

師は台湾各地を回り、台湾人及び生蕃中に入るには衣食住の途に鍛練する必要を感じ、先ず洋食を廃止し、日本食をも求めず、その至る所にて与えらるる儘に足れりとして生活の鍛練をなし、遂に二週間位絶食を続けても別に不自由を感ぜずと云う。時にはパンを食することあれども多くは土産の果物を以て常食として居られる。而して彼は入浴することなく毎朝未明に起きて冷水を浴びるを以てこれに代えて居られる。又散髪屋に行くことなく髪は伸びるがままにしあまり長くなる時は自分で切り取る。又一定の住家を持たず、或いは人の客となり、或いは野に臥し少しの不自由なしと云う。而して二、三里の道は汽車があっても徒歩する習慣である。身体は痩せ細くして壮健、一見神の人らしき威風自ずから備わって居る。我等は初めて接した時からその人の普通人にあらざることを認め、敬虔の念自ずから生じ、斯かる神の器と偕に奉仕の機会を与えられたることは神の深き聖旨のあることと信じ、絶えず彼に教えを乞う態度を取った。

先ず彼は準備祈祷会の司会者として立ち、如何に司導せらるるかを見れば、極めて簡単にして例えば心の貧しき者は福なり天国はその人のものなればなりとの一句を引き、これを厳かに読み上げ、終わりて、皆さんこの通りに貧しくなって居ります

か、なって居れば天国はあなたのものですから感謝せよ、若しなって居らぬならば悔改めて御求めなさいと一言語って後数十分間黙して何事も語らない、暫時にして祈れよと云うが如き司導の仕方である。その語る所率直簡明なれども彼の態度そのものが活る説教となり一同大いに恵まれるに至る。

台南聖会中は同師自ら主として我等を接待せられたが彼自ら食品を買い求めて与えられた。食堂に至り見れば極めて少量のパンと鮭の缶詰一個あるのみ、彼は誠心（まごころ）もて、さあ、これを食べよと懇ろに進められたが常に牛飲馬食の我等には飢えを凌ぐに足らず、然どエーチ師は全く食欲に聖別され居り、何等申訳もせで我等に進めらるると共に只少量のパンを自分も取って食せらるるが、これ概ね我等の付合いに食せらるるように見受けた。この態度を見て我等は未だ食欲の聖別に遠きことを深く感じた。

そして師の生涯は斯くの如き聖別せられた人であるが何ほどの荷物を持って旅行せらるるかを見んとて同労者の一人、同師の宿泊し居らるる室に行き見れば只一個の小さきカバンがあったのみにして他に何ものも見なかった。彼の衣服は古惚けた洋服を着けたるのみにして、他に衣替（きがえ）一枚をも持たず、その衣食住に超越さられ居る生活を見て大いに教えらるる所があった。

目下彼は台湾の東海岸の尤も交通不便な所に至り、生蕃人伝道につとめ居らる。彼の無害な聖徒の姿は生蕃人にも認められ、今や彼は如何なる生蕃人の間にも出入りし、又時には彼等と寝食を共にして居らると云う、そもそも蕃人は人の首を取ることを名誉とし、よほど馴れたる蕃人も共に寝食する間に発作的に人を切り殺すことあり。例え今まで親密にして居ても何時凶行を敢えてするか計り難い。然ど師はその生蕃人の家に休みて少しの不安もなく、尤も寛ぎて安眠すると語られて居る。師の信仰如何に徹底せるかを見て我等の信仰尚薄弱なるを示された。そしてエーチ師の名声総督府の人々にも知られ、同師巡回の時は如何なる高位高官も同師を泊めることを光栄として居る。而して師は如何なる処に宿るとも概ねその家の食事をなさず、又湯にも入らず、何の手数もかけず、その家の祝福を祈って去ると云う、これが万人の歓迎する所以である。

（注：現代仮名遣いになおしています）

編集後記

。「わたしは何者なので、かえりみられているのか」、と心の風景に。主の深き御愛に、ただ感謝。

。のぞみはうせ、詮方つきれど、なお、御業をなし賜う「神様の栄光」。神の思いの、人の思いと異なることを教えられる。

。困難な中にあっても、たたかいの中にあっても、「心を騒がせないがよい」、と仰せ下さる主。すべてを委ね、平安を与えられた者の幸い。

。主の訓練によって教えられるみ旨。寄り頼むべき聖言とそれによって与えられる希望。「平安な義の実」を結ばせて頂く喜び。

。大変遅くなってしまいましたが、「ぶどうの木」第二十二号をお届けします。